

福岡市埋蔵文化財年報 VOL.25

— 平成22(2010)年度版 —



2011

福岡市教育委員会



序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

本書は、平成22年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する事前審査及び緊急調査件数は、平成12年度をピークに減少しましたが、平成15年度から一転して増加に転じ、平成18年以降微増・微減を繰り返していました。ところが22年度は届出、照会とも民間事業は急増、公共事業も微増となっています。これは経済状況を反映したものなのでしょうか。ただ、一件あたりの規模は、民間、公共を問わず小規模化しております。今後とも埋蔵文化財保護業務について適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料として活用いただければ幸いです。

平成23年10月31日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 蘭彦

例 言

- ・本書は、埋蔵文化財第1課・第2課、文化財整備課が平成22年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
- ・本書に記載ある22年度調査のうち、調査番号1003.1005.1024.1030.1044.1045調査は、この年報をもって本報告とする。その他については別途、本報告書が刊行される予定であり、刊行予定年度については各概要の文末に記載している。
- ・Vの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。Vについては文化財整備課（大庭康時、比佐陽一郎、水野哲雄）が執筆した。
- ・上記以外の執筆並びに本書の編集は宮井善朗が担当した。

表紙写真：元岡・桑原遺跡群第55次（元岡古墳群G1号墳）現地説明会風景と岸田遺跡第1次調査出土副葬品

目 次

- I 平成22年度文化財部の組織と分掌事務 2
- II 開発事前審査 3
- III 発掘調査 8
- IV 公開活動 12
- V 平成22年度発掘調査概要および報告 14
- VI 平成22年度新指定文化財 77
- 報告書抄録 87

I 平成22年度文化財部の組織と分掌事務

文化財部の組織と分掌事務

文化財部 52

文化財整備課 13

- 運用係（事3・文1） 部の総括、文化財施設の管理
- 主査（文1） 文化財行政企画担当
- 主査（文1） 歴史町づくり推進事業担当
- 整備第1係（文2事1） 文化財指定、史跡の指定・保存・整備
- 整備第2係（文2事1） 福岡城及び鴻臚館跡の調査・整備

課 長(学1) 2

- (学1) 文化財調査等

埋蔵文化財第1課 8

- 事前審査係（文3） 公共及び民間開発事業に係る事前審査
- 主任文化財主事（文1） 課の庶務、第1・2課の予算・決算
- 管理係（事3）

埋蔵文化財第2課 22

- 調査第1係（文6） 課の庶務、東部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
- 主任文化財主事（文4）
- 調査第2係（文6） 国庫補助事業総括、西部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
- 主任文化財主事（文3） 今宿古墳群保存担当
- 主査（文1）

埋蔵文化財センター 7

- 運営係（文3事2） 施設の管理運営、考古学的資料の収集・保存・展示
- 主任文化財主事（文1）

事：事務職 文：文化財専門職 学：文化学芸職

埋蔵文化財第1,2課の職員構成（第1課管理係は事務職。他は文化財専門職）

◇埋蔵文化財第1課長	濱石哲也	◇埋蔵文化財第2課長	田中壽夫
管理係長	田中龍三郎	調査第1係長	米倉秀紀
係員	古賀とも子 井上幸江	係員（文化財主事）	屋山洋 大塚紀宜 藏富士寛
事前審査係長	宮井善朗		今井隆博 松尾奈緒子 比嘉えりか
係員（文化財主事）	阿部泰之 木下博文	主任文化財主事	小林義彦 佐藤一郎 楢本義嗣
主任文化財主事	加藤良彦	調査第2係長	菅波正人
		係員（文化財主事）	瀧本正志 加藤隆也 森本幹彦
		主任文化財主事	板倉有大 松村道博
		主査（今宿古墳群担当）	山崎龍雄 吉留秀敏 長家伸
			杉山富雄

II 開発事前審査

1. 概要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく1,000m²以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めている。また建築等の計画策定期段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。

2. 平成22年度の事前審査

平成22年度の開発事業等に伴う事前審査件数は、表1のとおりである。昨年度に比べて公共事業は減少したが、民間事業は大幅に増加した。景気の回復の兆しを見せていたものと考えられる。ただし昨年度末の東日本大震災により、公共事業、民間事業とも影響があると思われる。動向を注視していただきたい。

申請内容

公共事業に伴う依頼195件の内訳は表3のとおりである。これを事業者別に見ると国機関11件（6%）、福岡県12件（6%）、福岡市168件（86%）、その他4件（2%）、西日本電信電話株式会社、郵便事業株式会社各1件、九州旅客鉄道2件*であり、福岡市各部局事業が大半を占める。事業別に見ると水道など80（41%）、道路42（22%）、学校関係18（9%）、公園14（7%）、空港関係6（3%）、住宅を含めた建物17（9%）、この中には94条対応のJR九州が経営する店舗を含む。そのほかの開発が6件（3%）ある。このほか近年目立っている公有財産の売却や、これに関連した所管換え、物納物件等の土地調査にかかる事前審査依頼は12件（6%）であった。また空港関係が昨年に続き一定の割合を占めており、本年は空港滑走路拡幅に伴う公式の事前審査依頼も提出された。なお事業照会1,191件の事業別内訳は上下水道720件（60%）、道路177件（15%）、学校95件（8%）の上位3事業は昨年と変わらないが、2008年度より戸建住宅等の建築にともなう公共污水栓の設置工事が網羅的に通知されることになったため、水道等の割合が増加している。以下住宅を含めた建物54件（5%）、公園46件（4%）、と続き、昨年から増加の傾向を見せていた空港は18件（2%）を占めた。これ以外の事業は1%以下である。

民間事業1,184件の届出内容は、届出者別に見ると個人577件（49%）、一般企業368件（31%）、個人事業者181件（15%）、法人等の民間事業者58件（5%）となっている。全体の約三分の二を個人および個人事業者が占めている。事業別では個人住宅525件（44%）、共同住宅161件（15%）、これに戸建住宅や宅地造成など他の住宅関連事業をあわせると全体の74%を住宅が占める。事業者別とあわせてみると、個人住宅をはじめとした小規模住宅の比率が高い。住宅以外の事業としては店舗34件（3%）、その他の建物（事務所、診療所、福祉施設、倉庫等）80件（7%）となっている。また、区画整理計画地の事前の調査依頼が4件あった。なお、土地取引に伴う審査依頼は76件（6%）であった。

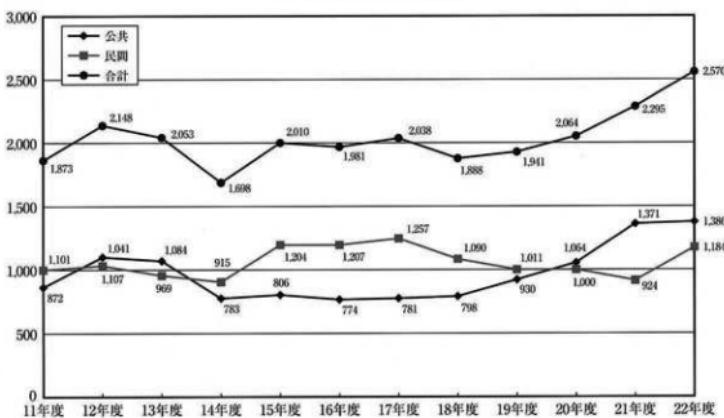
届出地を区別に見ると早良区252件（21%）が最も多く、博多区242件（20%）、西区240件（20%）がこれに次ぐ。以下南区181件（15%）、城南区158件（13%）、東区97件（8%）、中央区14件（1%）となっている。

* いざれも政令で定める国の機関等（法94条対応）に該当。

表1 平成8~19年度事前審査件数推移

事業	内 訳	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
公共	事業照会審査件数	872	1,107	1,084	783	671	662	668	665	769	862	1,143	1,191
	申請件数					135	112	113	133	161	202	228	195
	審査件数計	872	1,107	1,084	783	806	774	781	798	930	1,064	1,371	1,386
民間	窓口照会件数	2,832	3,597	4,540	4,662	4,292	5,842	6,126	8,309	7,226	6,144	5,555	6,225
	FAX照会件数						524	1,499	2,296	3,354	3,990	3,537	3,729
	照会件数計	2,832	3,597	4,540	4,662	4,816	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681	9,284	10,809
申請(審査)件数	1,001	1,041	969	915	1,204	1,207	1,257	1,090	1,011	1,000	924	1,184	
公・民審査件数計	1,873	2,148	2,053	1,698	2,010	1,981	2,038	1,888	1,941	2,064	2,295	2,570	

表2 事前審査件数推移表



指導内容

公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表3のとおりである。次年度継続、取り下げを除くと審査件数は1,447件である。総括的に見ると書類審査での回答1,093件(76%)、以下踏査15件(1%)、試掘339件(23%)で、審査結果は開発同意219件(15%)、慎重工事1,017件(70%)、工事立会160件(11%)、発掘調査50件(3%)、要協議(設計未定、売却予定で遺跡ありなど)1件である。

試掘調査・確認調査

包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地外で行われる試掘調査(以下試掘調査と総称する)は総計371件で、試掘した遺跡は135遺跡である。また包蔵地外の試掘のうち隣接地に当たる遺跡は62遺跡であった。試掘件数は昨年に比べて大幅に増加した。特に都心部である博多区の回復が著しい。

各区分、事業別の内訳は表4のとおりである。10件以上試掘した遺跡としては有田遺跡群(13件)、博多遺跡群(12件)があげられ、那珂遺跡群(7件)、比恵遺跡群(8件)は10ヶ所に届かなかった。昨年度から減少が著しい博多遺跡群での試掘が12件とやや持ち直した。しかし個人住宅、個人事業が9件と大半を占め、いまだ都心部の開発が復調するまでには至っていない。

このほか、平成20年度に引き続き、福岡空港内の夜間試掘を行った。形式的には20年度同様工事立会の形を取ったが、今回は雀居遺跡周辺を中心に、やや細かくトレンチを入れた。結果、雀居遺跡から続く集落は

表3 平成21年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別(書類審査・現地踏査・試掘調査)でみた判断指示の結果														照会件数 (*)				
		開発同意		慎重工事		工事立会		発掘調査		協議		審査		取り扱い						
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	継続	下げ	公民別計	区計			
東	公共	2	0	3	7	0	0	6	0	0	0	0	1	0	0	0	19	116	223	
	民間	14	1	7	54	0	9	4	0	2	1	0	2	0	0	0	1	2	1,662	
博多	公共	8	0	1	27	1	2	14	0	1	0	0	4	0	0	0	1	0	301	240
	民間	13	0	12	100	0	48	18	0	21	3	1	15	0	0	0	8	3		1,951
中央	公共	2	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	22	126
	民間	0	0	0	8	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0		1,719
南	公共	4	0	0	5	1	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	15	193
	民間	16	1	9	97	4	31	12	0	3	0	0	6	0	0	0	2	1		1,767
城南	公共	1	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	162	124
	民間	22	0	15	88	1	21	5	0	3	2	0	0	0	0	0	0	1		1,010
早良	公共	3	0	2	28	1	2	7	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	297	146
	民間	19	0	13	158	0	32	11	0	8	5	0	3	0	0	0	3	0		1,490
西	公共	1	0	3	7	0	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	261	139
	民間	34	0	12	127	3	36	13	0	4	2	1	3	0	0	0	2	3		1,205
小計	公共	21	0	10	81	3	6	35	0	1	2	0	4	1	0	0	6	1	1,379	1,191
	民間	118	2	68	632	8	180	65	0	41	13	2	29	0	0	0	15	11		10,809
道路下水道局(**)																総計				
合計		139	2	78	820	11	186	118	0	42	15	2	33	1	0	0	21	12		

(*) 照会の公共は事業用合併件数。民間は市立1件とFAX照会の合計(小字には市不明4件、市外1件を含む)。

(**) 道路下水道局の公共污水井は複数案件が一括提出されるため、総件数と、審査結果の内訳のみを示す。

確認できなかったが、広範間に水田遺構が確認された。これに基づき今後の協議を継続していく予定である。この傾向は23年度以降も継続する。

窓口等黒会

民間業者等による窓口における埋蔵文化財の有無に係わる照会等は6,225件、ファックスでの照会は4,584件、民間照会あわせて10,809件である。昨年より約1,500件の増加である。各区分の内訳は表3のとおりで、各区とも1,000件を超えており、最多の博多区と最小の城南区の差は約1,000件である。またファックス照会では、包蔵地外が3,298件(72%)、包蔵地内が974件(21%)、隣接地が312件(7%)であった。この比率は過去3年ほど類似している。たとえば市内の各エリアの比率など何らかの事情を反映している可能性がある。

3. 埋蔵文化財包蔵地の改訂

試掘調査や踏査、また発掘調査などの結果に基づき、23遺跡で埋蔵文化財包蔵地の範囲改訂を行った。平成20年度に新たに発見、登録されたのは2遺跡である。都心部である博多区美野島において公園建設に先立つ試掘を行ったところ、縄文時代晩期の包含層を検出したため、美野島遺跡として登録した。また、博多区井相田において、水城東門ルートに近い地点を麦野C遺跡隣接地として試掘を行ったところ、官道にかかる可能性がある溝が検出された。これに伴い、このルートに沿い、かつ包蔵地指定されていない範囲を井相田E遺跡として登録し、将来の官道の解明に備えることとした。遺跡の範囲拡大は2件、縮小は5件であり、18件で隣接地の解除を行った(縮小・隣接解除は重複あり)。範囲変更で注目されるのは、箱崎の九州大学構内の試掘により、砂丘がかなり良好に残っていることが確認され、元寇防壁推定線以東の範囲を箱崎遺跡として範囲拡大したことである。これにより、将来の跡地利用についても適切な対応が可能となった。包蔵地の改訂作業は実情に近い分布地図の作成に不可欠であり、とくに遺跡が認められない範囲を除却し、包蔵地範囲を確定する作業は事前審査業務の効率化にもかかわってくる。今後は範囲確認を見えた戦略的な試掘も考慮していく必要があろう。

表4 試掘調査件数集計

東区
試掘結果と指示事項

	指示事項(包蔵地内)				指示事項(包蔵地外・隣接)				
	小計	傾重工事	工事立会	発掘調査	小計	傾重工事	工事立会	発掘調査	開発同意
造構あり	6	1	2	3	0				
造構なし	8	8			8				8
内・外各小計	14				8				
合計	22								

公・民・事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
								公共事業 民間事業
公共事業	造構あり 4				1	1		1 1
	造構なし 0							
	個人住宅 共同住宅 戸建住宅			店舗	その他の施設	造成など	売買	その他
民間事業	造構あり 6	1	3					2
	造構なし 19	13	7	3				1 2
合計								

博多区

101 件

試掘結果と指示事項

	指示事項(包蔵地内)				指示事項(包蔵地外・隣接)				
	小計	傾重工事	工事立会	発掘調査	小計	傾重工事	工事立会	発掘調査	開発同意
造構あり	40	7	15	18	3		2	1	
造構なし	45	44	1		13				13
内・外各小計	85				16				
合計	101								

公・民・事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
								公共事業 民間事業
公共事業	造構あり 8	1			2			3 2
	造構なし 3							2 1
	個人住宅 共同住宅 戸建住宅			店舗	その他の施設	造成など	売買	その他
民間事業	造構あり 35	14	7		5	3		3 3
	造構なし 90	55	17	13	3	2	7	10 3
合計								

中央区
試掘結果と指示事項

	指示事項(包蔵地内)				指示事項(包蔵地外・隣接)				
	小計	傾重工事	工事立会	発掘調査	小計	傾重工事	工事立会	発掘調査	開発同意
造構あり	0				0				
造構なし	3	3			1				1
内・外各小計	3				1				
合計	4								

公・民・事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
								公共事業 民間事業
公共事業	造構あり 0							
	造構なし 1	1						1
	個人住宅 共同住宅 戸建住宅			店舗	その他の施設	造成など	売買	その他
民間事業	造構あり 0							
	造構なし 3	3	1	1		1		
合計								

南区

60 件

試掘結果と指示事項

	指示事項(包蔵地内)				指示事項(包蔵地外・隣接)				
	小計	傾重工事	工事立会	発掘調査	小計	傾重工事	工事立会	発掘調査	開発同意
造構あり	13	3	5	5	1				
造構なし	33	33			13				13
内・外各小計	46				14				
合計	60								

公・民・事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
								公共事業 民間事業
公共事業	造構あり 0							
	造構なし 2	2	1					1
	個人住宅 共同住宅 戸建住宅			店舗	その他の施設	造成など	売買	その他
民間事業	造構あり 14	4	2		4	1	1	2
	造構なし 58	44	18	3	5	2	1	11
合計								

城南区
試験結果と指示事項

42 件

指示事項（包蔵地内）				指示事項（包蔵地外・隣接）			
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査
道構あり	4		3	1	0		
道構なし	22	22			16		
内・外各小計	26				16		
合計	42						

公・民、事業別

		道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	道構あり	0							
	道構なし	1							1
民間事業	道構あり	4	1	1	1				1
	道構なし	41	37	18	3	3	1	2	9

早農区 67 件

試験結果と指示事項

指示事項（包蔵地内）				指示事項（包蔵地外・隣接）			
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査
道構あり	15	3	7	5	0		
道構なし	35	35			17		
内・外各小計	50				17		
合計	67						

公・民、事業別

		道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	道構あり	1	1						
	道構なし	8	3			1		1	3
民間事業	道構あり	14	6	1	2		1	1	2
	道構なし	58	44	15	8	5	2	3	8

西区 74 件

試験結果と指示事項

指示事項（包蔵地内）				指示事項（包蔵地外・隣接）			
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査
道構あり	14		6	8	0		
道構なし	42	42			18		
内・外各小計	56				18		
合計	74						

公・民、事業別

		道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	圃場整備 区画整理	売買	その他
公共事業	道構あり	4	2				2		
	道構なし	16	4			3	3	1	5
民間事業	道構あり	10	3			1	1		5
	道構なし	54	44	14	6	8	1	2	7

全区合計 371 件（駅続中の大規模試験を含む）

試験結果と指示事項

指示事項（包蔵地内）				指示事項（包蔵地外・隣接）			
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査
道構あり	92	14	38	40	4	0	2
道構なし	188	187	1	0	86	0	0
内・外各小計	280				90		
合計	370						

公・民、事業別

		道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	圃場整備 区画整理	売買	その他
公共事業	道構あり	17	4	1	3	0	2	4	3
	道構なし	48	8	0	4	0	3	7	9
民間事業	道構あり	83	29	14	6	6	1	10	9
	道構なし	323	90	37	24	7	16	46	9

III 発掘調査

1. 平成22年度の発掘調査

市域内で実施された本年度の発掘調査件数は、表9に示したように20、21年度からの継続事業が5件、22年度新規事業が45件の計50件である。このうち4件が平成23年度に継続した。この発掘件数には文化財保護法第93、94条に基づく記録保存のための発掘調査46件のほか、重要遺跡確認調査1件（1041）、史跡整備工事に伴う調査3件（1013,1037,1042）の、あわせて4件も含んでいる。

50件の発掘調査総面積は46,934m²で、前年度に比べ約1,444m²減少した（表6・表7右）。公民別では公共事業が32,030m²（うち圃場整備11,021m²）、民間事業が14,804m²であり、公共が68%を占め、昨年の比率とはほぼ同じである。民間事業総面積は前年比約5%減少し、公共事業は約2%の減少となった。個々の発掘調査の面積は、100m²以下が9件、101～300m²が19件、301～500m²が5件、501～1,000m²が4件、1,001m²～10,000m²が13件、10,000m²以上の調査は今年度はなかった。昨年度に引き続き圃場整備、区画整理等の調査があり、1,000m²以上の調査が26%と昨年度並みを占める。しかし300m²以下の小規模調査も28件（56%）で、昨年の24件（48%）より増加している。発掘調査で調査面積が最も狭いのは有田遺跡群第237次（1032）で、駐車場整備に伴う切下げ部分のみの24m²の調査であった。最も広いのは原遺跡第26次（1017）の4,130m²である。2008年度から年度を越える調査でも各年の調査面積を算出しており、今年度調査の平均調査面積は939m²（21年度965m²）で昨年よりわずかに減少している。公民別では民間493m²、公共1,601m²であり昨年より格差が広がっている。また博多遺跡群、箱崎遺跡などでは遺構面積が複数あり、これを面ごとに調査しているため、実際の発掘面積は増加する。

調査地点を区別に見ると（表7中）、博多区が最も多く17件（21年度13件）、早良区11件（同11件）、西区10件（同14件）、東区5件（同6件）、南区4件（同5件）、中央区2件（同1件）、城南区1件（同0件）と続く。昨年と比べると博多区が増加、西区が減少しているほかはほぼ昨年並みである。昨年21年ぶりに首位をあけた博多区は1年で復活した。都心部の調査も博多遺跡群は昨年と同じ1件であるが、比恵遺跡群が4件（昨年1件）と、やや増加している。西区は伊都地区区画整理事業、九州大学移転事業など大規模開発に伴う継続調査が大部分を占める。早良区では有田遺跡群のほか原遺跡、長峰地区で大規模調査が行われ、大きな成果が得られた。予算別（表8）では、国庫補助を受けた事業が28件（国補12件、国補+民間受託12件、国補+令達4件）、公共受託事業が4件、民間受託事業が10件、令達事業が8件である。昨年に比べると補助事業が若干増加した以外、他の事業はほぼ横ばいである。

以上のように22年度は21年度に引き続き発掘調査件数は低調のまま推移しており、若干余裕を持った調査、整理・報告ができた。しかし、昨年同様大規模調査が一定件数あり、年間を通じて現場にはりつく職員も相当数いた。また小規模事業が主体ながら都心部の開発に回復傾向もうかがわれる。小規模調査といえども協議等事前の準備が大幅に省力化できるわけではなく、また小規模事業者ほど時間的に逼迫しており、届出から調査着手までの期間に余裕がない場合が多いため、必ずしも事前審査、本調査それぞれの担当職員の負担が軽減されているとはいえない。またこのような状況は一時的なものと考えられるため、現体制の大幅な変更等には慎重であらねばならない。

22年度の調査一覧は前年度からの継続分も含め表9に示した。

表5 発掘調査件数の推移 ()前年度からの継続件数

事業	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
民間	67(0)	52(3)	52(3)	44(4)	38(0)	21(6)	30(0)
圃場整備	4(0)	4(2)	1(1)	0(0)	0(0)	4(0)	4(2)
公共	28(5)	27(6)	27(6)	33(4)	29(4)	25(3)	16(3)
合計	99(6)	83(11)	80(11)	77(8)	67(8)	50(9)	50(5)

表6 発掘調査面積の推移 (m²)

事業	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
民間	24,556	12,265	15,184	17,651	11,190	15,649	14,804
圃場整備	42,152	56,000	21,000	0	0	9,774	11,021
公共	43,568	22,708	56,530	48,729	33,099	22,856	21,009
合計	110,276	90,973	92,714	66,380	44,289	48,278	46,834

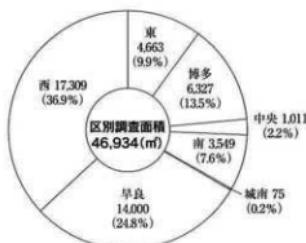
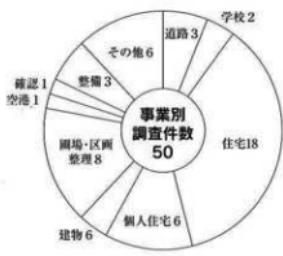


表7 発掘調査内訳

表8 平成20年度発掘調査総括表

区分	事業別	調査費用						県教委 民間	総計	
		令達	受託	補助事業			市単費	小計		
				補助	補助+民受	補助+令達				
東	公共	0	1	0	0	0	0	1	0	
	民間		1	0	3	0	0	4	0	
博多	公共	1	1	0	0	0	0	2	0	
	民間		6	3	6	0	0	15	0	
中央	公共	0	0	2	0	0	0	2	0	
	民間		0	0	0	0	0	0	0	
南	公共	1	0	0	0	0	0	1	0	
	民間		2	1	0	0	0	3	0	
城南	公共	0	0	0	0	0	0	0	0	
	民間		1	0	0	0	0	1	0	
早良	公共	3	0	0	0	3	0	6	0	
	民間		0	3	2	0	0	5	0	
西	公共	3	2	2	0	1	0	8	0	
	民間		0	1	1	0	0	2	0	
小計	公共	8	4	4	0	4	0	20	0	
	民間		10	8	12	0	0	30	0	
合計		8	14	12	12	4	0	50	0	

表9 平成22年度調査一覧（前年度からの継続含む）

調査番号	道路名	次数	地点	区	所在地	調査原因 事業者	予算 種別	申請面積 (m ²)	調査面積 (m ²)※	古 墳	調査開始 調査終了	担当者	審査番号	道路略号
0827	久保園道路	4		博多	東平尾 (福岡空港内)	空港整備 九州地方整備局	公受	7100	1740 (5140)		2008/7/18 2010/8/27	根本、 今井、 比嘉	19-1-161	KBZ
0905	松木田道路	4		早良	早良3、4丁目地内	圃場整備 福岡市農林水産局	国補 令達	190000	2736 (5626)		2009/4/15 2010/10/7	長家	19-1-38	MKD
0922	徳永B道路	3		西	大字徳永地内	土地区画整理 福岡市住宅都市局	令達		3430 (5930)		2009/9/7 2010/11/19	杉山	13-1-233	TOB
0930	岸田道路	1		早良	早良3、4丁目地内	圃場整備 福岡市農林水産局	国補 令達	5700	3039 (5775)		2009/10/27 2010/10/19	長家	19-1-38	KID
0932	徳永A道路	5		西	大字徳永地内	土地区画整理 福岡市住宅都市局	令達	2500	3460 (4700)		2009/1/5 継続中	森本	13-1-233	TOA
1001	元岡・桑原道路群	55		西	大字元岡字二又	学校建設 国立大学法人	公受	3800	3300	2	2010/4/1 継続中	吉留、 大塚	14-1-18	MOT
1002	金武音木B道路	2		西	大字金武地内	圃場整備 福岡市農林水産局	国補 令達	3500	2097		2010/4/1 2010/7/16	加藤	19-1-37	KAB
1003	井相田E道路	1		博多	井相IH3丁目8-1 他	老人ホーム 社会福祉法人	民受	72	360		2010/4/8 2010/4/23	本田	21-2-798	ISE
1004	比恵道路群	120		博多	博多駅南4丁目 31-5の一部	共同住宅 個人事業	国補 民受	170	166		2010/4/13 2010/5/20	小林	21-3-828	HIE
1005	五十川道路	19		南	五十川2丁目281-6	共同住宅 個人事業	国補	42	36		2010/4/14 2010/4/27	星山	21-2-861	GJK
1006	那珂道路群	127		博多	竹下5丁目10	公園整備 福岡市住宅都市局	令達	400	434		2010/4/19 2010/6/15	松尾	20-1-199	NAK
1007	那珂道路群	128		博多	東光寺町1丁目 376-1	共同住宅 個人事業	国補 民受	115	114		2010/5/6 2010/7/7	藏富士	21-2-914	NAK
1008	那珂道路群	129		博多	東光寺町1丁目 376-4	共同住宅 一般企業	民受	115	118		2010/6/1 2010/7/7	藏富士	21-2-915	NAK
1009	香椎A道路	7		東	香椎2丁目地内	道路建設 九州地方整備局	公受	2825	1548		2010/5/6 2010/10/26	佐藤	19-1-1	KSA
1010	中村町道路	5		南	野間3丁目160-3	共同住宅 一般企業	民受	650	650		2010/5/24 2010/8/20	星山	21-2-909	NMM
1011	箱崎道路	66		東	箱崎1丁目2699-1	共同住宅 個人事業	国補 民受	102	127		2010/6/4 2010/7/13	山崎	21-2-711	HKZ
1012	立花寺道路	8		博多	立花寺2丁目131-1	個人住宅 個人	国補	334	297		2010/6/7 2010/8/9	小林	22-2-81	RGG
1013	福岡城跡	62	鸿臘館 28次	中央	城内	史跡整備 福岡市教育委員会 文化財整備課	国補	1000	970		10/4/1 11/3/31	吉武		FUE
1014	香椎B道路	8		東	大字香椎字生水、 老の谷1361	宅地造成 奈総企業	国補 民受	3503	2651		2010/6/22 2010/11/19	瀧本、 大塚	20-3-35	KSBB
1015	那珂道路群	130		博多	那珂2丁目8788	共同住宅 個人事業	国補 民受	150	168		2010/6/30 2010/8/10	板倉		NAK
1016	比恵道路群	121		博多	博多駅南3丁目 466他6筆	事務所 一般企業	民受	370	360		2010/7/10 2010/8/10	松尾	22-2-146	TMR
1017	原道路	26		早良	原7丁目	公園整備 福岡市住宅都市局	令達	11000	4130		2010/8/2 2011/3/16	今井、 比嘉	21-1-181	HAA
1018	重留村下道路	6		早良	重留6丁目	道路接幅 福岡市道路下水道局	令達	217	131		2010/8/3 2010/10/2	山崎	20-1-88	SGM
1019	七曲古墳群	1		博多	大字立花寺字白石 28	防災工事 個人	国補	800	420	2	2010/8/9 2010/10/28	藏富士	22-2-234	NNMK
1020	乙石道路	4		西	大字金武地内	区画整理 組合	国補 民受	3760	3360		2010/8/10 2010/2/23	板倉	19-2-991	OTA
1021	卯内尺古墳群	2		南	老司3丁目545-2 他8筆	宅地造成 一般企業	民受	2700	2700		2010/8/20 2010/1/28	小林	22-2-453	UNK
1022	博多道路群	191		博多	冷泉町423,425	共同住宅 一般企業	民受	172	162		2010/9/2 2010/11/22	根本	21-2-286	HKT

調査番号	道跡名	次数	地点	区	所在地	調査原因 事業者	予算種別	申請面積 (m ²)	調査面積 (m ²)※	古墳	調査開始 調査終了	担当者	審査番号	道跡 略号
1023	比恵道跡群	122		博多	博多駅南4丁目202	共同住宅 一般企業	民受	537	120	2010/9/8 2010/9/22	屋山	22-2-310	HIE	
1024	クエゾノ道跡	3		早良	野町5丁目66-6	個人住宅 個人	国補	42	46	2010/9/13 2010/9/22	今井	22-2-495	KEZ	
1025	内野熊山道跡	1		早良	早良3、4丁目地内	福岡整備 福岡市農林水産局	国補 令達		3149	2010/9/16 2011/1/25	加藤	19-1-38	UKY	
1026	箱崎道跡	67		東	箱崎1丁目2805-1	共同住宅 一般企業	民受	572	271	2010/9/27 2010/12/17	松尾	22-2-313	HKZ	
1027	原道跡	27		早良	原8丁目	道路整備 福岡市道路下水道局	令達		295	2010/10/18 2010/11/30	山崎	21-1-225	HAA	
1028	千里道跡	2		西	大字千里字北田398-1	個人住宅 個人	国補	139	195	2010/10/18 2010/10/28	吉留	22-2-168	SNR	
1029	中村町道跡	6		南	若久1丁目11	公園整備 福岡市住宅都市局	令達	326	163	2010/10/26 2010/11/26	星山	22-1-51	NMM	
1030	片江B道跡	4		城南	片江1丁目1020-3,1026-3	戸建住宅 一般企業	民受	97	75	2010/10/29 2010/11/19	佐藤	22-2-400	KEB	
1031	有田道跡群	236		早良	有田2丁目14-34,35,10	個人住宅 個人	国補	110	113	2010/11/25 2010/12/28	藏富士	22-2-684	ART	
1032	有田道跡群	237		早良	有田1丁目20-1	駐車場 個人事業	国補 民受	23	23	2010/12/15 2010/12/28	佐藤	22-2-816	ART	
1033	有田道跡群	238		早良	有田1丁目3-13-12	共同住宅 個人事業	国補	341	243	2011/1/11 2011/2/25	屋山	22-2-833	ART	
1034	箱崎道跡	68		東	箱崎1丁目2930-4,2718-4	共同住宅 個人事業	国補 民受	82	66	2011/1/11 2011/2/14	板本	22-2-618	HKZ	
1035	女原笠掛道跡	2		西	大字女原字向原	区间整理 福岡市住宅都市局	令達		228 (501)	2011/1/13 継続中	瀧木	13-1-233	MRK	
1036	比恵道跡群	123		博多	博多駅南4丁目103	共同住宅 一般企業	民受	374	285	2011/1/17 2011/3/11	山崎	22-2-796	HIE	
1037	福岡城跡	63		中央	城内	史跡整備 福岡市教育委員会 文化財整備課	国補	41	41	2011/2/1 2011/3/25	常松		FUE	
1038	中ノ原道跡	5		博多	西春町4丁目1	切土造成 個人事業	国補 民受	991	650 (900)	2011/2/1 2011/4/16	小林	22-2-646	NNH	
1039	有田道跡群	239		早良	有田1丁目14-36	個人住宅 個人	国補	52	95	2011/2/1 2011/3/11	藏富士	22-2-905	ART	
1040	舟相田C道跡	9		博多	舟相田2丁目4-4A-17	共同住宅 個人事業	国補 民受	458	496	2011/2/7 2011/4/4	佐藤	22-2-620	ISC	
1041	谷上古墳群A群	4	A.8号塚	西	今宿上ノ原イヤソノ他	確認調査	国補 (重複)		95	1	2011/2/15 2011/3/25	杉山		TNK-A
1042	吉武道跡群	20		西	大字吉武220	史跡整備 福岡市教育委員会 文化財整備課	国補	700	844	2011/2/22 2011/3/25	大庭、 比佐、 舟上		YST	
1043	元岡・桑原道跡群	56		西	大字元岡字二又	学校建設 直近大学法人	公受	5920	300 (5000)	4	2010/9/14 継続中	大塚	14-1-18	MOT
1044	南八幡道跡	18		博多	元町1丁目7-1	共同住宅 専業企業	国補 民受	179	148	2011/3/1 2011/3/4	加藤	22-2-911	MHM	
1045	堅粕道跡	11		博多	堅粕3丁目573-1	個人住宅 個人	国補	50	39	2011/3/7 2011/3/8	長家	22-2-856	KKS	

*継続事業については平成22年度分の面積で、()内が調査総(予定)面積である。

IV 公開活動

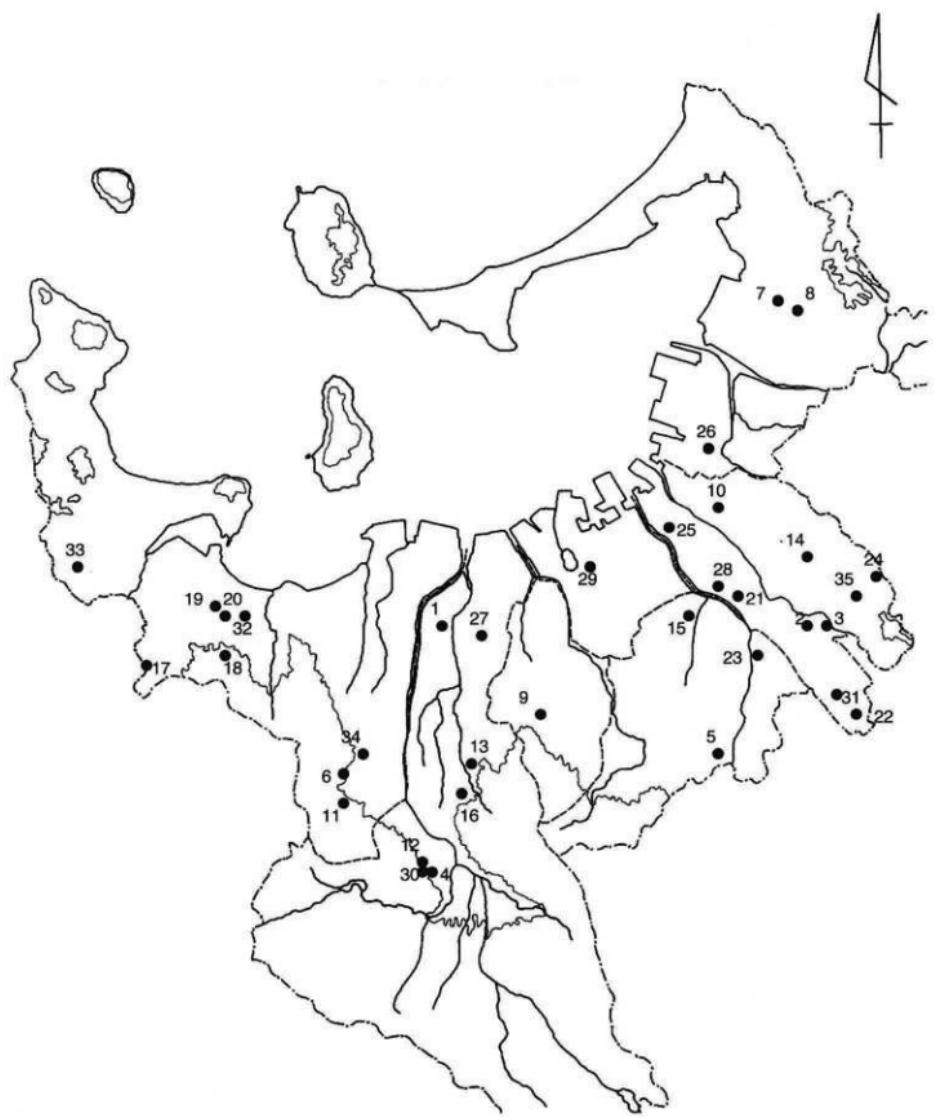
市民への公開を目的とした事業として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等があげられる。平成22年度は3ヶ所の調査に対し記者発表を行い、また3回の現地説明会を実施した。

また市内小中学校の体験学習の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、平成22年度は、徳永A遺跡5次調査に1校、博多遺跡群第191次調査に1校、香椎A遺跡第7次調査に1校、原遺跡26次調査に1校、また卯内尺古墳第2次調査に筑紫丘高校の体験学習を受け入れた。

発掘成果を資料化し、公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書刊行は、表11のとおり計30冊が刊行された。

表10 平成22年度福岡市現地説明会・報道発表一覧

番号	調査番号	遺跡名	次	住所	現場担当者	記者発表 現地説明会	見学者(人)	備考
1	1001	元岡・桑原遺跡群 (元岡G1号墳)	55	西区元岡	吉留	2010/7/1 2010/7/3	171	主頭大刀を副葬した古墳
2	0930	岸田遺跡	1	早良区早良	長家	2010/10/13 —	—	青銅武器を副葬した豪棺墓
3	1013	福岡城跡 (湧路館跡)	62 (28)	中央区域内	吉武	2009/11/25 2009/11/27	150	東側入り口の調査
4	1017	原遺跡	26	早良区原	今井、比嘉	— 2010/2/6	約150	弥生～中世集落



平成22年度発掘調査地点位置図
(番号は索引に一致する)

0827 久保園遺跡第4次調査 (KBZ-4)

所在地 博多区大字東平尾(福岡空港内) 調査面積 1,740m²(総面積5,140m²)
 調査原因 空港整備 担当者 横本義嗣、今井隆博、比嘉えりか
 調査期間 2008.7.14~2010.8.27 処置 記録保存

位置と環境 久保園遺跡は、福岡平野の東を限る月隈丘陵とその西側に披がる沖積平野に立地する遺跡である。今回の調査地点は遺跡西側に位置し、南東部では丘陵端部、北西側では沖積地となり、遺構面の標高は約5~6mを測る。

検出遺構 丘陵裾部では、上層の一部に古代の整地層があり、その下層には古代と思われる水田が認められた。下面では弥生時代中期から後期の集落が披がる。井戸や祭祀土坑、礎板を用いた掘立柱建物、周溝状の溝が検出された。また、前期に遡る可能性のある断面「V」字形の環濠の一部が丘陵端部で確認できた。

沖積地では、弥生時代中期から後期の溝や水利施設を伴う古墳時代前期から古代の複数の水田面が確認された。弥生時代の溝は丘陵部と沖積地の境界部に設置され、多量の木製品が出土した。水田関連遺構では、古代条里方向に合致する畦畔や木杭による護岸を伴う用水路、粗砂に覆われた足跡が良好に検出された。

出土遺物 弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器の他、石庖丁や磨製石斧、鐸形土製品、農具や建築材等の木製品、銅鏡、獸骨、種実等がコンテナケースにして1,250箱が出土した。

まとめ 今回の調査では、弥生時代中期から本格的な灌漑水路を伴う水田化や集落化が始まることが判明した。集落は中期後半から後期後半に盛行し、掘立柱建物や井戸、祭祀遺構等で構成される。

水田は古墳時代から古代にかけて継続した經營が行われていたことが判明した。

月隈丘陵西側の土地利用のあり方を考察する上で、貴重な成果を得ることができた。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (22上臼井 83 1:8000)



2. 調査区全景 (上空から、上が北)



3. 壁樋を利用した弥生中期井戸 (南から)

表11 平成22年度刊行報告書一覧

集	書名	副書名	収録調査番号	著者
1105	元岡・桑原遺跡群18	第20次調査の報告4、第36次調査の報告2、第38、第45次調査の報告	0001.0341.0371.0535	米倉 秀紀
1106	井尻B遺跡19	井尻B遺跡第34次調査報告	0924	小林 義彦
1107	板付11	環境整備道構確認調査－環濠の調査－	8866.8990	山崎 純男
1108	飯氏B古墳群3、女原古墳群1	今宿古墳群開闢確認調査報告	0856.0936	菅波 正人
1109	今宿五郎江9	第13次調査の報告	0718	菅波 正人
1110	今宿五郎江10	今宿五郎江遺跡第10次調査報告(2)	0420	杉山 富雄
1111	大塚遺跡4	第14次、15次調査の報告	0726.0769	森本 幹彦
1112	上月隈遺跡4	上月隈遺跡第3次調査報告	0903	本田浩二郎
1113	市道御供所井尻線建設に伴う 発掘調査報告書Ⅺ 五十川遺跡7	五十川遺跡第18次調査の報告	0915	松尾奈緒子
1114	坂尾2	一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査3	0904	佐藤 一郎
1115	難削隈遺跡7	難削隈遺跡第16次調査報告	0445	長家 伸
1116	山王遺跡5	山王遺跡第6次調査報告書	0857	木下 博文
1117	千里	千里遺跡第1次、周船寺遺跡第19次調査報告	0913.0919	板倉 有大
1118	田村17	田村遺跡第25次調査報告書	0914	森本 正志
1119	田村18	第26次調査の報告	0918	森本 幹彦
1120	嘉田青木遺跡7	第7次調査報告	0902	榎本 義嗣
1121	那珂58		1006	松尾奈緒子
1122	中村町遺跡3	中村町遺跡第4次調査報告	0908	屋山 洋
1123	名子遺跡1	第3次、第4次調査報告	0758.0802	今井 隆博
1124	博多141	博多道路群第185次調査報告	0831	加藤 良彦
1125	博多142	博多道路群第188次調査報告	0860	屋山 洋
1126	博多143	博多道路群第190次調査報告	0935	大庭 康時
1127	箱崎42	箱崎道路第28次、第33次調査報告	0118.0236	中村哲太郎
1128	箱崎43	箱崎道路第64次調査報告	0916	屋山 洋
1129	原遺跡13	第25次調査報告	0917	榎本 義嗣
1130	比恵60	比恵遺跡群第89-118次調査報告	0355.0861	長家 伸
1131	比恵61	比恵遺跡群第117次調査報告	0853	榎本 義嗣
1132	比恵62	比恵遺跡群第120次調査報告	1004	小林 義彦
1133	弥永原7	弥永原遺跡第7次調査の報告	0225	米倉 秀紀
-	福岡市埋蔵文化財年報VOL.24	平成21(2009)年度版	7307.7610.0907	宮井 善朗

V 平成22年度発掘調査概要および報告

調査概要および報告は表9の調査番号順に掲載している。また下に五十音順の索引をついた。位置番号は右ページの地図に一致する。また各概要・報告中の図「1.調査地点の位置」の（ ）内は、左から福岡市都市計画地図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・縮尺である。

発掘調査索引

遺跡名	次数	調査番号	位置番号	遺跡名	次数	調査番号	位置番号
あ 有田道路群	236	1031	1	那珂道路群	130	1015	21
有田道路群	237	1032	1	中ノ原道路	5	1038	22
有田道路群	238	1033	1	中村町道路	5	1010	23
有田道路群	239	1039	1	中村町道路	6	1029	23
い 井相田C道路	9	1040	2	七曲古墳群	1	1019	24
井相田E道路	1	1003	3	は 博多道路群	191	1022	25
う 内野熊山道路	1	1025	4	箱崎道路	66	1011	26
卯内尺古墳群	2	1021	5	箱崎道路	67	1026	26
お 石乙道路	4	1020	6	箱崎道路	68	1034	26
か 香椎A道路	7	1009	7	原道路	26	1017	27
香椎B道路	8	1014	8	原道路	27	1027	27
片江B道路	4	1030	9	ひ 比恵道路群	120	1004	28
堅粕道路	11	1045	10	比恵道路群	121	1016	28
金武青木B道路	2	1002	11	比恵道路群	122	1023	28
き 草田道路	1	0930	12	比恵道路群	123	1036	28
く クエゾノ道路	3	1024	13	ふ 福岡城跡	62	1013	29
久保園道路	4	0827	14	福岡城跡	63	1037	29
こ 五十川道路	19	1005	15	ま 松木田道路	4	0905	30
し 重留村下道路	6	1018	16	み 南人轆道路	18	1044	31
せ 千里道路	2	1028	17	女原笠掛道路	2	1035	32
た 谷上古墳群A群	4	1041	18	も 元岡・桑原道路群	55	1001	33
と 徳永A道路	5	0932	19	元岡・桑原道路群	56	1043	33
徳永B道路	3	0922	20	よ 吉武道路群	20	1042	34
な 那珂道路群	127	1006	21	り 立花寺道路	8	1012	35
那珂道路群	128	1007	21				
那珂道路群	129	1008	21				

0905 松木田遺跡第4次調査 (MKD-4)

所在地 早良区早良3・4丁目地内 調査面積 2,736m²(総面積5,626m²)

調査原因 園場整備 担当者 長家伸・加藤隆也・大塚紀宜

調査期間 2009.4.15～2010.10.7 処置 記録保存

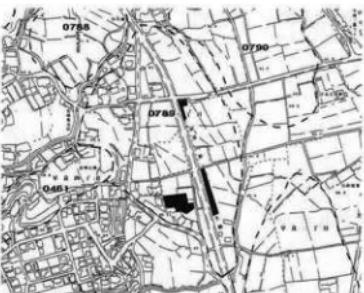
位置と環境 松木田遺跡は扇形に広がる早良平野の付け根に位置し、荒平山と西山に挟まれた、狭隘地の西側段丘面上に立地する。

検出遺構 今回の調査で確認したもっとも古い時期の遺構・遺物は縄文草創期及び早期にさかのぼり、竪穴遺構や包含層から土器及び石器・チップ等が出土している。また、遺構の主体を占める弥生時代中期～古代を中心とした生活遺構群については竪穴住居跡・建物・土坑・ピット等が濃密に分布するほか、古代～中世前半に位置付けられる鍛冶炉・炭窯等の鍛冶関連生産遺構も点在し、旧河川中からも製錬滓を含む多量の鉄滓が出土している。

また、埋葬遺構としては古墳1基及び弥生時代中期初頭～中期末の木棺墓・堀立墓を70基程確認した。古墳は6世紀初頭頃の築造と考えられる円墳で、石室と周溝の一部が残存していた。また、弥生時代の埋葬遺構は墓域全体の調査には至っていないが、現状で10×15m程の範囲に密集しており、方位を描えた企画的な配置をうかがうことができる。なお、墓域は未調査部分である北西側に更に広がるものと考えられる

出土遺物はコンテナケース365箱である。

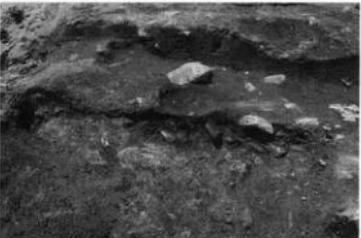
調査報告書は24年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (早良16一ツ家 789 1:8000)



2. 22年度調査区全景 (南西から)



3. 鍛冶炉 (南から)

0922 德永B遺跡第3次調査 (TOB-3)

所在地 西区徳永字山ノハナ 212外 調査面積 3,430m²(総面積5,930m²)
 調査原因 土地区画整理 担当者 杉山 富雄
 調査期間 2009.9.7~2010.11.19 処置 記録保存

位置と環境

遺跡は、今津湾岸の砂丘後背地に向かい突出した低位段丘上に立地する。調査地はその北西部、両側を段丘崖で低地と画され、緩い起伏がある地形上に位置する。現状は、耕地、墓地造成による改変が顕著である。調査のほぼ中央の小高い高まりを後円部として山ノ鼻2号墳が立地するとされていた。

検出遺構

調査は平成21年度から継続し、本年度で完掘した。小穴群、焼土壙、礫を置く土壙が溝で区切られた東辺の平坦部に分布するほかは、生活址と思われる遺構は確認されなかった。この平坦部は前年度調査した古墳の墳丘を削平して造成されている。中央の尾根筋に残る高まりは、盛土や周溝状の遺構から円墳墳丘の一部と考えられる。

出土遺物

小穴群等から須恵器、中世の土器・陶磁器がごく少量出土した。木棺墓から、鏡、櫛、鉄斧が出土した。土壙墓からは、鐵刀、玉類の出土があった。包含層出土遺物には、早期ほかの縄文土器、石礫、ナイフ形石器が含まれる。

総量はコンテナケース9箱である。

まとめ

従来想定されていた前方後円墳(山ノ鼻2号墳)の墳丘は、耕地造成の痕跡であり、その後円部が想定されていた位置には円墳が築造されていたことを確認した。

調査報告書は24年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (120周船寺 2585 1:8000)



2. 調査区全景 (上が南)



3. 古墳出土状況 (西から)

0930 岸田遺跡第1次調査 (KID-1)

所在 地 早良区早良4丁目地内

調査面積 3,039m²(総面積5,775m²)

調査原因 園場整備

担当 者 長家 伸

調査期間 2009.10.27~2010.10.19

処 置 記録保存

位置と環境 岸田遺跡は扇形に広がる早良平野の付け根に位置し、荒平山と西山に挟まれた狭隘地の西側段丘面上に立地する。

検出遺構 遺構面は耕作土を除去した褐色土上面で、低位部には遺構面直上に黒色土包含層が形成されている。検出遺構は弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物による集落遺構と壱棺墓、木棺墓からなる埋葬遺構を主体とする。

竪穴住居跡は緩斜面上に比較的整然と配置されており、近接した時期の住居跡による切り合い関係はあまり認められない。竪穴住居跡は、まず中期前半～中頃を中心として小型の長方形住居及び円形住居が認められ、後期～終末期にかけては、ベッド状遺構を有する平面長方形の住居が20棟以上確認されている。この中でも一辺8×11m程度を測る大型の住居3棟が整然と配置されており注目される。また、古墳時代前期には略方形の住居が認められる。このほか古代・中世の掘立柱建物も認められるが、遺構のあり方は相対的に散漫である。

埋葬遺構は丘陵上で確認した。壱棺墓78基、木棺墓8基からなり、金海式～汲田式壱棺、木棺墓の5基より銅劍5本、銅矛3本、把頭飾1個、立岩式壱棺墓より鉄戈1本が出土している。更に丘陵上では、埋葬遺構に非常に近接して、ほぼ同時期の円形竪穴住居跡も確認している。

出土遺物は弥生土器、壱棺など429箱である。

調査報告書は24年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (早良16-ツ家 788 1:8000)



2. 調査区全景 (上が南)



3. 青銅器出土状況 (西から)

0932 徳永A遺跡第5次調査 (TOA-5)

所在地 西区徳永町地内

調査面積 3,460m²(総面積4,700m²)

調査原因 土地区画整理

担当者 森本 幹彦

調査期間 2010.1.4~2011.4.1

処置 記録保存

位置と環境

徳永A遺跡は福岡市西部の今宿平野に位置する。調査地点は遺跡の北東部で、2次や4次調査地点と一連の谷筋で、その下流に位置する。

検出遺構

構造面は主として2面で、①平安時代～中世の水田 ②9～10世紀の掘立柱建物7棟以上、大型土坑7基、鍛冶炉7基、火葬墓1基 ③6世紀後半～7世紀前半の段造成、掘立柱建物8棟以上、石組窓を有する建物2棟、略方形溝(平地式建物)10基前後、大型土坑5基以上、水路2条等を検出した。

出土遺物

出土遺物は総数200箱ほどである。平安時代の遺物は、越州窯系青磁や邢州窯系白磁などの中国陶磁器と綠釉陶器を一定量含むもので、内黒土器、瓦、輪の羽口、鉄滓、漁網用土錘なども出土している。また、銅帶の石製丸鞘が出土したことから、付近が官衙的な性格の遺跡である可能性が高まった。瓦には怡土城系瓦が一定量含まれる。古墳時代後期の遺物は須恵器と土師器が主体であるが、赤焼須恵器が目立つ。鉄器は多くないが、U字形鋤先の完形品が出土しており、注目される。また、縄文時代後期前後の石斧、石鎌、石匙等を中心とする石器も少なくない。

まとめ

過去の調査から、平安時代の徳永A遺跡は太宰府管轄の「主船司」に関する遺跡と考えられてきた。今回の調査成果からも、特に出土遺物の内容から、官衙的な性格の遺跡であると考えられる。火葬墓の存在も、一般的な村落遺跡ではないことを物語る。さらに、調査区北部を中心とまとめて検出された鍛冶関連遺構群から、今回の調査地点は官営の鍛冶工房を含むエリアであることが明らかになった。

調査報告書は24年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (120周船寺 2584 1:8000)



2. 調査区北区1面全景 (北から)



3. 平安時代鍛冶炉 (東から)

1001 元岡・桑原遺跡群第55次調査 (MOT-55)

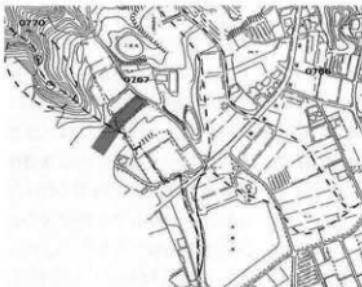
所在地	西区元岡字二又	調査面積	3,300m ²
調査原因	大学移転用地造成	担当者	吉留秀敏
調査期間	2010.4.12～2011.3.30	処置	協議中

位置と環境 調査対象地は南に開く谷の上流側に当たる。昨年度まで調査を進めていた42・52次調査区の上流側である。九州大学移転用地の西端であり、糸島市との境界となっている。現地表の標高は14～17mであり、遺構検出面はその1～4m下位である。

検出遺構 調査では42・52次調査区で判明していた東西二つの自然流路と中央に迫り出した丘陵部を同時に掘り下げたが、自然流路部分では古代末の水田遺構を確認した。東側の水田跡は自然傾斜に沿った棚田状の狭田であり、人や偶蹄目等の足跡を多數検出した。また中央丘陵部では古墳2基を確認した（本市遺跡分布図による元岡桑原古墳群G群）が、農地造成で相当破壊されていた。このうち南側の1号墳では、周溝の一部と石室下半部が残存し、一辺約18mの方墳であることが判明した。

出土遺物 石室内等から6世紀後半～7世紀前半の須恵器、土師器類と共に、鐵製武器類、各種装身具類が多數出土した。このうち主頭付装飾太刀は離れて出土した金銅装鞘と合わせて本地域では類例の少ない貴重な資料である。また、周溝内からは同時期の須恵器片等と共に鐵滓が出土している。55次全体の出土遺物量は総40箱である。

調査報告書は24年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (140元岡 2782 1:8000)



2. G1号墳全景 (南から)



3. 副葬品出土状況 (北から)

1002 金武青木B遺跡第2次調査 (KAB-2)

所在地 西区大字金武地内

調査面積 2,097m²

調査原因 圃場整備

担当者 加藤 隆也

調査期間 2010.4.6~7.16

処置 記録保存

位置と環境

金武青木B遺跡は、室見川の支流である竜谷川の上流に位置する。標高は80mを超える。竜谷川の扇状地周辺には浦江遺跡、金武城田遺跡や都地遺跡などが位置している。

検出遺構
出土遺物

今回検出された遺構は、自然流路とピット状遺構である。調査区の北側で確認された自然流路は竜谷川のある時期の旧河道と考えられる。基盤は礫層であり、堆積層の最下部には黒褐色粘質土が堆積しており、このことは一定範囲において時間幅をもって水が淀んでいる状況にあったことを示している。また、枝を杭状に加工したものも数点出土しており、人為的に管理されていた期間があったと考えられる。出土遺物には、縄文時代石器もみられるが、埋没の時代は古墳時代後期ごろと考えられる。南側の安定面を有する調査区ではピット状の遺構がみられ、短期間ではあるが建物が建っていたと考えられる。遺物はコンテナケース3箱である。

まとめ

金武周辺では古墳群の分布が密に確認されており、石室内などに鉄滓を供獻する古墳の密度が高い地域の一つである。今回の調査では、金武に古墳群を形成したと考えられる人々の活動範囲を示す資料を得ることができた。このことは、当時の先端技術である製鐵を生業とする人たちの活動を明らかにするもので、その社会構造を復元する上でも貴重な資料を得ることができた。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (94金武 441 1:8000)



2. 東半区全景



3. 西半区全景

1003 井相田E遺跡第1次調査 (ISE-1)

所在 地	福岡市博多区井相田3丁目8-1	調査面積	360m ²
調査原因	老人ホーム建設	担当者	本田 浩二郎
調査期間	2010.4.8~4.23	処置	記録保存

(一) 調査にいたる経緯

平成22年2月15日、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に対して、博多区井相田3丁目8-1地内における建物建設予定地内に関する埋蔵文化財の有無についての照会（審査番号21-2-798）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野C遺跡に隣接し、博多と大宰府を結ぶ古代官道の推定線上に位置することから、埋蔵文化財第1課は平成22年3月4日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から30cmほど掘り下げた黄褐色粘質土層面上において数条の溝状遺構と古代の遺物を確認した。建物建設に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、工事によって止むを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は埋蔵文化財第2課が担当し、平成22年4月8日に着手し、同年4月23日に終了した。

(二) 調査の記録

調査地点は麦野C遺跡の東側に隣接した官道東門ルート推定線付近に位置する。試掘調査で検出された溝遺構群は官道推定線に近い主軸方向を探るもので、古代集落が確認された麦野C遺跡とは異なる性格であると考えられたことから、井相田E遺跡の名称で新規に埋蔵文化財包蔵地登録した。当初、発掘調査は官道推定線にかかる約70mを対象としたが、遺構の内容を正確に確認することが必要と考えられたため、約360m²の範囲に拡張して調査を行った。

調査区の現況は畠で標高は14m前後を測る。遺構面は現地表面から30cm程度掘り下げた黄褐色粘質土層面で設定した。遺構面上に堆積する耕作土・床土はほぼ水平に堆積し、開墾時に大きな地形変化を受けたことが分かる。検出した主な遺構は溝遺構7条で、調査区東側で検出したSD-001は断面逆台形を呈し、検出面から80cm前後の深さを測る。埋土は最下層に粗砂・シルト、中層に黒灰色粗砂混粘質土、上層には黒色粘質土が堆積する。底面直上からは8世紀代の須恵器碗が出土する。上層部からは12世紀代の白磁碗等も出土したが、埋土からの出土遺物は古代の時期に属するものが多い。このSD-001は調査区南側で条里溝（SD-008）に切られている。調査区西側で検出したSD-



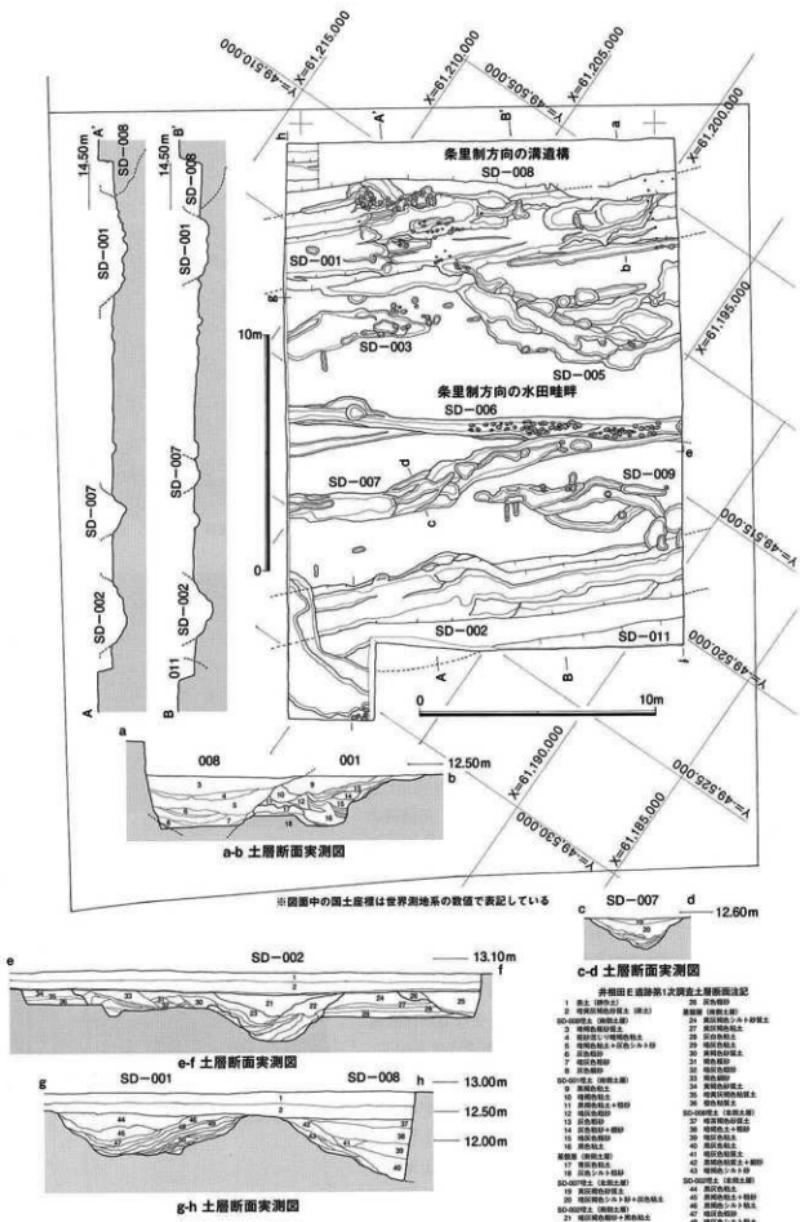
1. 調査地点の位置 (12麦野 2881 1:8000)



2. 調査区全景 (北東から)



3. SD-001発掘状況 (南西から)



井相田E遺跡第1次調査 遺構実測図 ($S = 1/200 \cdot S = 1/80$)

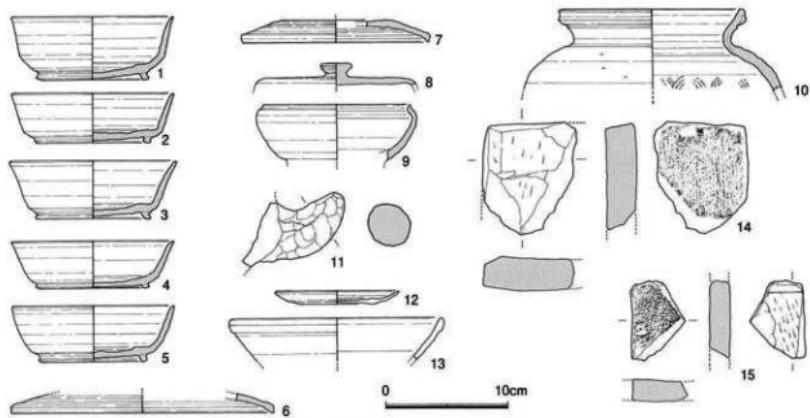
002はSD-001とほぼ同一主軸を採るが埋土はシルト砂を主体とし、上面に暗褐色粘質土の埋土を持つ溝が重複する。上層溝の断面形は逆三角形に近く、出土遺物より上層溝は12世紀代、下層は8世紀代の時期であることが確認できた。SD-001・SD-002上端部間の距離は検出面で12mを測る。両溝の主軸はN40°W前後の方向を採り、他の調査で検出されている官道とも大きな誤差はない。これまで調査成果から得られている官道推定線は調査区東側に位置していることから調査区拡張以前はSD-001が官道西側側溝に相当すると考えたが、拡張後は両溝間が官道として使用された空間である可能性も想定できた。また、調査区中央部で検出されたSD-007も両溝とほぼ同軸で掘削されたもので、幅1m前後を測り断面形は逆三角形を呈し、埋土からは8世紀代の須恵器が出土する。SD-001とSD-007間は7m、SD-002とSD-007間は4mを測り、SD-001-007間内では両溝に平行する轍状を呈する深さ5cm程度の浅い溝遺構やSD-003とした不定形の溝遺構なども検出している。検出面はほぼ平坦に削平を受けているが、検出された溝遺構群はいずれも北側部分が深くなっている。調査区南側は西から東に延びる低丘陵端部付近に位置していたものと考えられる。土層断面の観察からは調査区全体が50cm以上削平を受けており、仮に官道が存在していたとしても路面は消滅したものと考えられる。官道と考えられる範囲内では明確な歩行痕跡や波板状痕跡の検出はなく道路と確定できる情報は乏しいが、官道に関連する遺構であることは確実であろう。今回検出した二条の溝に画された範囲が官道であれば、従来の推定線からはやや東側に偏った位置にあり、やや屈曲して南に延伸するルートが考えられる。調査区周辺を見てみると、調査区北西側に現存している里道が溝の延長方向に位置し、近隣に見られる条里区画とも異なる方位を残しており古代以来の古地形を反映したものであることも想定できる。

(三) 出土遺物

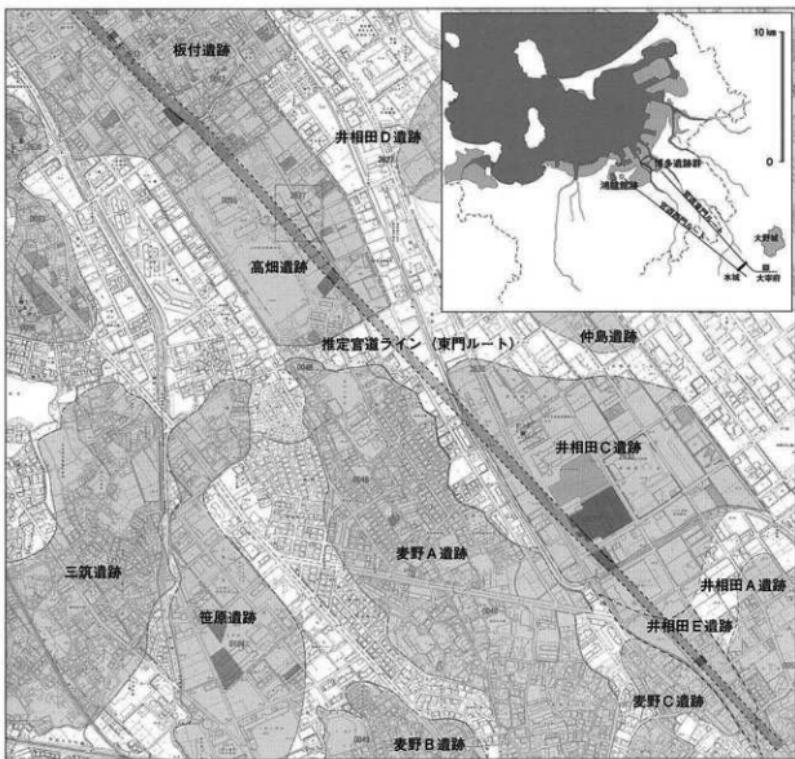
遺物はコンテナケース1箱分の土師器、須恵器、瓦、黒曜石剥片などが出土した。1～5は須恵器碗である。SD-001から出土したもので8世紀前半～中頃の時期と考えられる。2、3は底面直上に部分的に堆積する粗砂層から出土したものである。6～8は須恵器蓋である。9は東口状の口縁部を持つ須恵器碗である。10は須恵器壺である。11は土師器瓶把手である。体部にナデ付けによって接合されたものである。12はSD-002上層から出土したヘラ切りの土師器小皿である。13は白磁玉縁碗である。この他には同安窯系青磁碗の細片などが出土している。14・15は古代に時期に属する平瓦である。14は内面に綱目が残り、側面に整形痕が観察できる。

(四) まとめ

これまでに官道東門ルートは比恵・那珂遺跡群、那珂君体遺跡、板付遺跡、井相田C遺跡、高畠遺跡等の直線的に並ぶ各遺跡で遺構として確認されている。井相田E遺跡より1.3km北側に位置する高畠遺跡第18次調査地点で検出された官道は調査区内でやや西寄りに屈曲しており、大縮尺では直線を前提としているものの、必ずしも直線で造営されたものではなく、敷設箇所の自然地形を巧みに利用して直線状になることを意図して造営されたことがわかる。時期についても井相田C遺跡を除く他地点と同様に8世紀と12世紀代の遺物のみが出土しており、8世紀中頃に整備された官道がその後一定期間使用されなくなり12世紀代になって再整備・使用されたことを示している。これまでの発掘調査によって点で確認されている官道はルートが不明確な箇所も多いが、これは条里制や近世以降の区画整理によって大きく地割りが変化しているためで、わずかに里道や地形などにその痕跡を残している地点もある。古代の福岡平野の動脈であった官道東門・西門ルートが線として広く認知されるためにも今後の調査に期待したい。



出土遺物実測図 (S = 1/4)



官道東門ルート推定図 (S = 1/8,000 · S = 1/400,000)

1004 比恵遺跡群第120次調査 (HIE-120)

所在地 博多区博多駅南6丁目31-5の一部 調査面積 166m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 小林 義彦
 調査期間 2010.4.13~5.20 処置 記録保存

位置と環境 比恵遺跡は、福岡平野を北流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地上に立地する。この洪積台地は、春日市の岡本から井尻・那珂を経て北へ延び、その最北端に比恵遺跡が位置する。岡本から続くこの台地上には、弥生時代から古墳時代の集落跡や那珂八幡古墳をはじめとする墳墓群が濃密に拡がっている。第120次調査区は、この比恵遺跡の南北線に位置し、周辺部では弥生時代中期の大型竪穴住居跡をはじめとする弥生時代から古墳時代の集落域や墳墓群のほか柵列に囲まれた大型の倉庫群などが拡がっている。

検出遺構 今回の調査では、弥生時代の貯蔵穴6基、甕棺墓2基、箱式石棺墓1基、土壙1基と溝状遺構1条と古墳時代の土壙墓1基、土壙と溝4条のほかにピットなどを検出した。このうち弥生時代前期の貯蔵穴は、床面のプランが半円形と長方形プランで、壁面から天井は袋状に弧を描いて立ち上がるドーム形をなすが、入り口部の壁面は垂直に掘り込んでいる。甕棺墓は2基あるが、中期後半の1号甕棺墓(ST-01)は、口縁部を打ち欠いた甕を逆さまに埋置したいわゆる倒置甕棺である。また、南辺にある大きな溝遺構(SD-34)には、後期の壺や高坏などがまとまって投棄されていた。一方、古墳時代中期の土壙墓からは半島系の陶質土器片が出土している。

出土遺物 これらの遺構からは、弥生時代の壺や甕・鉢・高坏のほかに土師器、陶質土器、鉄製品、管玉などがコンテナケースに26箱出土した。

まとめ 今回の調査で検出した遺構は、概ね弥生時代と古墳時代に大別されるが、弥生時代の遺構は前期後半から後期まであり、時期的には散逸的な傾向が窺われる。しかしながら、前期の貯蔵穴は狭小な範囲にまとまって開削されており、当該期の集落域の拡がりを考える上で貴重な資料となる。

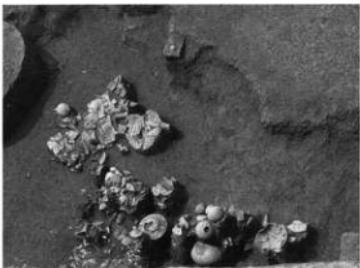
調査報告書は平成22年度に刊行した。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. 漢造物出土状況 (南から)

1005 五十川遺跡19次調査 (GJK-19)

所在地	南区五十川2丁目281-6	調査面積	36m ²
調査原因	個人住宅建設	担当者	屋山 洋
調査期間	2010.4.14~4.27	処置	記録保存

調査に至る経過

平成22年（2010年）3月9日付けで福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に南区五十川2丁目281-6の文化財の有無についての照会が提出された（事前審査番号21-2-861）。申請地は五十川遺跡の範囲内に位置しており、試掘トレンチの結果と計画されている建物基礎とを照らし合わせると、工事により遺構が破壊されることが判明した。事前の発掘調査が必要であると判断して協議を行い、2010年4月14日から27日にかけて発掘調査を行った。申請地の敷地面積は104m²を測るが、今回の調査ではそのうちの建物基礎により遺構が破壊される36m²について調査を行った（第2図参照）。

位置と環境

五十川遺跡は福岡平野の中央を流れる那珂川の右岸に沿って細長く延びる洪積中位段丘面上に位置する。これまでの調査では旧石器時代の遺物が出土している他、遺構としては弥生時代前期～中期前葉の集落、弥生時代後期～古墳時代前期と古墳時代後期の集落・墓地、古代の溝や建物、中世の溝など断続的に集落が営まれている。

調査地点の標高は約10.7mで、遺構面までの深さは80cmを測る。

検出遺構と遺物

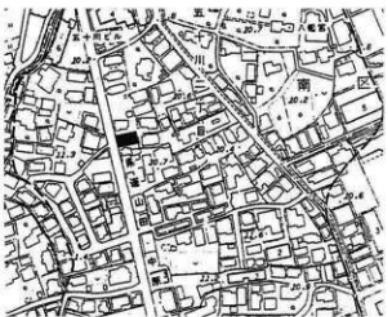
今回の調査では近世と思われる溝5条と時期不明の柱穴を数基検出した。溝は掘り直しがある南北方向の溝が1条（SD1005）と、その溝から分岐し、北東側に弧を描きながら延びる溝3条（SD1002-1003-1004）である。いずれの溝も土層では流水や滞水の痕跡は確認できなかった。

SD1005は南北方向の溝である。2本の溝が平行しており、現状で幅約1.7mを測る。平行する西側の溝を1007、東側を1008とする。深さは1007が約40cm、1008が50cm弱を測り、断面は逆台形を呈す。1008の底面は北側に向かって傾斜しており、底面には幅が30cm弱の鉄の刃物痕が残る。埋土は1007が灰褐色、1008が茶褐色を呈し、1007からは素焼きの土器が1点、1008からは時期不明の白磁片が1点出土した。SD1002は幅60～70cm、深さ27cmを測る。埋土は灰色を呈し、ロームの小ブロックと炭化物片を含む。埋土中から近世以降の可能性がある陶器片の他、古墳時代の須恵器片が出土した。SD1003は幅60～80cm、深さ24cmを測りSX1009を切る。埋土は灰色を呈し、炭化物小片をわずかに含んでいる。埋土中から糸切りの土師皿片が1点と器種不明の素焼き土器片が1点出土した。SD1004は幅50cm、深さ20cmを測る。底面の幅は狭い。埋土は灰茶褐色を呈し、炭化物片を少量含む。埋土中から近世以降と思われる陶器片の他に青磁片、須恵器片等が出土した。いずれの溝の埋土にも流水の痕跡はみられず、しまりは弱い。

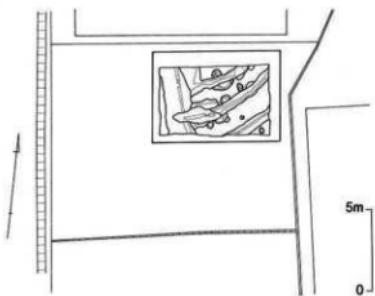
SK1009 東西に長い溝状を呈し、長さ294cm、幅109cm、深さ77cmを測る。埋土は地山ロームがわずかに汚れた暗茶褐色を呈し、しまりは強い。埋土中から龍泉窯系青磁碗片や滑石製石鍋片など中世に遡る遺物と共に近世以降と思われる陶器片等が出土した。SK1010はSD1004に切られる楕円形の土坑である。深さ42cmを測る。柱穴の埋土は灰色を呈し、しまりは弱い。

まとめ

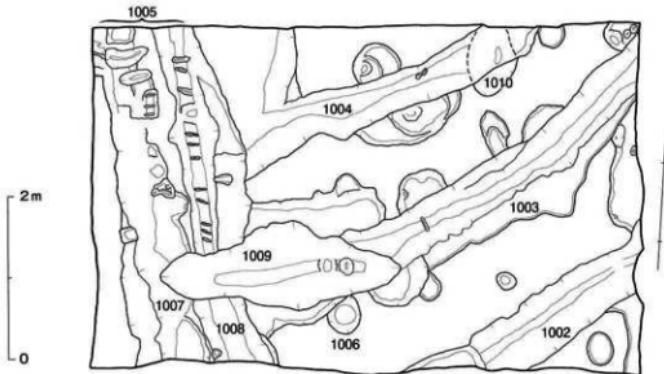
近世以降の溝が5条出土した。溝の遺物には弥生時代の土器や古墳時代の須恵器片が出土しており、周辺には弥生時代や古墳時代の遺構が存在すると思われる。溝は緩やかに弧を描くが、周辺の古地図（第4図）には調査区の南側隣地あたりに方形区画が描かれており、この区画に影響を受けている可能性が考えられる。



第1図 調査区位置図



第2図 調査範囲図 (1/300)



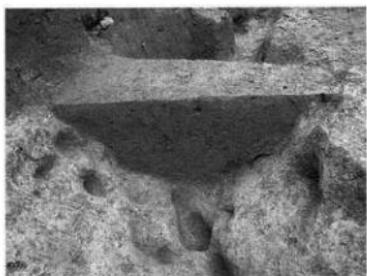
第3図 調査区全体図 (1/60)



第4図 調査区周辺古地図



第5図 調査区全景 (西から)



第6図 SD1002土層（北東から）



第7図 SD1003土層（北東から）



第8図 SD1004土層（北東から）



第9図 SK1009土層（南西から）

遺構番号	性格	時代	遺物
1001	搅乱	現代	磁器皿（数個体）、陶器擂鉢（1点）、土器片（1点）
1002	溝	近世以降	陶器片（時期不明 新しいかも 1点）、須恵器壺片（古墳時代か 2点）、土器片（1点）
1003	溝	不明	土器片（不明 1点）、土師皿（糸切り 1点）
1004上層	溝	近世以降	陶器皿（有田焼？ 1点）、青磁大皿（輪花 1点）
1004	溝	不明	須恵器片（1点）、土器片（不明 3点）
1005	溝	不明	黒曜石剝片（1点） SD1007と1008の一段下げ
1006	柱穴状遺構	不明	陶器碗（朝鮮？ 1点）
1007	溝	不明	土器片（1点のみ）
1008	溝	不明	白磁片（小碗か 時期不明 1点）、土器片（不明 1点のみ）
1009上層		近世～現代	土師質瓦片（格子 1点）
1009	溝状土坑	近世以降	龍泉窯系青磁碗片（1点）、陶器小碗片（有田 1点）、陶器碗片（朝鮮陶磁 1点）、陶器壺（1点）、茶褐釉陶器片（1点）、土師質擂鉢（1点）、土師壺（1点）、土師皿（小片 5点 同一個体か）、羽釜？（1点）、弦生壺底部片（1点 後期前半）、滑石製石鍋片（1点）、軽石（加工痕なし）、
1010	土坑	不明	土器片（1点）
検出時表採			染め付け皿（陶器 1点のみ）、青磁碗片（1点）、青磁小碗（1点）、白磁小碗、土器片（4点）、瓦片（？）、石製硯、黒曜石片
壁面清掃			コンクリート、陶器片（小碗か）、須恵器片
不明			陶器片（白色）、土器片（1点）

1006 那珂遺跡群第127次調査 (NAK-127)

所在地	博多区竹下5丁目10	調査面積	434m ²
調査原因	公園建設	担当者	松尾 奈緒子
調査期間	2010.4.19～6.15	処置	記録保存

位置と環境

那珂遺跡群は福岡平野を北流する御笠川、那珂川などの河川によって形成された台地上に位置している。本調査区は遺跡群のほぼ中央に位置しているが、弥生時代～古代の遺構が密集する周囲の調査地点よりも、遺構面の標高が1.5m程度低く、北側へと続く窪地状になっている。

検出遺構

遺構面は鳥栖ロームをベースとし、弥生時代の土坑、柱穴、古代の土坑、中世の大溝、井戸、近世の耕作に関連すると考えられる溝状遺構などを検出した。周辺の調査成果と比較すると、本調査地点では那珂遺跡群の最盛期である弥生時代～古代の遺構の密度は薄く、窪地状の地形のために土地利用の状況が周囲と異なっていたことが推測される。また調査区の東端には窪地を北流する用水路があるが、この現代の用水路にそう形で中世の大溝が検出された。このことから周囲より低い地形を利用して作られた水路を伴う現状が、中世以来の景観であったことが確認できた。

出土遺物

出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器などコンテナケース2箱である。

調査報告書は22年度に刊行した。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 85 1:8000)



2. 調査区全景 (北東から)



3. 中世溝 (南から)

1007 那珂遺跡群第128次調査 (NAK-128)

所在地	博多区東光寺町1丁目376-1	調査面積	114m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	藏富士 寛
調査期間	2010.5.6~7.7	処置	記録保存

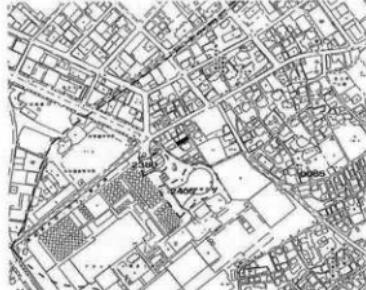
位置と環境 那珂遺跡群は福岡平野の中央を流れる那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に存在する。調査地点は丘陵のはば中央、遺跡群の北寄りに位置する。

検出遺構 遺構には、木棺・甕棺墓、掘立柱建物、溝、横列、土坑、柱穴がある。甕棺墓は9基確認した。弥生時代中期前半～後半に位置づけることができる。木棺墓は4基が存在する。うち3基が甕棺墓に切り込まれている。出土遺物は無く詳細は不明だが、時期的には弥生時代前期後半～中期初頭頃を想定しておきたい。また、調査区南西側を南北に走る溝は奈良時代。当調査区における特異な遺構として、横列を挙げることができる。幅40cmほどの浅い溝（布堀）の中に小穴を密に穿つもので、遺構の性格は不明。時期もよくわからないが、木棺墓・甕棺墓群に後出することは確実である。掘立柱建物は調査区南側に2棟、その一部を検出している。いずれも梁行は2間。詳細は検討中だが、古墳時代に相当するものか。

出土遺物 出土遺物は弥生土器などコンテナケース22箱である。

まとめ 今回の調査では調査区の一部ではあるが、弥生時代の墓を良好な状態で確認することができた。墓群は北西～南東方向へ列状をなしており、近隣の調査においても同様な成果を期待することができるだろう。横列については不明な点が多い。今後の調査の進展を待ちたい。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (37東光寺 85 1:8000)



2. 調査区全景 (北東から)



3. 木棺墓SR009 (南から)

1008 那珂遺跡群第129次調査 (NAK-129)

所在地	博多区東光寺町1丁目376-4	調査面積	118m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	藏富士 寛
調査期間	2010.6.1~7.7	処置	記録保存

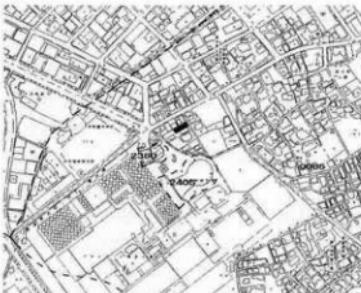
位置と環境 那珂遺跡群は福岡平野の中央を流れる那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に存在する。調査地点は丘陵のほぼ中央、遺跡群の北寄りに位置する。

検出遺構 遺構には、土坑墓・甕棺墓、掘立柱建物、溝、柵列、土坑、柱穴がある。甕棺墓は9基、土坑墓は2基を確認することができた。甕棺墓は弥生時代中期前半～後半までのもので、土坑墓はそれらに若干先行する。調査区北東側で確認できた南北に走る溝は、奈良時代に位置づけることができる。また、当調査区における特異な遺構として、柵列を挙げることができる。幅40cmほどの浅い溝（布堀）の中に小穴を密に穿つもので、128次調査の成果を勘案すれば、南東～北西方向に直線的に延びていることがわかる。遺構の性格および時期は不明。

出土遺物 出土遺物は弥生土器などコンテナケース22箱である。

まとめ 今回の調査では調査区の一部ではあるが、弥生時代の墓を良好な状態で確認することができた。128次調査の成果もふまえれば、墓群は北西～南東方向へ列状を呈していることが明らかとなった。また、今回の調査によって128次調査で確認できた柵列は直線をなしていることがわかった。性格等の解明については周辺地域における今後の調査の進展に期待したい。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (37東光寺 85 1:8000)



2. 調査区全景 (北東から)



3. 甕棺墓群 (東から)

1009 香椎A遺跡第7次調査 (KSA-7)

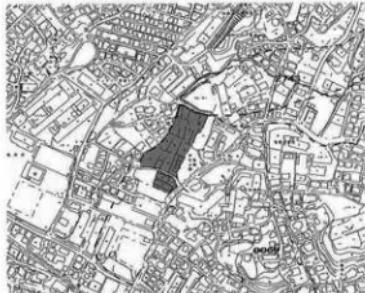
所在地	東区香椎2丁目	調査面積	1,548m ²
調査原因	道路建設	担当者	佐藤一郎
調査期間	2010.5.6~10.26	処置	記録保存

位置と環境 香椎A遺跡は、老山から西の博多湾に向かって派生する丘陵上、および丘陵にはさまれた谷部に立地する。現況は畠地で、国道バイパス計画用地の内、昨年度に用地未買収等の事情で調査できなかった4か所を調査の対象とし、第6次調査Ⅲ区に引き続き、北側からそれぞれⅣ区・V区・VI区・VII区とし順次調査を行った。

検出遺構 谷部落ち際の斜面では遺物が多量に出土した。IV区は昨年度検出のSD05の延長部、さらに杭列を検出した。SD05落ち込みの埋土からは弥生時代前期後半・後期終末の土器、溝SD21-22からは8・9世紀代の須恵器・土師器が出土した。9世紀の溝SD21からは、在地の土師器杯に伴って搬入品とみられる底部糸切り離しの土師器杯が出土している。V区では、昨年度検出の東西方向の古河川（流路跡）2条の延長を検出した。南側のSD10上層（①層）は14世紀代の遺物を少量含み、無遺物の層を挟んで、下層（③層・腐植土）では縄文後期末から晩期中頃にかけての土器や石器が出土した。北側のSD11下層（③層・腐植土）からは縄文晚期前半～中頃の土器や石器の他、種子、碧玉製管玉が出土した。VI区では削平を免れた西縁で溝SD24～26を検出した。西側のSD24が8世紀、中央のSD25が9世紀、東側のSD26が11世紀前半とみられる。東縁では5世紀の溝SD36を検出した。VII区では北西に向かって下がる谷落ちを検出したが、調査区西端の地山直上から細形銅矛の下半部が出土した。遺物の総量はコンテナケース50箱である。

まとめ V区では縄文時代晚期前半～中頃の遺物が出土し、福岡平野東部、柏原平野の縄文晚期前半～中頃の一様相を伺う上で意義深いものである。VII区では柏原平野では初めて細形銅矛が出土した。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (17浜男 69 1:8000)



2. 縄文土器出土状況



3. 細形銅矛出土状況

1010 中村町遺跡第5次調査 (NMM-5)

所在地 南区野間3丁目160番3 調査面積 650m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 屋山洋
 調査期間 2010.5.24~8.24 処置 記録保存

位置と環境 中村町遺跡は那珂川左岸に位置し、片縄山から北東に延びる丘陵上に位置する。これまでの調査では、隣接する3次調査で弥生時代終末の集落が出土した。また中村町遺跡の南端に位置する4次調査では縄文時代晚期前半の埋甕が3基出土した他、8世紀前半の丘陵頂部を区画する溝や、その溝に沿って建てられた高床式倉庫や側柱建物が出土した。同時期の古代の大型掘立柱建物は4次調査区から500m離れた1次調査でも出土していることや、遺物が丘陵全体から出土することから、8世紀の遺構は丘陵全体に広がっていると予想され、その規模の大きさから官衙や居館関連と推定される。

検出遺構 今回の5次調査は中村町遺跡が位置する丘陵と、東側の丘陵に挟まれた幅150mの谷中に位置する。現地表面から90cm下に灰黄褐色シルト層が堆積しており、その上面で溝と土坑、柱穴群を検出した。遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代前期、6世紀後半～8世紀である。検出した溝の時期は古代と思われるが、水が流れた痕跡が無く、方位が南北を向いているため、1次や4次調査で出土した古代の遺構に伴う道路の可能性も考えられる。

出土遺物 弥生時代～古代の遺構面の下は深さ4m以上の粗砂・砂礫層であるが、現地表面から1.5m～2.1mの深さで検出した縄文時代前期後半～中期初頭の包含層からは曾畠式土器を中心とした土器片と、各種石器類、櫛籠やドングリ等の植物遺存体が出土した。縄文時代～古代の遺物の総量はコンテナケースで138箱である。

まとめ 今回の調査では縄文時代前期の遺構を確認できなかったが、出土した土器が約40箱と多く、表面に摩滅が見られない土器片も多く含まれるため、近隣に縄文時代前期の集落が埋没している可能性が高く、その発見が期待される。

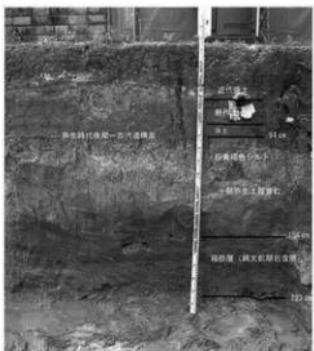
報告書は平成23年度刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (51高宮 167 1:8000)



2. 調査区南側 (北から)



3. 調査区南壁土層

1011 箱崎遺跡第66次調査 (HKZ-66)

所在地 東区箱崎1丁目2699-1

調査面積 127m²

調査原因 共同住宅建設

担当者 山崎 龍雄

調査期間 2010.6.14~7.13

処置 記録保存

位置と環境

調査地は筥崎宮の北側約160m離れた地点にある。主要地方道箱崎・直方線に面した細長い敷地で、南北に延びる箱崎砂層と呼ばれる古砂丘上に立地している。調査地の標高は現況で約3.7mを測る。調査地周辺の調査区は、北側に第63次調査区、道路を挟んで西側に第3次調査区、南隣りに第43次調査区がある。

検出遺構

調査は業者による-1.2m迄の表土鋤取、廃土搬出後、開始した。北側部分には基礎の深い地下室があり遺構が消滅しているので、深く掘り下げ、調査で発生した廃土の置場とする予定であった。しかし、予想に反し、標高2m前後で砂丘面を検出し遺構の存在を確認したので、調査方法を転換し、南北二分割の調査となった。遺構面の深さは北側で地表下1.7m、南側で1.2mで、遺構面までの堆積は表土、擾乱土である。遺構は比較的遺構面の残りのよい南側で多く検出した。検出遺構は井戸2基（中世1、近世1）、土坑群、溝1条、ピット・柱穴群である。礎石を持つ柱穴もあったが建物は確認出来なかった。中世井戸は井筒が木桶で、出土した龍泉窯系青磁などから13世紀後半頃である。溝は残りは不良であるが、主軸を東西方向に取る。

出土遺物

出土遺物は中世（12-13世紀）から近世の土師器、国産陶磁器、中国産輸入陶磁器、瓦類などが大半であるが、平安時代頃の須恵器、土師器など、筥崎宮創建頃の遺物も若干含む。遺物の総量はコンテナケース21箱である。

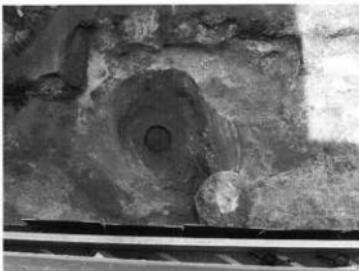
調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (34箱崎 2630 1:8000)



2. 第2面全景 (北から)



3. 井戸SE20 (北から)

1012 立花寺遺跡第8次調査 (RGG-8)

所在地	博多区立花寺2丁目131-1	調査面積	297m ²
調査原因	専用住宅建設	担当者	小林義彦
調査期間	2010.6.7~8.9	処置	記録保存

位置と環境 福岡平野の東縁は、四王寺山から金隈、月隈へと続く標高20m~200mの山地性をなす丘陵地によって画される。立花寺遺跡は、この月隈丘陵西側の緩斜面上に立地し、北側には丘陵から御笠川東岸の沖積地に向かって延びる狭い開析谷が迫っている。また、西側は緩斜面を削り出して雛壇状に造成し、その狹小な平坦地に造構は掘り込まれている。この月隈丘陵を取り巻く丘陵上には、弥生時代の上月隈B遺跡や宝満尾遺跡、赤穂ヶ浦遺跡のほか古墳時代の席田大谷古墳群や丸尾古墳群、天神森古墳群などの小古墳群が造営されている。

検出遺構 今回の調査では、古墳時代後期~古代の竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡2+a棟、土壙3基、溝遺構2条とピットなどを検出した。竪穴住居跡は、2.3~2.5m×3mの長方形プランをなす小型の住居跡で26号住居跡(SC-26)は南壁に竈が付設されている。また、掘立柱建物跡は、2間×2間の総柱の建物で、高床倉庫的機能が想定される。一方、谷に並行して西へ流れる幅が1.5m~2mの溝からは多量の須恵器が出土している。

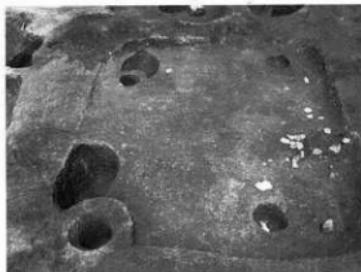
出土遺物 これらの住居跡や土壙、溝遺構からは土師器の甕や須恵器甕、高环、坏、坏蓋などのほかに鉄製品、石製品、土製品などがコンテナケースに21箱出土した。

まとめ 月隈丘陵の西側の緩斜面上や丘陵上には、本調査区例のような狭地を造成した平坦地上に住居跡や建物跡、井戸跡からなる小集落が点在し、御笠川右岸域に冲積地の微高地に披がる集落域や生産遺構と対比して興味深い事例である。また、古文献に「延田駅」の記述があり、周辺域に官道に付設された「駅」存在した可能性も指摘されており、総柱の建物跡群は有為な資料である。

調査報告書は平成24年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (11金隈 38 1:8000)



2. 26号住居跡 (西から)



3. 土師器甕出土状況

1013 福岡城跡62次(FUE-62)・鴻臚館跡28次(KRE-28)

所在地	中央区内1丁目1	調査面積	970m ²
調査原因	範囲確認	担当者	吉武 学
調査期間	2010.4.1～2011.3.31	処置	埋め戻し保存

位置と環境 博多湾のほぼ中央部に突き出した福崎丘陵上に立地する。

平成18年度から平和台球場跡北半分を対象とした第V期調査を行っており、平成22年度は2ヶ所のトレンチで発掘調査を実施した。

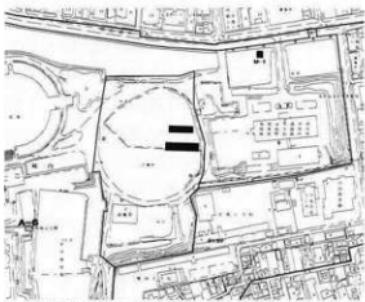
検出遺構 トレンチ4では福岡城盛土を除去し、下層の鴻臚館遺構の調査を行った。北館の北東角に相当するが、全体的に中世に削平を受け、鴻臚館関係遺構の残りは良くない。第IV期調査（球場跡南半分）の成果を含めて考えると、鴻臚館東面は、東門が建つ台地から比高差1m強の段差を経て広場となり、ここに「着到殿」の可能性がある掘立柱建物が建てられている。東西幅20mの広場の東は緩い斜面となり、海岸へと連なる低地（砂丘）に降りていくものと推定される。この更に東側は地形が高まり、比高差4mほどの台地となることがボーリング調査により判明している。

トレンチ5では、鴻臚館跡の調査に先立ち福岡城跡の調査を行ったが、明治時代以降の陸軍や野球場建設などによる擾乱が著しく、これを除去するに留まり、福岡城跡の調査に至っていない。次年度に引き続き調査し、鴻臚館東面の入り口の解明を進める。

出土遺物 古代の瓦を中心陶器・土師器・須恵器、近世の瓦・陶器など、コンテナケース150箱分が出土した。

まとめ 今回および過去の調査により、鴻臚館の東面（入り口部分）がひな壇状に造られていた可能性が強まった。鴻臚館を訪れる外交使節などに対する視覚的な効果をねらったものと考えられる。次年度にかけて、東側入り口部分の確認調査をさらに進めていく。

調査報告書は26年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (60舞鶴 192 1:8000)



2. トレンチ4・5全景（上が北）



3. トレンチ4全景（東から）

1014 香椎B遺跡第8次調査 (KSB-8)

所在地	東区大字香椎字生水1433-1	調査面積	2651m ²
調査原因	宅地造成	担当者	瀧本正志 大塚紀宣
調査期間	2010.6.22~11.19	処置	記録保存

位置と環境 調査地は、博多湾に臨む香椎宮の北側において東西方向に広がる谷部と低丘陵に立地し、香椎B遺跡の西半部に位置する。畠地と山林の丘陵部は標高29mを最高標高点として尾根筋が西へ緩やかに傾斜し、麓の標高は18mを測る。谷部は標高14m前後を測る水田で、開口部は120mほどである。1995年～1998年に実施した隣地の香椎B遺跡1～5次調査では12世紀後半期～15世紀前半期と想定される中世集落や石組墓、さらには中世後半期の砦規模の山城が発見されている。

検出遺構 検出した主な遺構は、丘陵部および谷部では古墳時代後期の竪穴住居跡2棟、11世紀後半期～12世紀前半期の中世墓2基や経塚と推定される土坑1基、中世後半期と想定される3条の横列や掘立柱建物3棟、土坑が検出されている。谷部では井戸、掘立柱建物、柵、溝、土坑等が検出され、これらは12世紀後半期～15世紀前半期と想定される中世集落を構成するものと考えられる。

出土遺物 遺物は土師器、須恵器、磁器、施釉陶器、瓦質土器、石製品、瓦、木製品、銅鏡などの金属製品が出土している。総量でコンテナケース108箱である。

まとめ 今回の調査では、8次調査で存在が判明した中世集落が谷の開口部まで広く連続して展開する大規模なものであることや、集落隆盛期である13世紀後半～15世紀初頭の集落内において階層差が存在していることを墓群や建物配置状況から知ることができた。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (17浜男 14 1:8000)



2. 調査区遠景 (東から)



3. 経塚？

1015 那珂遺跡群第130次調査 (NAK-130)

所在地	博多区那珂2丁目87,88	調査面積	168m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	板倉 有大
調査期間	2010.6.30~8.10	処置	記録保存

位置と環境

調査地は、那珂中学校の北東、筑紫通りの西側に位置する。那珂遺跡群の範囲においては、南半の東側、標高約9mの丘陵緩斜面に位置する。周辺では、27次、44次、47次、88次、120次、122次の調査が行われており、弥生時代～中近世の集落関連遺構が確認されている。遺構面はGL-70～90cmと比較的深い。

検出遺構

検出遺構・時期は以下の通りである。

弥生時代中期後半：土坑（貯藏穴）

弥生時代終末期～古墳時代前期：布掘り建物

古墳時代：5世紀後半～6世紀前半の方形堅穴建物（5m四方・貼床・4本柱・周溝・南側にカマド）

7世紀後半の方形堅穴建物（4.5m四方・貼床・主柱穴なし・周溝・移動式カマド）

古代：南北溝・井戸

中世：ピット、土坑、溝

近世：造成・耕作痕跡

出土遺物

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦、移動式カマド、陶磁器、石器、ガラス管玉などコンテナケース15箱分が出土した。

まとめ

本調査では、弥生時代中期後半、弥生時代終末期、古墳時代後期、奈良時代、中世、近世の遺構を確認した。このことから、本地点が、弥生時代から中世まで断続的に集落として利用され、近世以降に耕地利用されていたことが明らかになった。布掘り建物については周辺での調査事例もあり、構造や時期について比較検討する必要がある。古墳時代の堅穴建物については、隣接する2棟に時期差があり、規模は近いものの、構造に差異がある。古代、中世については、周辺調査での条里関連遺構や地割関連遺構との関係性が注目される。

また、本調査地点は那珂遺跡群の東端で谷部に近く、集落の広がりが途絶えていくという見込みもあったが、予想に反して比較的の遺構の残りがよかったです。今後も周辺の開発には注意が必要である。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (24番付 85 1:8000)



2. 1区全景 (南から)



3. 2区全景 (南から)

1016 比恵遺跡群第121次調査 (HIE-121)

所在地	博多区博多駅南3丁目466他	調査面積	60m ²
調査原因	事務所建設	担当者	松尾 奈緒子
調査期間	2010.7.10～8.10	処置	記録保存

位置と環境 比恵遺跡群は、福岡平野を北流する御笠川、那珂川などの河川によって開析を受けて形成された島状台地に立地している。本調査地点は比恵遺跡群を構成する3つの台地のうちの北台地北西端に位置し、調査区北側では、北へ広がる谷部への落ち際を検出した。

検出遺構 遺構面は鳥栖ロームをベースとし、標高4.05～4.3mを測る。この面において弥生、中世、近世の溝、柱穴、杭列、円形周溝、水田に関連する遺構などを検出した。これまでの調査で、北台地では弥生時代前期の集落域が広がることが判明しているが、本調査地点では台地の落ち際という立地条件もあり、集落に関連する遺構の密度は低く、弥生時代遺構は生産域として使用されていたと考えられる。また、同じ北台地で行われた25次、4次、26次の各調査区では台地の落ち際に大量の木器、土器を含む包含層が検出されたが、本調査区ではこのような包含層は確認されなかった。台地頂部の遺構密度に関する可能性が考えられる。また、本調査地点の谷部には水田が想定されたが、積極的に評価できる根拠を発見することはできなかった。

出土遺物 出土遺物は土師器、陶磁器などコンテナケース3箱である。

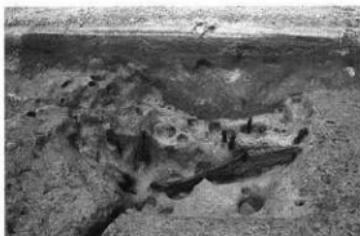
調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (37東光寺 127 1:8000)



2. 調査区全景 (北東から)



3. 水利関係遺構 (東から)

1017 原遺跡第26次調査 (HAA-26)

所在地 早良区原7丁目

調査面積 4,130m²

調査原因 公園建設

担当者 今井 隆博 比嘉 えりか

調査期間 2010.8.2~2011.3.16

処置 記録保存

位置と環境 原遺跡は、早良平野のほぼ中央部、金屑川と油山川に挟まれた微高地を中心広がる。周囲には弥生時代早期の環濠や古代の郡衙関連施設が確認された有田遺跡群などがある。原遺跡ではこれまでに弥生時代早期から古墳時代初頭にかけての集落や、中世から近世にかけての屋敷跡が確認されており、今回の調査地は微高地の南端付近に位置する。

検出遺構 本調査では弥生時代早期～前期の集落と、中世前期の集落が確認された。弥生時代の遺構は竪穴住居跡2軒、掘立柱建物8棟以上、土坑約45基（貯蔵穴や貯木土坑を含む）、谷状の落ち込み、多数のピットなどである。遺構の分布を見ると竪穴住居や掘立柱建物、貯蔵穴は標高が比較的高い位置に集中する一方、標高が低い谷の周囲には湧水を利用した貯木土坑が点在するなど環境に合わせた土地利用が行われていたことがわかった。中世の遺構は掘立柱建物10棟以上、井戸17基、土坑約20基、木棺墓1基、多数のピットが確認された。出土遺物から見てこの集落は10世紀から12世紀にかけて断続的に営まれたと考えられる。

出土遺物 弥生時代の遺構からは土器、石器、木製品などが出土した。中世の遺構からは土師器、陶磁器、瓦器、木製品、鉄製品、銅錢などが出土した。特に木棺墓には完形の青磁碗や土師皿、鉄製刀子が副葬されていた。総量でコンテナケース102箱である。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (82原 311 1:8000)



2. 調査区全景



3. 弥生時代前期竪穴住居 (南から)

1018 重留村下遺跡第6次調査 (SGM-6)

所在地	早良区重留6丁目	調査面積	131m ²
調査原因	道路拡幅	担当者	山崎 龍雄
調査期間	2010.8.3~10.8	処置	記録保存

位置と環境 調査地は油山北西山麓先端、標高31mを測る地点に立地する。国道263号線拡幅に伴う調査で、調査区は3区域に分かれる。拡幅幅が4mで、調査廃土は場内で処理せねばならないことから、各調査区を2~4分割した。調査区は北からⅠ~Ⅲ区とし、更に各区の分割区には枝番号を付した。各区の概要は以下の通り。

検出遺構 Ⅰ区：3分割の調査で、遺構面は2面。第1面までの深さは約1mである。検出遺構は第1面で近世の溝1条、水田に伴う自然流路1条。第2面は0.25m下の面で、磁北方向の溝1条、ピット群。中世以前の時期。

Ⅱ区：2分割の調査で、遺構面は2面。深さ0.4~0.5mで検出した。第1面の遺構面は黒褐色の粘性が強い粗砂混じり土。ピットや溝、土坑を検出した。第2面は0.1m~0.15m程度の明黄褐色土面で、磁北方向の大溝1条、ピット群を検出した。遺物から古代以前の時期である。

Ⅲ区：4分割の調査。北側2・3小区は2面の調査。南側1・4小区は1面の調査。北側第1面は深さ0.15~0.3m。検出遺構はピット・大型建物柱穴・溝など。柱穴の底には根石があり、検出個数、分布状況から複数の建物のものであろう。第2面は第1面より0.3~0.4m下の明黄褐色土面で、検出したピット・柱穴などである。上面で確認出来なかったものも多く、遺構の中心は第1面であろう。遺構の時期は遺物から古代以前である。

出土遺物 出土遺物は各区それ程多くないが、古代頃の平瓦片がⅡ区で出土している。そのほか土器、陶器など総量でコンテナケース4箱である。

まとめ 瓦、大型建物の柱穴、磁北方向の溝から古代の寺院跡などがあった可能性がある。

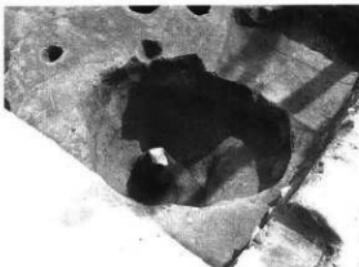
調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (83重留 324 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. 根石を持つ柱穴

1019 七曲古墳群第1次調査 (NNMK-1)

所在地	博多区大字立花寺字白石28	調査面積	420m ²
調査原因	防災工事	担当者	藏富士 寛
調査期間	2010.8.9~10.28	処置	記録保存

位置と環境 七曲古墳群は御笠川の東岸にある丘陵の尾根筋上に存在する。福岡市と接する志免町との境界に位置し、現在6基の古墳が確認されている。なお、志免町側の文化財分布地図によれば、桜ヶ丘古墳群と称される。

検出遺構 今回の調査対象は5、6号墳である。5号墳は径12m程の円墳で、主体部は単室構造の横穴式石室である。石室石材の多くを失っている。墳丘の周辺から出土した須恵器より6世紀前葉の時期を与えることができる。6号墳は径18m程の円墳で、主体部は単室構造の横穴式石室である。天井部を失う。墳丘の周辺から出土した須恵器より6世紀前葉の時期を与えることができる。

出土遺物 5号墳の主体部内からは鉄鏃1が出土したのみ。6号墳の主体部内からは勾玉や管玉などの玉類が出土。墳丘周辺からは須恵器が出土しており、遺物の総量はコンテナケース3箱である。

まとめ 6号墳は20m近い大形の円墳であり、周辺地域における首長墓の動向を考える上でも重要な古墳である。2基の古墳に大きな時期差はないが、石室構造をみれば築造順序は6号墳→5号墳となる。いずれの横穴式石室も5世紀代の初期横穴式石室から6世紀代における単室の有蓋道横穴式石室へと向かう過渡期にあたる貴重な資料である。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (11金隈 44 1:8000)



2. 調査区全景 (北東から)



3. 6号墳石室 (南西から)

1020 乙石遺跡第4次調査 (OTI-4)

所在地	西区金武地内	調査面積	3,360m ²
調査原因	区画整理	担当者	板倉 有大
調査期間	2010.8.17～2011.2.23	処置	記録保存

位置と環境 調査地は金武交差点から日向峰方向へ約400mの丘陵上に所在する。乙石遺跡の範囲においては、中央東側、標高約50mに位置する。周辺では、乙石遺跡第1～3次調査、都地遺跡などの調査が行われており、奈良時代の掘立柱建物と製鉄関連遺構を中心として、旧石器時代～中世の遺物、遺構が確認されている。

検出遺構 本調査では奈良時代の遺構が中心で、そのほかの遺構は近世、近現代のものであった。奈良時代の掘立柱建物は3×2間と2×2間があり、規模や桁行軸など周辺調査の建物との比較が可能であろう。また古代の焼土坑（炭窯）を検出しておらず、炭化材を採取し、放射性炭素14年代測定・樹種同定などの自然科学的分析に備えている。遺構以外では、落ち込み状の包含層を數カ所確認し、縄文時代早期の鍬形織とその製作、管理に関わる剥片、チップが出土している。

出土遺物 出土遺物には縄文時代、古墳時代、古代、中世の石器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄滓などがある。遺物総量はコンテナケース5箱である。

まとめ 本調査地点は現代の耕地造成、溝設置などによって遺構面が大きく破壊されていた。また、乙石遺跡の東端に近く、谷側に向けて遺構の広がりが途絶えていくため、検出した遺構は少なかった。ただし、谷際は削平を免れた遺構も多いと見られ、今後も周辺の開発には注意が必要である。古代の掘立柱建物、焼土坑（炭窯）は、乙石遺跡第2・3次調査でも複数確認されており、南に隣接する都地遺跡が官衙的性格を有するのに対して、その周辺に広がる生産遺跡の性格を持つと考えられる。今後、周辺調査成果とのより詳しい比較によって、金武地区の古代の様相を明らかにしていく必要があるだろう。

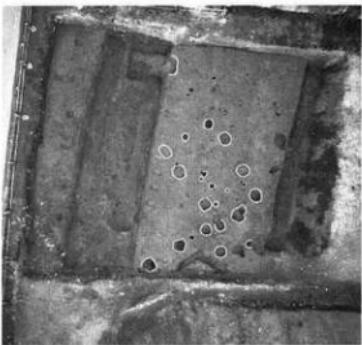
調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (930m, 2838, 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 掘立柱建物 (南から)

1021 卵内尺古墳群第2次調査 (UNK-2)

所在地	南区老司3丁目545-1外	調査面積	2,700m ²
調査原因	分譲住宅造成	担当者	小林 義彦
調査期間	2010.8.20~2011.1.28	処置	記録保存

位置と環境 卵内尺古墳群は、福岡平野の西縁を北流する那珂川の中流域左岸の油山山塊から派生した標高35mの舌状丘陵上に立地している。丘陵の基部には三角縁神獣鏡や鉄製武具などを副葬し、墳丘には埴輪を配した前方後円墳の老司古墳や卵内尺古墳（1号墳）がある。また、老司古墳の東には觀世音寺の屋根に葺かれた瓦（老司式）を焼いた老司瓦窯跡がある。

検出遺構 今回の調査では、古墳時代中期の円墳5基と土壙1基の外に弥生時代の貯蔵穴2基、土壙5基、中世以降の土壙墓1基、焼土壙1基、石組み遺構2基を検出した。

5基の円墳は、直径が約11mの地山成形の低墳丘墓で、3号墳は粘土郴土壙墓、4号墳は石蓋式箱式石棺墓、8号墳は木蓋式箱式石棺墓を埋葬主体部としている。これらの埋葬主体部は床面に小円窓を敷き詰めた石敷きで、棺内にはベンガラが塗布されていた。このうち4号墳は、葺石を2段に巡らせた2段築成の円墳で、2枚の板石で覆われた箱式石棺は内法の長さが155cm、幅が41cmで棺内には男性2人、女性2人の4人が合葬されていた。このうち初葬の男性の右肩から胸に黒漆塗りの櫛が3個、頭部の棺外には鉄鎌と鉄斧が副葬されていた。また、北側の葺石裾には丹塗りの高坏や小型丸底壺、甕などが供獻されていた。8号墳には滑石製白玉が副葬されていた。

出土遺物 遺物は、古墳に副葬されていた漆塗り櫛や鉄鎌、鉄斧の外に弥生土器や土師器高坏、丸底壺、甕などがコンテナケース6箱出土した。

まとめ 卵内尺古墳群は、老司古墳、卵内尺古墳などの前方後円墳に続く5世紀初めの古墳群で那珂川左岸域における首長層の消長を考える上で貴重な資料である。



1. 調査地点の位置 (40老司 153 1:8000)



2. 4号墳全景 (西から)



3. 4号墳主体部人骨合葬状況 (東から)

1022 博多遺跡群第191次調査 (HKT-191)

所在地	博多区冷泉町423, 425	調査面積	162.3m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	榎本義嗣
調査期間	2010.9.2~11.22	処置	記録保存

位置と環境 博多遺跡群は、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する遺跡で、福岡平野を北流する御笠川と那珂川に挟まれる。本調査地点は、「博多浜」と呼ばれる陸側の砂丘2列のうち、海側の砂丘の尾根付近に位置し、現地表面の標高は約5.8mを測る。調査区の基本層序は、地表下約2mまでが近世以降の客土で、以下第1面とした標高約3.8mの黒味のある暗褐色土、第2面とした標高約3.1mの黒灰色砂質土、第3面とした標高約3.1mの砂丘基盤層である黄褐色砂となる。この砂丘面は、北東から南西側に緩く傾斜する。

検出遺構 第1面では16世紀代を主体とする石組土坑や、土師器廃棄土坑、溝等を検出した。溝は現在の地割り方向に合致するもので、出土遺物の時期から、「太閤町割り」に関連する遺構と考えられる。第2面では11世紀後半から13世紀前半の井戸や土坑を確認した。井戸は井筒に径約0.7mの木桶を据えるものが多く認められ、内部に礫や輸入陶磁器を投棄するものがあった。土坑には土師器を廃棄したものが少数ある。第3面では、上面の中世遺構に切られながらも、弥生時代後期および古代の遺構の一部を検出することができたが、遺存状況は不良である。なお、古墳時代の遺物は散見するが、遺構としては未確認である。

出土遺物 出土遺物としては、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、須恵質土器、瀬戸や備前等の国産陶器、中国や朝鮮からの輸入陶磁器、銅錢や鉄製工具等の金属製品、滑石製品、獸骨等があり、総数はコンテナケース58箱である。

まとめ 今回の調査では、中世前半期を主体とする遺構を確認することができたが、中世後半では16世紀まで顕著な生活の痕跡が殆んどなく、空白期が認められる。遺構の消長から中世の前半と後半とでは、土地利用のあり方が異なることが予測される。

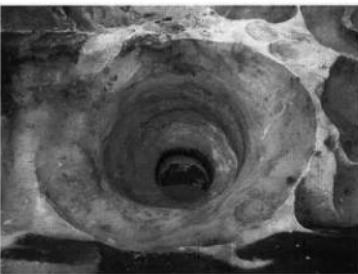
調査報告書は24年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (49天神 121 1:8000)



2. 第3面調査区全景 (南西から)



3. 中世井戸 (南西から)

1023 比恵遺跡群第122次調査 (HIE-122)

所在地	博多区博多駅南4丁目202号	調査面積	120m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	屋山洋
調査期間	2010.9.8~9.22	処置	記録保存

位置と環境 比恵遺跡群は福岡平野の中央部に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に位置する。今回の122次調査は比恵遺跡群の北辺近くに位置しており、周辺の30次・31次調査では弥生時代前期の貯蔵穴がまとまって出土した他、弥生時代中期の井戸、古墳時代の溝や集落などが出土している。

検出遺構 本調査区は北半が台地、南半が谷にあたり、台地上は前の建物基礎による削平が著しく、遺構の遺存状態は悪い。谷部は上層近くまで粗砂で埋没していた。粗砂はほとんど遺物を含まない。

遺構は北側の台地上で弥生時代前期の貯蔵穴が1基と弥生時代中期の溝1条を検出した。貯蔵穴は北側の半分以上が調査区外に延び、東側が擾乱に削られているため、掘方径などは不明である。検出時の観察では2基の貯蔵穴の切り合いでみえたが、それぞれの残存幅が20cm前後と狭いため、詳細は不明である。溝は擾乱により分断されているが、本来は1本の溝である。東側隣接地の31次調査でも確認されており、谷の縁に並行する。掘方上部まで粗砂で埋没し、調査区西壁土層では谷の埋土に切られている。

出土遺物 谷に沿う溝から弥生時代中期の甕底部が出土した。また谷からは弥生時代中期頃の土器が多く出土した他、弥生時代終末～古墳時代前期の土器が数点出土した。遺物の総量はコンテナケースで2箱である。

まとめ 調査区北側の台地上で溝1条、貯蔵穴2基、柱穴1基を、南側では東西方向の谷が出土した。貯蔵穴は弥生時代前期、溝は弥生時代中期前半、谷は古墳時代前期以降の埋没である。

調査報告書は平成23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 調査区全景 (南東から)



3. 測遺物出土状況 (南から)

1024 クエゾノ遺跡第3次調査 (KEZ-3)

所在地	早良区野芥5丁目66-6の一部	調査面積	46m ²
調査原因	個人専用住宅建設	担当者	今井 隆博
調査期間	2010.9.13~9.15	処置	記録保存

1. 調査に至る経緯

平成22年8月26日付で、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会があった。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地であるクエゾノ遺跡に含まれ、平成18年に申請地で既に実施された試掘調査では柱穴、土坑等の遺構が確認されていた。この成果を元に協議を行った結果、敷地東端の掘り込み車庫部分については地下遺構の破壊が回避できないことから、車庫部分は発掘調査による記録保存を行い、建物部分については現状保存とすることで合意した。

2. 位置と環境

クエゾノ遺跡は油山から派生する標高22~54mの丘陵上に位置し、周辺にはクエゾノ古墳群や梅林古墳など、5世紀中頃以降の古墳が分布する。クエゾノ遺跡の北東端で実施された第2次調査では、古墳時代後期~終末期の豊穴住居、奈良時代の溝などが確認されている。また、申請地より南へ50mの地点には、1971年に熊本大学により発掘調査が実施された影塚古墳群が分布する。申請地はクエゾノ遺跡の南端にあたり、現況は更地で道路より約1.5m高く、標高はおよそ37.5~37.8mであった。

3. 層序

調査区の層序を「6.調査区土層」に示した。地表面より10~20cmの表土（1層）、30~50cmの盛土（2層）があり、GL-50cm付近で明黄褐色砂質土（4層）となる。この面で溝状遺構（SD01）を確認したため遺構面としたが、厚さ10cm程の4層を除去すると下面の赤褐色砂質土（6層）で土坑、ピット等が見られ、上下2面の調査を行った。なお、調査対象範囲のうち東側半分は既に現在の道路面まで削り取られており、実質20m²強の調査となった。

4. 検出遺構

上面では中世~近世以降と思われる溝1条（SD01）を検出した。南北方向に直線的に延び、南壁際で西に折れている。幅30~50cm、深さ10~20cmで、埋土は灰色砂である。土器類、須恵器、白磁等が少量出土した。



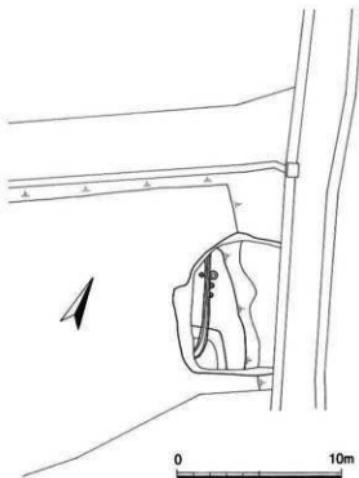
1. 調査地点の位置 (75西油山 269 1:8000)



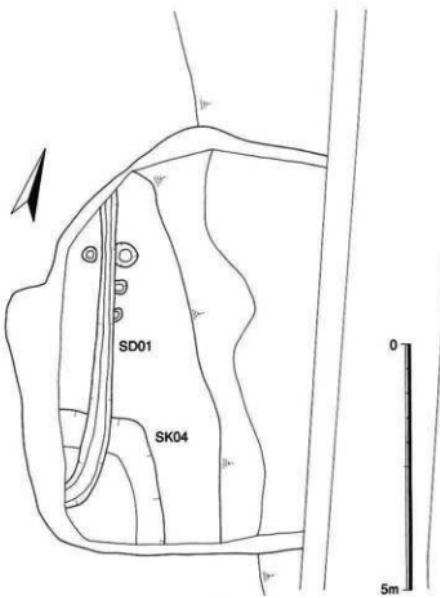
2. 調査区上面全景 (北から)



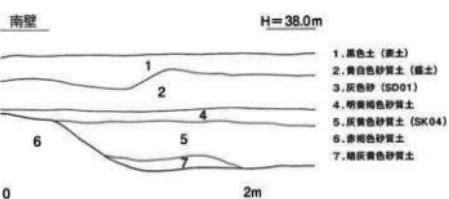
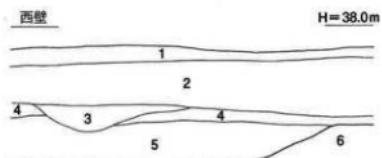
3. 調査区下面全景 (北から)



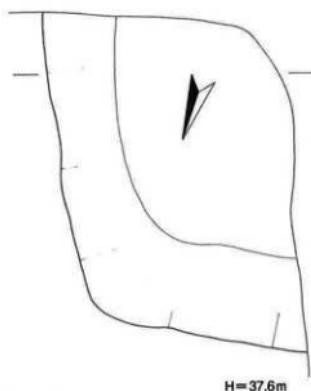
4. 調査区位置図 (1/300)



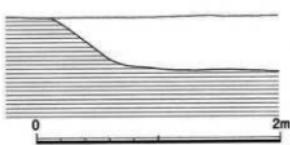
5. 調査区位置図 (1/100)

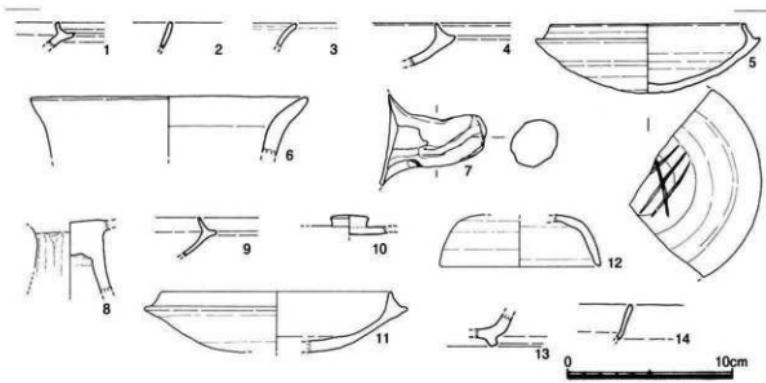


6. 調査区土層図 (1/40)



7. Sk04実測図 (1/40)





8. 出土遺物実測図 (1/3)

下面では、土坑1基(SK04)とピット4基を検出した。SK04は調査区南西端で検出した落ち込みで、現存長2.7m、幅2.0m、深さ40cmを測る。埋土は灰黄色砂質土である。遺物は少量であるが、古墳時代後期～終末期頃の土器と鉄滓が出土した。ピットはいずれも深さ10～20cmの遺存状況である。出土遺物は土師器・須恵器の小片のみで、ピットの時期は明確にし難い。

5. 出土遺物

出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、鉄滓などで、総量はコンテナケース1箱分である。1～3はSK01からの出土である。1は須恵器杯身の口縁部片、2は土師質の口縁小片である。3は口禿げの白磁皿で、口縁端部内外面の釉を掻き取っている。4～8はSK04からの出土である。4、5は須恵器杯身で、5は復元口径11.8cmを測る。底部外面にはヘラ記号があり、4本の線刻が見られる。6は土師器甕、7は把手、8は土師器高杯脚部である。9～11は調査区南壁沿いのトレーニチから出土した須恵器であるが、SK04に伴うものと思われる。9は杯身口縁、10は杯蓋のつまみ部である。11は杯身としたが、蓋の可能性もある。復元口径14.0cmを測る。12～14は検出時の出土である。12は須恵器蓋、13は高台付須恵器杯身である。14は土師器杯の口縁である。

6. まとめ

今回は狭い範囲の調査であったが、調査例の少ない遺跡南端で古墳時代後期～古代と、中世以降の二時期の遺構の存在を確認することができた。上面で検出したSD01は遺物が少ないので時期を明らかにできないが、比較的新しいものではないかと考えている。下面で検出したSK04は調査区外に広がるために機能は不明であるが、南に位置する影塚1号墳と近い時期の遺物が出土している。申請地内の確認調査では比較的濃密に遺構が検出されたことから、付近の丘陵西側斜面には遺構が広がる可能性がある。

1025 内野熊山遺跡第1次調査 (UKY-1)

所在地 早良区早良2丁目地内

調査面積 3,149m²

調査原因 圃場整備

担当者 加藤 隆也

調査期間 2010.9.16~2011.1.25

処置 記録保存

位置と環境

内野熊山遺跡は早良平野の最奥部にあり、東の油山山塊と西の飯盛・長垂山山塊が最も迫った狭隘地に位置している。遺跡の大部分は、沖積扇状平野と一部西の飯盛・長垂山山塊から延びてきた砂礫台地（低位段丘）に占地している。当遺跡周辺には松木田遺跡、谷口遺跡、峰遺跡など縄文時代遺跡が点在する。

検出遺構

検出遺構としては、中世期の水路がみられたのみで、縄文時代の遺構は検出されなかった。

出土遺物

遺物は包含層から縄文時代早期、前期、後期、晩期の各期土器片、石匙、石鏃、石斧、黒曜石チップ・安山岩チップなどが多く出土した。遺物の出土状況には時期的偏りはみられず、摩滅も少ないとから、この遺物包含層は近隣地からの二次的堆積土と考えられる。総量はコンテナケース4箱である。

まとめ

埋没谷を挟んだ北側の松木田遺跡では縄文時代早期の住居跡が確認されており、調査着手時には南側に隣接する当遺跡内においても当該期遺構の存在が想定されていたが、遺物包含層より土器片等は出土するものの遺構は確認されなかつた。出土遺物には縄文時代各時期の遺物がみられることから、断続的に営まれた住居地分布域の縁辺部を調査したものと考えられる。遺跡周辺の地勢は南側から北に向けて緩やかに傾斜していることから、その中心地は南側の近接地であると考えられる。

調査報告書は24年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (早良16一ツ家 791 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. 出土縄文土器

1026 箱崎遺跡第67次調査 (HKZ-167)

所在地 東区箱崎1丁目2806-1

調査面積 271m²

調査原因 共同住宅建設

担当者 松尾 奈緒子

調査期間 2010.9.27～12.17

処置 記録保存

位置と環境 箱崎遺跡は博多湾岸一帯に帶状に広がる箱崎砂丘と呼ばれる古砂丘の北端部に立地する。古墳時代初頭から本格的に集落が進出し、10世紀前半の箱崎八幡宮の創建後は東側の宇美川河口に設けられた「箱崎津」を中心に日宋貿易が行われ、中世を通じて博多と並ぶ貿易都市として繁栄していた。本調査区は箱崎遺跡の西側斜面中央部に位置している。



1. 調査地点の位置 (34箱崎 2630 1:8000)

検出遺構 調査は4面の遺構面を設定した。第2面では13世紀後半から14世紀前半の礎板を持つ柱穴、井戸8基、方形土坑1基、柵列を検出した。井戸の掘方は平面円形ないし梢円形、断面箱形を呈する。集水部を木桶とし、井筒を石組としたものが1基、それ以外の井筒は木桶である。また第3面では12世紀後半と思われる柱穴群等を確認した。



2. 調査区全景 (北東から)

出土遺物 遺物は土師器、瓦器、輸入陶磁器を中心とし、国産陶器、砥石、黒曜石剥片、鉄製刀子、釘などの土器、石製品、鉄製品が出土した。総量でコンテナケース39箱である。



3. 中世井戸 (南から)

まとめ 調査の結果本調査地点は、小規模な砂丘と砂丘の間の谷部に立地しており、12世紀前半までに谷部が埋没してほぼ平坦化し、12世紀中ごろから生活痕跡が確認され始め（第3面）、13世紀中ごろ～14世紀初頭に生活遺構が増加する（第1、2面）こうしたあり方は周辺の成果に沿うものであるが、砂丘西側に展開した屋敷地の中心からは外れた地点であると考えられる。

調査報告書は23年度に刊行予定である。

1027 原遺跡第27次調査 (HAA-27)

所在地	早良区原7丁目	調査面積	295m ²
調査原因	道路拡幅	担当者	山崎 龍雄
調査期間	2010.10.18~11.30	処置	記録保存

位置と環境 調査地は早良平野中央部北側、平野を南北に貫流する室見川の東岸に位置する。原遺跡は室見川支流の金屑川と稻塚川に挟まれた標高6~7mを測る低位段丘上に立地し、調査地は原遺跡の中央部西側に位置する。調査地の標高は6mを測る。

検出遺構 遺構面は東側で地表0.8m程の深さで、遺構面までの堆積土は上から0.5m厚の客土、0.2m厚の水田耕作土で、遺構面上に黒褐色土の包含層が0.1m厚で堆積する。遺構面は灰オリーブ粘質土、砂疊、砂質土で一定していない。調査地は以前マンションが建っており、その建物によって遺構面は著しい破壊を受け、残りは不良であった。調査は廃土の場内処理の関係から東側第Ⅰ区、西側第Ⅱ区として行った。検出した遺構は中世後半の館の周囲を巡る方形の区画溝1条で、北側コーナー部分を検出した。溝の規模は搅乱で全体は把握出来ないが、残存規模は幅2.5m、深さ0.7mを測る。

出土遺物 出土遺物としては、土師器小皿・环・鍋・瓦質土器、中国青磁・白磁、朝鮮陶磁などがあり、時期的には、15~16世紀頃のものである。上層から永楽通宝が1枚出土。また溝底からは淡水にすむ貝の貝殻も出土しており、水堀であったと考えられる。総量はコンテナケース11箱である。

まとめ 方形区画溝は調査区南西側の第9次・第22次調査区で確認した中世後期の館の区画溝とほぼ同時期のものであり、従来の推定より館が東側に広がる可能性がある。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (82原 311 1:8000)



2. 1区全景 (東から)



3. 2区全景 (西から)

1028 千里遺跡第2次調査 (SNR-2)

所在地	西区大字千里字北田398-1	調査面積	195m ²
調査原因	個人住宅建設	担当者	吉留秀敏
調査期間	2010.10.18~10.28	処置	記録保存

位置と環境

調査地点は1次調査の南側に位置する。糸島平野の東縁に位置し、高祖山の西麓を北流する周船寺川と川原川に挟まれた冲積微高地上に立地する。現在の千里集落の北辺にあたり、弥生時代前期で最大規模の支石墓があった現糸島市井田用会遺跡は、本地点の西約500mに位置する。調査は住宅予定地であり、南北約12m、東西約17mの範囲である。

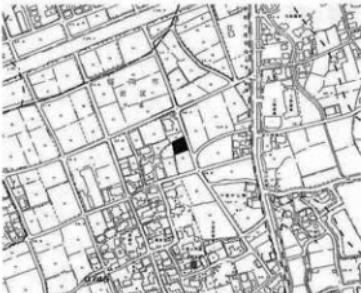
検出遺構

標高約15mの現代水田の床土直下が造構検出面である。その基盤は調査区の東西両端が砂礫混じりの微高地であり、中央の幅約8~9mは腐植土混じりの褐色土で、浅谷内埋土と見られた。造構の検出面は標高約13.5~13.7mである。検出遺構は中世の建物、柱穴、溝、土坑墓と、弥生時代中期の溝、弥生時代前期の墳墓群である。弥生時代中期の溝は水口があり、約200m北方の千里1次の同時期の水路に連続した灌漑水路と見られる。弥生時代前期墳墓群は東側微高地上に展開し、中世以降の削平を受けるが、壺棺墓5基、土坑墓3基が検出された。このうち土坑墓は小口側の一端もしくは両端に標石状の板石を設置する特異な構造であった。

出土遺物

造構出土遺物のほか、微高地西側の低地部（中世造構の基底部）は縄文時代晚期から弥生時代前期の包含層で、土器、石器類を多く出土した。出土遺物の総量はコンテナケース15箱である。

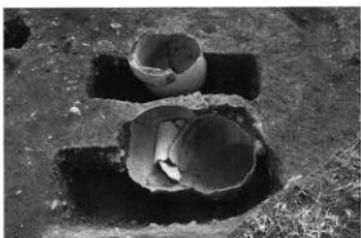
調査報告書は23年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (132千里 745 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 弥生前期壺棺墓 (北から)

1029 中村町遺跡第6次調査 (NMM-6)

所在地 南区若久1丁目11番

調査面積 163m²

調査原因 公園建設

担当者 屋山洋

調査期間 2010.10.26~11.26

処置 記録保存

位置と環境

中村町遺跡は那珂川左岸に位置し、片縄山から北東に延びる第3紀層を基盤とする南北方向に長い丘陵上に位置する。丘陵北端部は警固断層に面し、古くは海が内陸まで入り込んでいたと考えられており、特に縄文時代前期の海進期には丘陵北端近くまで湾が入り込んでいた可能性がある。これまでの調査では、6次調査の北側に隣接する4次調査で縄文時代後晩期の埋甕3基と土坑数基、8世紀代の区画溝6条と高床式倉庫や掘立柱建物が出土した。特に古代の遺構は丘陵頂部全体を溝で区画し、その溝に沿って高床式倉庫や掘立柱建物を配するなど大規模である。また古代の大型掘立柱建物は北側に500m離れた1次調査でも出土していることや、遺物は3次調査や5次調査など丘陵全体から出土していることから、古代の遺構は丘陵全体に広がるものと考えられており、規模の大きさから官衙や居館関連と考えられる。

検出遺構

今回の6次調査は4次調査に続く丘陵頂部に位置するが、調査区南端に入る東西方向の谷により南側の丘陵と離れるため、中村町遺跡の南端にあたる。遺構は4次調査と同様に縄文時代後晩期や古代の遺構が出土すると期待されたが、全体に削平や攪乱を受けており、遺構の残存状態は悪い。調査区北側で古代と思われる柱穴状遺構が数基と風倒木の可能性がある窪みから黒曜石の小片が出土した他、中近世以降の烟に伴う溝と時期不明の井戸が1基出土した。出土した土器はパンケース1箱である。

まとめ

削平と攪乱のため、期待された縄文時代の遺構は出土しなかったが、縄文時代と思われる遺物が風倒木の窪みから数点出土した。

報告書は平成23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (51高宮 167 1:8000)



2. 調査区全景 (南西から)



3. 掘立柱建物 (西から)

1030 片江B遺跡群第4次調査 (KEB-4)

所在地	城南区片江1丁目1020-3	調査面積	75m ²
調査原因	戸建住宅建設	担当者	佐藤一郎
調査期間	2010.10.29~11.19	処置	記録保存

1. 調査に至る経緯

2010年7月23日付けで山根木材(株)より福岡市教育委員会宛に、城南区片江1丁目1020-3における戸建住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会がなされた。埋蔵文化財第1課で確認したところ、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である片江B遺跡内であり、2005年8月2日に試掘調査がなされ遺構の存在が確認されていた。協議の結果、建設工事にあたって鋼管杭打設部分と車庫として掘削する部分を対象に記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

2. 位置と環境

片江B遺跡は、福岡平野西部を流れる樋井川中流域西岸、支流の一本松川とその支流片江川の間の油山から派生した丘陵上に立地している。本調査地は片江B遺跡中央部西側に位置し、標高25mの高い位置にある。

3. 遺構

客土直下で地山(花崗岩バイラン土)を確認、検出された遺構は柱穴・ピット状遺構の他に溝2条検出した。埋土をみる限り中世以降のものようである。

柱穴・ピット状遺構は平面円形の直径50cm前後のものが主で、直径20cmの柱痕跡が確認された。柱間距離は2.7mが主である。柱穴の残存する深さは最大で70cmで、柱穴の底部に根石を据えた柱穴もあった。調査面積が狭隘で、完結した建物としてまとめることはできなかった。柱穴掘り方から出土した遺物は土器小片2点のみで、時期は不明である。

4. まとめ

今回の調査地は丘陵の比較的高い位置にあり、丘陵裾部の第1・2次調査で検出された竪穴住居跡や土坑などの検出ではなく、ほとんどが柱穴・ピット状遺構であった。柱穴の残存する深さから大きく削平は受けていないようであるが、立地の違いに起因するのであろうか。



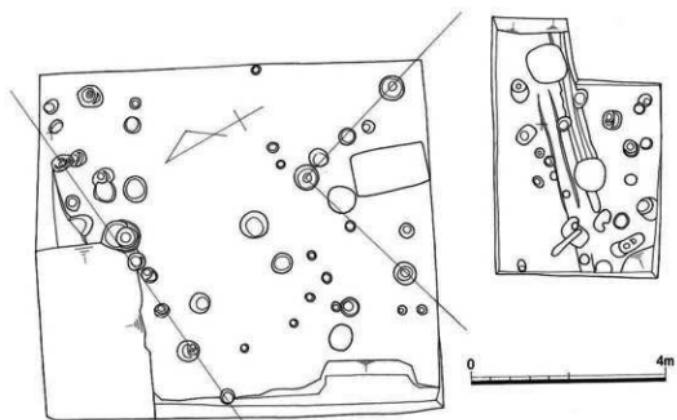
1. 調査地点の位置 (63長尾 203 1:8000)



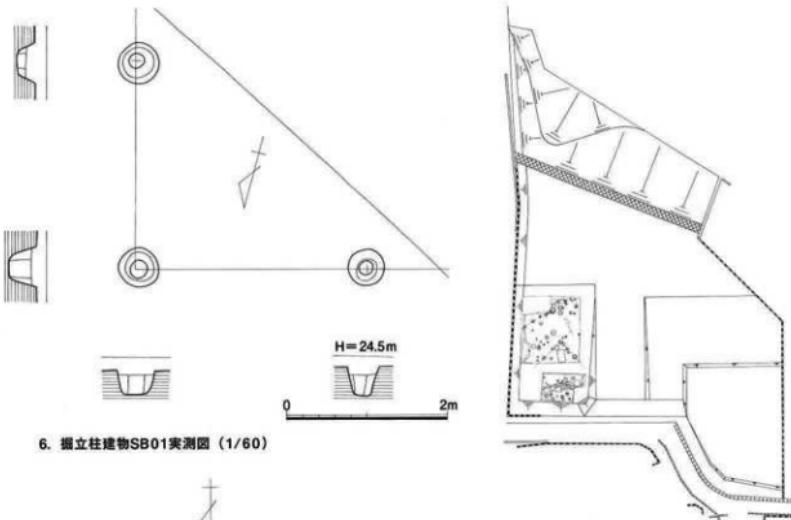
2. 北側調査区 (南から)



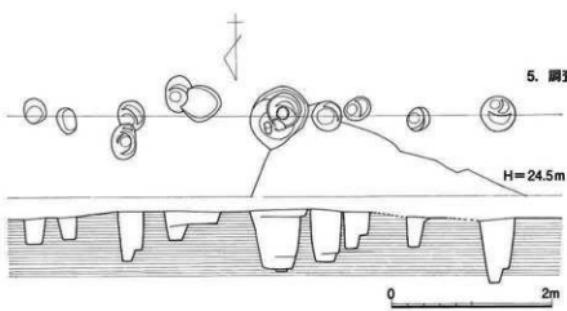
3. 南側調査区 (北西から)



4. 造構配置図 (1/100)



6. 据立柱建物SB01実測図 (1/60)



7. 柱列SA02実測図 (1/60)

1031 有田遺跡群第236次調査 (ART-236)

所在地	早良区有田2丁目14-10,34,35	調査面積	113m ²
調査原因	個人住宅建設	担当者	歳富士 寛
調査期間	2010.11.25~12.28	処置	記録保存

位置と環境 調査地点は有田遺跡群のほぼ中央部にあり、郡衙建物などを確認した189次調査の南側に隣接する。

検出遺構 検出遺構には溝、土坑、柱穴があり、その多くは中世から近代にかけてのものである。特筆すべきは調査区東側で確認した柱穴列であろう。本調査では西側の柱穴列で4間、東側では2間を確認でき、1辺0.8~1mの平面方形もしくは長方形を呈する。柱間は芯芯で西側柱穴列が1.95~2m、東側が2.05~2.1mをそれぞれ測る。大形掘立柱建物の存在を想定することができ、位置的には189次調査で確認された南北長舎の一部に当たるものと考えてよい。柱穴列はさらに南側へ延びる。

出土遺物 これら柱穴からは土器の細片などがわずかに出土したのみで、詳細な時期の決め手を欠く。出土遺物の総量もコンテナケース1箱に過ぎない。

まとめ このように今回の調査では189次調査区から統く大形掘立柱建物を確認できた。この庁舎は桁行17間以上の建物となる。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (82原 309 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. 柱穴 (東から)

1032 有田遺跡群第237次調査 (ART-237)

所在地	早良区有田1丁目20-1	調査面積	22.5m ²
調査原因	駐車場建設	担当者	佐藤一郎
調査期間	2010.12.25~12.28	処置	記録保存

位置と環境 有田遺跡は、福岡平野西部を流れる室見川、支流の金屑川にはさまれた洪積台地上に立地している。本調査地は有田遺跡の中央部に位置し、第66次調査が本調査地の東側隣接地、第28次調査が西側隣接地で行われている。

検出遺構 調査は駐車場進入路として切り下げられる部分を対象とし、耕作土直下で地山のローム層を確認したが、大きく削平を受けている。検出された遺構は第28次調査で検出された溝の延長で、肩部のみの検出となった。溝の埋土からは瓦質土器口縁部片が出土したのみである。表土中からは弥生土器や中近世の遺物が出土しており、土取り以前は遺構が密に存在していたようである。

**出土遺物
まとめ** 遺物は土師器などコンテナケース1箱である。今回の調査地は台地の最高所近くに位置し、今までの周辺の調査成果から弥生時代前期～中世の遺構が数多く存在することが予想されたが、土取りによって大きく削平を受け中世の溝の一部を検出するにとどまった。第28次調査で検出された敷石状遺構東側で確認された地山の立ち上がりの延長とみられる。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (82原 309 1:8000)



2. 調査区全景 (北東から)



3. 溝土層 (東から)

1033 有田遺跡群第238次調査 (ART-238)

所在地	早良区有田1丁目3番1,3番12	調査面積	243m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	屋山洋
調査期間	2011.1.11~2.25	処置	記録保存

位置と環境 有田遺跡は室見川の右岸に位置する標高約15mの中位段丘上に分布し、古い遺物としてはナイフ型石器が出土する。遺構は縄文時代中～後期に貯蔵穴等が出現し、弥生時代前期以降に集落が継続的に営まれ始め、後期には集落が台地全域に拡大する。古代には台地中央部に早良郡衙が築かれると共に、三本柱の欄に囲まれた大型高床式倉庫群が建てられるなど、台地全体に遺構が密に分布する。

今回の238次調査地点は台地の東端に位置する。調査区東端では隣地との高低差が2mを超えており、これは台地の東側を流れる金屑川によって削られた崖面と思われる。

検出遺構 調査区中央部で古墳時代初頭の竪穴式住居1軒と古墳時代後期の土坑1基、弥生時代～古墳時代の柱穴群を確認した。その他に土坑数基、井戸1基、大型土坑1基を確認したが、遺物が出土しておらず時期は不明である。竪穴式住居は一辺が4×5mの長方形を呈し、両短辺にベッド状遺構が付く。主柱穴は2本柱で、床面中央で炉を確認した。遺物は床面直上と屋内土坑から土師器甕や壺、椀などが出土した。調査区西側は若干窪んで黒色粘質土が堆積しており、台地との間に浅い谷が入る。鳥柄ロームと八女粘土の境界部分で炭化木を確認した。鳥柄ローム(ASO-4火碎流)堆積時の倒木と思われる。

出土遺物 遺物は住居跡から出土した土師器などコンテナケース8箱分が出土した。

まとめ 弥生時代末～古墳時代の集落が出土した。近世に東側に向かって段造成されており、調査区東側では遺構の残存状態が悪い。現在は本調査区が台地の東端だが、端部に大型の土坑があることから、近年まではまだ若干はあるが東に延びていたと思われる。

報告書は24年度以降の刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (82原 309 1:8000)



2. 調査区 (II区) 全景 (東から)



3. 竪穴式住居遺物出土状況 (南から)

1034 箱崎遺跡群第68次調査 (HKZ-68)

所在地 東区箱崎1丁目2718-4,2930-4 調査面積 66.4m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 榎本 義嗣
 調査期間 2011.1.11~2.14 処置 記録保存

位置と環境 箱崎遺跡は、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上の北端部に立地する遺跡で、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に囲まれる。調査地点は、遺跡が占地する南北に長い砂丘の尾根よりやや西側に下った緩斜面上に位置し、現地表面で標高約4m、遺構検出を行った黄褐色砂の砂丘基盤層で2.7mを測る。

検出遺構 今回の調査で検出した遺構は、12世紀後半から13世紀後半に位置付けられる井戸、土坑、溝、ピットであるが、調査区が狭いため、遺構の全容が知れるものは少ない。4基を確認した井戸の内、ほぼ全体を検出したものは、掘方径3.2m、検出面から深さ13mに平坦面を設け、西側の壁面寄りに井筒を据える円形の掘り込みをもつ。その内部には、径0.7mの木桶を水溜として設置するが、遺存状況は悪く、標高約0.5mで湧水する。出土遺物から13世紀中頃から後半に位置付けられる。他の3基は、いずれも調査区壁面にかかり、円形掘り方の一部を検出したにとどまるが、12世紀後半から13世紀代に遺物が出土している。また、12世紀後半で溝は、幅・深さ共に0.3mを測り、北西-南東方向に延びるが、井戸に切られる。その南北両側にも並行する同規模の溝を検出したが、途切れている。ピットにはスサ混じりの焼土塊を含むものが数基認められた。

出土遺物 出土遺物はコンテナケース6箱で、土師器、瓦器、須恵質土器、中国からの輸入陶磁器、硯や滑石製品などの石製品、獸骨等が出土した。

まとめ 今回の調査では、中世前半の集落の一部を確認することができた。箱崎遺跡が立地する砂丘の西側斜面が利用され始める12世紀後半になつて土地利用が開始されていることが追認できた。

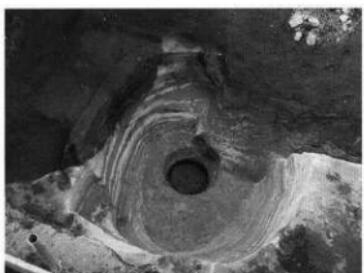
調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (34箱崎 2630 1:8000)



2. 調査区西側全景 (北東から)



3. 中世井戸 (東から)

1035 女原笠掛遺跡第2次調査 (MRK-2)

所在地	福岡市西区女原字向原	調査面積	228m ² (総面積501m ²)
調査原因	土地区画整理	担当者	瀧本 正志
調査期間	2011.1.13～調査継続中	処置	協議中

位置と環境 調査地は、伊都平野の東辺を画す高祖山(416m)から北へ延びる低丘陵西側斜面に位置し、標高8m前後を測る宅地である。丘陵は花崗岩バイラン土の堆積地形が浸食による開析で形成されている。東方400mの別丘陵先端には大塚古墳が立地し、近世後半期までは丘陵部先端付近まで海岸線が入り込んでいたと考えられている。当該地周辺は、過去の調査で平安時代の瓦や青銅製印章が出土していることから、古代の官衙の存在が推定されていた。

検出遺構 平安時代前期(9世紀)の瓦専用の地下式有階無段窯窓が3基と付随する灰原、さらには瓦窯を再利用した12世紀後半～13世紀初頭の中世墓が2基。古墳時代初頭の土器集積遺構や炭焼窯跡が1基。瓦窯は、全長5.1m～6m、幅1.6m、高さ約1mの規模を測り、いずれも煙道は欠失して天井部は落盤している。焚口には袖石を設け、燃焼部は船底状に掘り下げている。焼成部の勾配は19～22度。

出土遺物 土器類、須恵器、磁器、石器、瓦、鉄器がコシテナ箱で約300箱。大半が丸・平瓦であるが、二種類の軒丸瓦や軒平瓦、鬼瓦も出土している。

まとめ 瓦窯は、軒先瓦の出土状況から9世紀の鴻臚館建物整備に限定した供給を目的として築かれている。操業回数は、3基とも6回以上行われている。窯は窯体構造が明らかになる完全な状態で残っており、これまで不明であった鴻臚館に関係する瓦窯跡では初めてのことである。灰原の広がりから同地斜面には6～8基の瓦窯が設けられた可能性が高く、鴻臚館の建物規模を反映したものと考えられる。瓦生産における、採土から焼成・出荷に至る全工程が当該丘陵および周辺で行われていたと考えられるが、工房や採掘坑の発見には至っていない。

調査報告書は24年度に刊行予定。



1. 調査地点の位置 (112今宿 624 1:8000)



2. 第I調査区全景 (西から)



3. 2, 3号瓦窯 (西から)

1036 比恵遺跡群第123次調査 (HIE-123)

所在地	博多区博多駅南4丁目103,103-3	調査面積	285m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	山崎 龍雄
調査期間	2011.1.17~3.11	処置	記録保存

位置と環境

比恵遺跡は那珂川東岸、南北に延びる低丘陵の北側先端部に立地し、本調査区はその比恵遺跡の中央部に位置する。調査区周辺は比恵遺跡で古くから調査が行われている地区で、東側は1952年に行われた第2次調査区、北東側は第6次調査区、西側は第17次、20次調査区があり、各調査区で弥生時代から古墳時代にかけての集落や墳墓が検出されている。特に北側第6次調査区では副葬された銅剣を持つ壺棺墓を検出した。また壺棺墓の集中具合から第16次調査区にかけて方形の墳丘墓の存在が考えられていた。

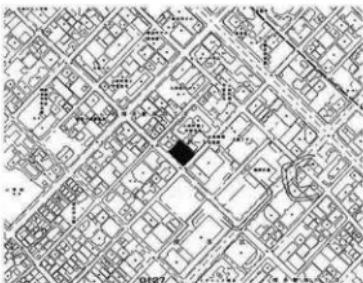
検出遺構

今回の調査区は第16次調査区を含む範囲で、高層の共同住宅建設に伴う調査である。古い事務所や倉庫が建っていたので、遺構面は基礎工事による破壊で良好ではなかったが、工事による破壊を免れた部分で遺構を検出した。遺構面の標高は6.5~7 mを測る。検出遺構の時期は弥生時代から古墳時代初めで、貯蔵穴1基、壺棺墓廐棄土坑1基、土坑5基、溝1条、ピットなどを検出した。溝は第16次調査区から続く古墳の周溝と考えられているが、下層から弥生時代後期終末から古墳時代初頭の土器が多く出土した。弥生時代の墳丘墓は基礎で破壊を受け確認出来なかった。

出土遺物

遺物は古墳周溝から出土した弥生土器、土師器のほか須恵器、越州窯系青磁など総量コンテナケース3箱である。

調査報告書は24年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. 壺棺墓 S T008 (南から)

1037 福岡城跡第63次調査 (FUE-63)

所在地 中央区城内1丁目1

調査面積 41m²

調査原因 園路整備に伴う確認調査

担当者 常松 幹雄

調査期間 2011.1.26~3.25

処置 埋め戻し保存

位置と環境 博多湾のほぼ中央部に突き出した福崎丘陵上に立地する。

検出遺構 福岡城二の丸跡を主体に東御門付近から鴻臚館跡展示館の南西にかけて19地点にトレンチを設定した。標高は東御門付近の17号トレンチが最も低く約8m、表御門前の4号トレンチが約18mで最も高い。

表御門前の4号トレンチで瓦敷き遺構、鴻臚館跡展示館の南西19号トレンチで道路状遺構の整地面を検出した。このほか扇坂御門跡付近の9号から12号トレンチの4ヶ所で石垣の基底部となる根石を確認した。

瓦などの出土遺物は、扇坂御門跡付近が最も多く、扇坂の東西に位置する8号・9号トレンチでは、国立病院があった時期の医療関連遺物なども出土した。

梅園となっている1号から8号までのトレンチを設定した一帯は、4号トレンチが地表下25cmで瓦敷き遺構が検出されたが、攪乱も目立っている。扇坂御門跡付近は、近世の瓦が露頭している箇所が見られる。19号トレンチでは現表土直下で道路状遺構が確認されており、整備にあたっては削平を少なくおさえるべきであろう。

出土遺物 瓦などコンテナケース50箱出土した。

調査報告書は26年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (60舞鶴 191 1:8000)



2. 4号トレンチ発掘状況 (東から)



3. 19号トレンチ道路状遺構 (西から)

1038 中ノ原遺跡第5次調査 (NNH-5)

所在地 博多区西春町4丁目1

調査面積 650m²(総面積900m²)

調査原因 事務所建設

担当者 小林 義彦

調査期間 2011.2.1~4.16

処置 記録保存

位置と環境 福岡平野の東部を北流する御笠川中流域左岸には春日から雑削限を経て板付へと続く低丘陵が流域に沿って複雑な開析谷を形成ながら続いている。中ノ原遺跡は、この低丘陵南縁の福岡市と春日市、大野城市が交錯して市境をなす福岡市の最南端部に位置している。この北へ延びる丘陵上には、南八幡遺跡や雑削限遺跡、麦野A~C遺跡、高畠遺跡、板付遺跡があり、弥生時代から古墳時代を経て古代の遺構群が連続と続いている。

検出遺構 今回の調査では、奈良時代後半の竪穴住居跡9棟、掘立柱建物跡2+a棟、土壙9基とピットなどを検出した。竪穴住居跡は、概ね一辺が1.5~2.2m×2.9mの小型住居(SC-03-04-13)と3.2~3.5m×4.2mのやや大型住居跡(SC-01-02-06-09-13)に大別される。これらの住居跡には、南壁を除く壁面のコーナー寄りに掘込式の竈が壁外に張り出して付設されている。竈は壁面から灰白色粘土を厚く弧状に巡らせて袖部を作り出し、煙道は壁外に延ばしている。土壙は、円形プランの土壙と長方形プランの土壙に大別される。円形プランの土壙は、直径が1.6~2m(2基)。また、長方形プランの土壙は、一辺が1.8~2.2m×2.8~3.2mの大型土壙(4基)と0.9m×1.3mの小型方形土壙(3基)がある。このうち小型方形土壙の壙底には直径が20~30cmのピットがあり、落とし穴の可能性が想起される。

出土遺物 これらの住居跡や土壙、ピットからは土師器や須恵器の甕や高杯、坏、坏蓋、瓶などのほか鉄製品などがコンテナケースに8箱出土した。

まとめ 中ノ原遺跡のある雑削限から高畠に至る丘陵上には、奈良時代の住居群や掘立柱建物からなる集落域が広範囲かつ濃密に拡がっている。本調査区では住居跡の遺存状況も良く、竈の構造が明らかになった。

調査報告書は平成24年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (13堆削限 2816 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. 12, 13号住居跡 (南から)

1039 有田遺跡群第239次調査 (ART-239)

所在地	早良区有田2丁目14-36	調査面積	95m ²
調査原因	個人住宅建設	担当者	藏富士 寛
調査期間	2011.2.1~3.11	処置	記録保存

位置と環境 本調査地点は236次調査地点に南接する。

検出遺構 溝、土坑、柱穴といった弥生時代・奈良時代を中心とする遺構を確認した。弥生時代の遺構には溝（後期）、貯蔵穴（前期）がある。

本次調査において特筆すべきは調査区東・南側で確認した柱穴列である。まず189、236次調査で確認した郡庁を構成する南北長舎（SB02）の南端を確認し、この長舎は梁行2間、桁行21間の建物であることが判明した。桁行の総長は42.4mである。そして長舎の南側には東西方向を向く建物の存在を新たに確認できた。柱穴の配置をみれば「長舎」とならない可能性があり、現時点では、梁行2間、桁行4間の建物+αの存在を想定している。これら柱穴列からは須恵器等の破片が出土しており、年代の比定が今後の課題である。

出土遺物 出土遺物の総量はコンテナケース2箱である。

まとめ 今回の調査では189、236次調査で明らかとなった郡庁の南東隅部を確認することができた。この成果は郡庁の全容を解明するための重要な所見となるだろう

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (82原 309 1:8000)



2. 大形建物 (東から)



3. 大形建物 (南から)

1040 井相田C遺跡第9次調査 (ISC-9)

所在地 博多区井相田2丁目4-4-17 調査面積 496m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 佐藤一郎
 調査期間 2011.2.7~4.4 処置 記録保存

位置と環境 井相田C遺跡は、福岡平野の東辺を南北に貫流する御笠川中流域左岸の低位段丘面に立地している。本調査地は井相田C遺跡の南東部に位置し、本調査地の北側隣接地で第2次調査が行われている。

検出遺構 盛土・耕作土・床土下に灰褐色粘質土（遺物包含層）・黒色粘質土・黒灰色土（粗砂を含む）が堆積している。遺構の覆土は上面の遺物包含層とはほぼ同じ灰褐色粘質土で、溝や柱穴など黒褐色粘質土上面で確認された。

検出された遺構は第2次調査で検出された溝の延長の他、溝8条、掘立柱建物（2間×2間）1棟の他建物の一部とみられる柱列を検出した。

西側約1/3は旧河川の落ち込みとなり、顕著な遺構は検出されなかった。

出土遺物 溝や柱穴掘り方からは6世紀後半～末の須恵器・土師器が出土している。黄褐色粘質土層からは8世紀代の土器が出土しているが、遺構は検出されていない。遺物の総量はコンテナケース6箱である。

まとめ 今までの周辺の調査成果から古墳時代後期～古代の遺構が存在することが予想されたが、調査区の西側には旧河川がかかり、今回調査された範囲は集落の辺縁部とみられる。8世紀代の遺構は検出されなかったが、遺物包含層出土の土器は周辺の集落の存在を示唆するものである。

調査報告書は24年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (12メッシュ 2630 1:8000)



2. 調査区全景 (北東から)



3. 掘立柱建物 (北東から)

1041 谷上古墳群第4次調査 (TNK-A-4)

所在地 西区今宿上ノ原字イヤソノ796-1 調査面積 95m²
 調査原因 重要遺跡確認 担当者 杉山富雄
 調査期間 2011.2.15~3.25 処置 現状保存

位置と環境 山地裾の北方と東南方から伸びる谷の分水嶺にあたる鞍部の後線に沿って立地する。後線はなだらかで、その縁に沿うように古墳が築造されている。

検出遺構 A群8号墳についてトレンチによる調査を行い、併せて7号墳について遺存状況を確認した。8号墳の墳丘は、径10m程であるが、南の斜面側から見ると見かけ上はより大きい。この南面する墳丘斜面には葺石が残り、南の谷側から見ると2段ないし3段の段築となっていたものとみえる。

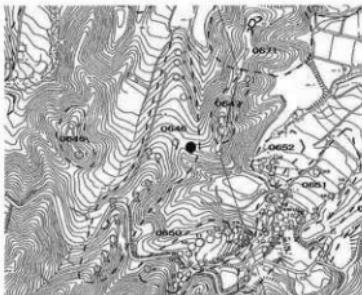
石室は北からやや西に振れた方向、今津湾に向かって開口する竪穴式横口式石室で、天井部及び床部は遺存しない。閉塞部は、ほぼ原状を留める。

石室の長さ2.4m、幅1.4m程の規模で、掌大から枕木までの石材で構築している。床面は掘り取られたようで敷石などの構築材、遺物もほとんど確認できなかった。袖石は偏平な大蹠を両袖に立て、閉塞石も板石である。前部側壁は「ハ」の字状に広がる。

出土遺物 石室内から鉄器断片が、馬蹄形溝、石室前庭付近の墳丘部から土師器、須恵器及び鉄滓が標本箱1箱程の分量出土した。

石室の構築材として、付近で採取される花崗岩蹠のほかに対岸の今山周辺で産出する掌大の玄武岩扁平蹠を用いている。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (113青木 646 1:8000)



2. A 8号墳 (南から)



3. A 8号墳石室 (北西から)

1042 吉武遺跡群第20次調査 (YST-20)

所在地 西区大字吉武202番地

調査面積 844m²

調査原因 確認調査

担当者 大庭 康時

調査期間 2011.2.22~3.31

処置 埋め戻し保存

位置と環境 吉武遺跡群は早良平野を博多湾に向かって北流する室見川の左岸扇状地上に立地する遺跡群で、これまで圃場整備・道路建設・史跡整備等により19次の調査が行われている。今回の調査は、史跡整備を行うために高木地区の大型掘立柱建物跡SB02と高木地区埋葬遺構群との間の未調査部分において、同様の大型掘立柱建物の有無、遺構の重複関係、時期等の確認を目的として実施した。

**検出遺構
出土遺物** 全体に遺構面が大きく削平され、遺存状態は悪かった。溝1条、土坑、ピットなどを検出し、弥生土器を主に土師器、須恵器、石器などコンテナ15箱の遺物が出土した。遺構の多くは、弥生時代中期前半に属するもので、弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺物は皆無で、5世紀後半の遺物を出土する土坑が若干見られる。

弥生時代中期前半では径150cmを越える大型の柱穴を数基検出したが、遺存状態が悪いため遺構底面まで15cm前後を測るに過ぎず、かろうじて柱痕跡を確認するに留まった。

調査区南半分で、西から東に向かって下降する谷の谷頭部分を検出した。谷の上層には粘質土が堆積し、溜池として利用されていたことがうかがわれる。この粘質土に含まれる遺物は、弥生時代中期の土器と5世紀後半の須恵器であり、遺構出土遺物と共通する。

まとめ 調査区南半で検出した谷頭は、第4次調査で検出した大型掘立柱建物SB02のすぐ南に位置するもので、これにより、SB02は北と南を谷地形、東を室見川の段丘で囲まれた小規模な尾根状の張り出しの先端に営まれていたことが明らかとなつた。

調査報告書は2012年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (93都地 405 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 弥生時代土坑 (北から)

1043 元岡・桑原遺跡群第56次調査 (MOT-56)

所在地 西区大字元岡字二又

調査面積 300m²(総面積5,000m²)

調査原因 大学移転用地造成

担当者 吉留秀敏 大塚紀宜

調査期間 2010.9.14~継続中

処置 協議中

位置と環境 56次調査区として設定された範囲は、55次調査の北西側に隣接する尾根、谷を含む一帯である。地勢的には42次、52次、55次の範囲と合わせて北西から南東に延びる尾根とその両側の谷を含む一体の空間を構成している。尾根部分は戦後の果樹園造成により大きく改変されている。調査は尾根部分の試掘調査より開始し、確認された古墳の本調査、次いで谷部分の本調査に順次移行する工程で進められている。

検出遺構 平成22年度の調査は尾根部分の試掘調査および、尾根東側斜面で確認された古墳の確認調査を主眼とする。尾根部分の試掘調査の結果、これまで未確認であった小石室を確認し、元岡古墳群G群3号墳とした。また踏査の結果、同一尾根上に2基の古墳を確認し、それぞれ4号墳、5号墳とした。尾根の両側の斜面の試掘調査では、東側斜面で古墳1基と、古代とみられる遺構群を検出した。古墳は墳丘がほとんど失われているが石室の遺存状態は良好とみられる。試掘の結果、墳丘直径約18mの円墳と推定され、同6号墳として現在調査継続中である。

出土遺物 G群3号墳の石室床面付近から水晶・瑪瑙製玉類が出土した。また同6号墳からは周溝内などから須恵器片が出土し、石室入り口付近からは馬具の一部が出土した。出土遺物量はこれまでのところパンケース1箱相当である。

まとめ G群6号墳は出土した須恵器の年代より7世紀前半を下らない時期とみられるが、詳しい年代や被葬者については23年度に予定している主体部の調査を待って考えたい。同3号墳は遺存状態が悪く、詳しい年代や古墳本来の規模は不明であるが、出土遺物の質が高いことが注目される。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (140元岡 2782 1:8000)



2. G6号墳 (南から)



3. G6号墳石室 (南から)

1044 南八幡遺跡第18次調査 (MHM-18)

所在地 博多区元町1丁目7-1

調査面積 148m²

調査原因 共同住宅

担当者 加藤 隆也

調査期間 2011.3.1~3.4

処置 記録保存

1. 調査に至る経緯

平成22年12月17日、福岡市博多区元町1丁目7-1における共同住宅建設のための埋蔵文化財の有無についての照会文書が教育委員会埋蔵文化財第1課事前審査係に提出された。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である南八幡遺跡の範囲内であり、平成20年に一度照会文書が提出され、同年に試掘調査を行っている地点であることを確認した。平成20年9月18日に申請地のほぼ中央部に1本の試掘トレンチを掘削しており、現地表面より1.6m下のローム層上面にてピット状遺構を検出している。今回の計画は共同住宅の建設であり協議の結果、基礎工事により破壊される遺跡範囲において記録保存のための発掘調査を行うことになった。発掘調査は2011年3月1日から調査区の掘削作業を着手し、同年3月4日に埋め戻し作業を終了した。

2. 位置と環境

南八幡遺跡は、御笠川の左岸に残る低丘陵に位置している。付近には「奴国」の王墓と推定されている須玖岡本遺跡をはじめとして弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が点在し、奴国の中心的な地域と考えられている。本調査地の北側近接地は第8次調査が行われており奈良時代の井戸や溝などが検出され、円面鏡や布目瓦片が出土している。また、道路を挟んだ西側の調査地（トナシ遺跡）では古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居と掘立柱建物跡で構成された集落が発見されている。この集落は、今回の調査対象地にまで広がっていると予想されていた。

3. 遺構と遺物

調査は敷地に対して調査対象域が広くまた、遺構面が深く移動させる土量が多いため、調査区を4つに分け廃土を反転させながら行った。遺構検出作業面は厚い造成土下、黒ボク状土直下のローム層の上面である。遺構面は調査地東側が高く、西側に向かって緩やかに低くなっていた。検出遺構としては、ピット状の遺構がみられるのみで、その他の遺構は検出されなかつた。遺物はピット状遺構から土師器や須恵器の小破片が出土した。



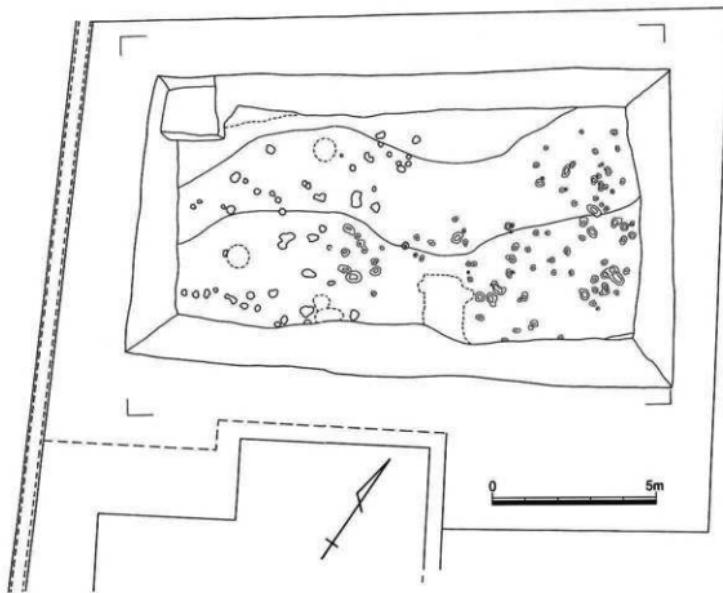
1. 調査地点の位置 (12番野 51 1:8000)



2. 第1区遺構掘削状況 (南西から)



3. 第4区遺構検出状況 (南西から)



4. 遺構全体図 (1/150)



5. 第3区遺構検出状況（南西から）



6. 第2区遺構検出状況（南西から）

4.まとめ

今回の調査では良好な遺構を検出することができなかったが、地勢が西側に向かって緩やかに低くなっていることを確認することができた。西側のトヲナシ遺跡では良好な集落遺跡が分布しており、今調査地から現存道路部にかけて小さな谷（低地部）の存在を明らかにすることができた。第8次調査出土の遺物などが示唆するように、南八幡遺跡周辺では官衙や寺院などの公共的施設の存在が想定されており、今回の成果はその景観を考える上で重要な資料となった。

1045 堅粕遺跡第11次調査 (KKS-11)

所在地	博多区堅粕3丁目573番1	調査面積	39m ²
調査原因	専用住宅建設	担当者	長家伸
調査期間	2011.3.7~3.8	処置	記録保存

調査にいたる経過

平成22年12月3日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会があり（事前審査番号22-2-856）、平成22年12月24日に試掘調査を行ったところ、土坑、ピット等の遺構を確認した。協議の結果、申請面積95.7m²のうち、建物部分49.68m²については地盤改良により遺構に影響を与えるため、建物建設部分のみを対象として、発掘調査を行うこととした。なお、それ以外の部分については現状保存としている。出土遺物はコンテナ1箱である。

調査地点の位置

堅粕遺跡は博多湾岸に形成された砂丘上に立地する。現在は石堂川によって画されているが、本来この砂丘は博多遺跡群南側の砂丘列に繋がるものと考えられる。今回の調査地点の北側では5次調査が行われており、越州窯系青磁、縁釉陶器、墨書き土器などが出土しており、公的な施設の存在が想定されている。

遺構と遺物

調査は廃土処理の関係から、対象範囲を4分割して行った。現況地表面は標高3.4mを測り、遺構面は80cm程の盛土を除去した標高2.6m前後の平坦な浅黄橙色砂上面であるが、遺構面は削平が進み旧地形は保っていない。検出遺構は溝、土坑、ピットであり、調査区全面で確認している。遺構埋土は灰黄褐色砂～黒褐色を主体とし、古墳時代後期～古代に位置づけられる土師器、須恵器、瓦破片等が出土している。

SD03 幅90cm、検出面からの深さ30cmを測る。平面は弧状に伸び、東側で立ち上がる。切り合い関係よりSP11、12に後出するものと考えられる。

出土遺物 1は土師器壺の口縁部である。外面頸部には縱刷毛、内面は口縁部が横刷毛、胴部にはヘラ削りを行う。2～4は須恵器である。2、3は壺で、2は外底面ヘラ切りによる。4は高环の筒部である。

SK04 南隅で検出する。擾乱等により形状は不明瞭である。西側に一段平坦面を有し（1・2層）、東側は円形土坑状に掘り込まれている（3・4層）。出土遺物から2基の切り合いの可能性も考えられる。なお2層には焼土を多く含んでいる。



1. 調査地点の位置 (35吉塚 122 1:8000)

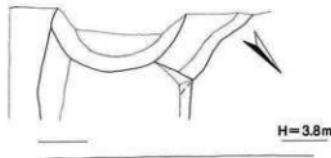


A SD03 H=3.8m B



1 灰黃褐色砂
2 黑褐色砂(SP12理土)

SK04

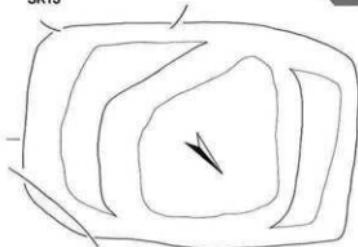


H=3.8m

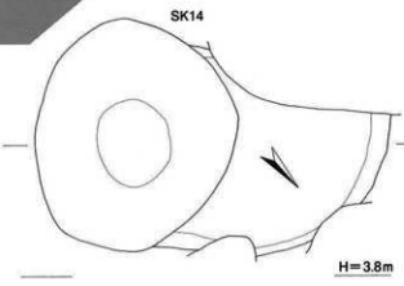
- 1 にぶい赤褐色砂
2 黄灰色砂
3 にぶい褐色砂
4 黑褐色砂

盛 土

SK13



SK14



H=3.8m

H=3.8m

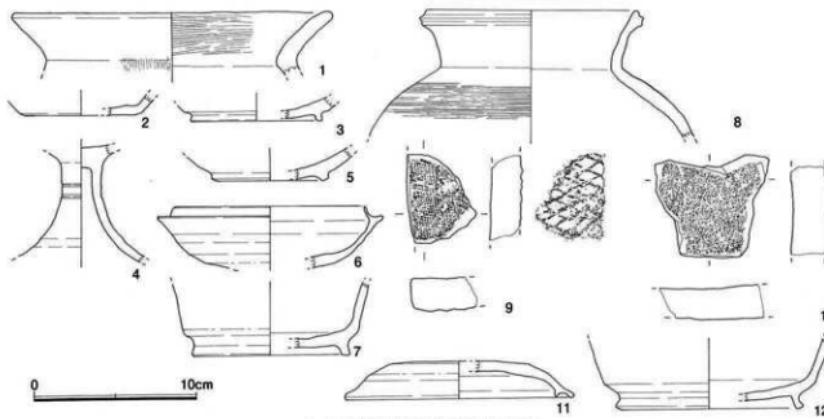
黄橙色砂

灰白色砂

白色粗砂

0

1m



3. 掘出遺構、出土遺物 (1/40.1/3)

出土遺物 5は1・2層出土の内黒土師器椀である。外面は浅黄色を呈する。6、7は5・6層出土須恵器である。6は蓋受けを有する杯身で、外底面は回転ヘラ削りを行う。7は屈曲部近くに高台を貼付し、外底面には回転ヘラ削りを行う。

SK13 東側コーナーをSK14に切られている。長軸2.7m、短軸1.9mを測り、平面隅丸長方形を呈する。掘り込みは東西両短辺側に一段平坦面を有し、中央部は検出面からの深さ60cmとなる。埋土は上半が鈍い黄褐色砂、下半が黒褐色砂である。

出土遺物 8は須恵器甕である。胴部外面はカキ目状の条線を有し、内面は回転ナデによる。9は平瓦片である。橙色を呈し、凹面布目、凸面斜格子の叩きが認められる。

SK14 径1.6～1.9m、検出面からの深さ12mを測る。底面径は50～70cmを測り、形状は逆円錐台を呈する。埋土は上層黒褐色砂、検出面から80cm以下は暗黄褐色砂に黒褐色砂をブロック状に含み、底面から5cmほどは灰白色粗砂となる。切り合い関係よりSK13に後出するが、詳細な時期は不明である。

出土遺物 10は平瓦片である。灰白色を呈し、凹面には布目が残る。

その他の遺物

11、12はSPI12出土須恵器である。11は蓋で、天井部は回転ヘラ削りを行う。12は裾を外方に張り出す高台を有し、外底面は回転ヘラ削りを行う。

まとめ

今回の調査は堅粕遺跡の東端部付近に位置している。北側に隣接する5次調査において越州窯系青磁、緑釉陶器、墨書き土器などが出土しているが、今回の調査で確認されて遺構もほぼ同時期のもので、該期の遺構群が更に広がりを見せることが確認できた。また、これまでの試掘調査によっても遺構群は更に南に広がることが判明している。今後は各遺構の有機的な関連及び古代に造営された施設について性格の解明が求められる。



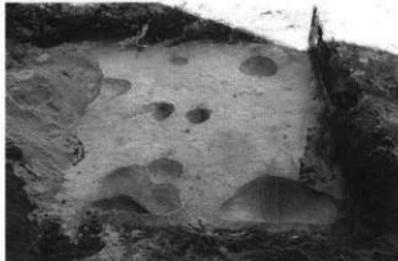
4. 調査区南側全景（南から）



5. SK13（西から）



6. SK14（北から）



7. 調査区東側全景（南西から）

VI 平成22年度福岡市新指定文化財

平成22年度の福岡市新指定文化財は、平成23年1月31日開催の福岡市文化財保護審議会において、11件の文化財について答申を得、平成23年3月17日の福岡市公報により告示された。

【指定文化財の概要】

指定区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者
有形文化財	建造物	承天寺開山堂	1棟	福岡市博多区 博多駅前1-29-9	宗教法人 代表役員 承天寺 神保 至雲
	建造物	承天寺唐門	1棟	福岡市博多区 博多駅前1-29-9	宗教法人 代表役員 承天寺 神保 至雲
	建造物	承天寺鐘樓	1棟	福岡市博多区 博多駅前1-29-9	宗教法人 代表役員 承天寺 神保 至雲
	彫刻	木造千手觀音菩薩立像	1躯	福岡市西区 大字小田2973	宗教法人 代表役員 福壽寺 平分 道隆
	彫刻	木造十一面觀音菩薩立像	1躯	福岡市西区 大字小田2973	宗教法人 代表役員 福壽寺 平分 道隆
	彫刻	木造六臂觀音菩薩立像	1躯	福岡市西区 大字小田2973	宗教法人 代表役員 福壽寺 平分 道隆
	絵画	絹本着色不動明王二童子像	1幅	福岡市博多区 上呉服町13-14	宗教法人 代表役員 入定寺 清原 宗鴻
	絵画	絹本着色愛染明王像	1幅	福岡市博多区 上呉服町13-14	宗教法人 代表役員 入定寺 清原 宗鴻
	古文書	麻生文書	229点	福岡市早良区	個人蔵
天然記念物	植物	橋本八幡宮のイヌマキ群落	1件	福岡市西区橋本2-29	宗教法人 氏子総代 橋本八幡宮 柴田 栄一
	鉱物	長垂の含紅雲母ベグマタイト鉱物標本	552点	福岡市中央区 舞鶴2-5-27	福岡市少年科学文化会館

1. 承天寺開山堂 1棟（有形文化財／建造物）

2. 承天寺唐門 1棟（有形文化財／建造物）

3. 承天寺鐘樓 1棟（有形文化財／建造物）

承天寺は臨済宗東福寺派に属し、山号は万松山。仁治3（1242）年に創建された。開山は聖一国師（円爾）、開基檀越は宋出身の貿易商、謝国明と大宰少弐の武藤資頼と伝える。かつては謝国明寄進の寺領100町余を有し、鎌倉時代には國師の高弟が次々住持となり、室町時代には天下十刹に列するなど栄えた。

開山堂は都市計画道路で分断された境内北東側、庫裡、方丈の南に北西に面して建てられており、前側の外陣と後側の内陣、間をつなぐ相の間から構成される。

外陣の天井は格天井で高く、床は四半敷きの磚（せん＝タイル状の焼き物）を敷く。禅宗建築の特徴を示している。堂内には向かって右に謝国明と武藤資頼の像、左には觀音像と開山堂再建の施主、明石甚太夫昌直の像を置く。内陣の天井は格天井、床は疊敷き。正面三間に壇を造り中央に聖一国師の像を置く。側面には花頭窓を付け、更に前方は側面に張り出して位牌壇を設ける。位牌壇に歴代住持の位牌を並べる。外陣、内陣ともに左右対称の造りである。

寺伝によれば承天寺開山堂は元禄8（1695）年の再建とされる。詳細に見ると、外陣内部頭貫型虹梁や側面扉上虹梁、向拝部分の繩（海老）虹梁、木鼻などに17世紀後半に遡る部材が見られるほか、外陣の柱も風蝕や面取りの幅から古く遡ると考えられる。一方で、外陣主屋中央間虹梁や相の間境虹梁の絵様は18世紀後半に下る。更に、外陣の向拝虹梁、内陣の主要な柱材は外材と見られる目の詰まった材が用いられており、近代の所産と見られる。その他、現在建物が載る基壇も新しく、また軒の出が浅く基壇の端と位置が合わない点も最近の改修と見られる。ただし内陣小屋裏の調査では、梁などは古い部材が用いられている。

開山堂は、現在、北西に面しているが、江戸期の資料を見ると南西に面して描かれており、90°向きが変わっている。特に建物を個別に描いている「承天精舍境内全図」では、位牌堂屋根の棟の方向が現在と異なっている。大正～昭和初期の地図では開山堂は南西に面しているが、昭和29（1954）～35（1960）年の間に撮影されたと見られる航空写真には、北西面する開山堂が写っている。

承天寺開山堂は、改修、改変を受けながらも建立年代が明らかで、なおかつすぐれた意匠をもつ。市内の開山堂の類例は、妙楽寺や聖福寺の例が知られる程度である。市内でも数少なくなっている近世に遡る社寺建築として、貴重な建造物である。



開山堂外観



開山堂外陣内部



開山堂内陣内部



開山堂内に祀られる武藤資頼と謝国明像

唐門は、開山堂正面に相対して位置する向唐門。寺伝によれば、安政7（1860）年に再建されたとあり、建築様式はこの記録と合致する特徴を有する。建築年代が明らかで当初の姿をとどめる禅宗寺院の唐門である。

鐘楼は、道路で分断された境内地の南西側、仏殿の東南隣に建つ。かつては現位置に近い場所に建てられていたが、昭和41（1966）年の都市計画道路拡幅で境内が削られた際に本堂近くに移築され、その後昭和62（1987）年に現位置に移された。以前は重要文化財の銅鐘が吊されていた。

寛政期の『筑前国統風土記附録』によれば、この鐘楼はもと志摩郡桜井神社（現糸島市）にあったものを、寛文12（1672）年に桜井神社が唯一神道になった際、博多の商人、谷宗理が買い取り寄進したとされる。移設時期については、『東福寺誌』では延宝2（1674）年となっている。これが事実とすれば、鐘楼の建築年代はこれらの時代よりも遡ることになる。慶安4（1651）年に桜井神社の境内を描いた絵図、「桜井与止姫古図」（福岡市博物館所蔵）には、承天寺鐘楼とよく似た袴腰付の鐘楼が描かれている。木鼻、蓑殿、拳鼻等の部材は17世紀前半の特徴を備えており、諸記録に見られる年代と大きく齟齬を来すものではない。一部、18世紀後半以降のものと考えられる部材も見られ、この時期に大規模な修理が行われたと考えられる。また、江戸時代に描かれた各種の絵図には、現在と同様の位置関係に鐘楼が描かれているが、中には屋根が植物質に描かれたものもあり、一時期、コケラ葺等の屋根であった可能性がある。

度重なる移設に伴い修理されているものの、当初の姿を残す良好な修理が行われていると推測される。袴付の鐘楼造構は市内では数少なく、当遺構のはかは宝曆9（1759）年の聖福寺鐘楼があるのみ。建立年代が17世紀に遡り、軒の組物が三手先尾垂木付、腰の組物が三手先という本格的な鐘楼建築である。



唐門外観



鐘樓外観



鐘樓上部



鐘樓軒先

4. 木造千手觀音菩薩立像 1躯（有形文化財／彫刻）

5. 木造十一面觀音菩薩立像 1躯（有形文化財／彫刻）

6. 木造六臂觀音菩薩立像 1躯（有形文化財／彫刻）

觀音菩薩立像3躯が安置される真言宗萬歳山光明寺（通称小田觀音堂）に関して述べられた近世以前の史料は現在のところ確認することが出来ず、その草創以降の歴史について不明な点が多い。光明寺は18世紀初期には既に無住の寺となり、遅くとも文政3（1820）年までには、同じ小田村内の臨済宗東福寺派承天寺末

福壽寺の管理下に入っていた。

木造千手觀音菩薩立像は觀音堂内陣中央に位置する。像容は蓮花座に正面を向き直立する。天冠台上に十一面と化仏を戴き、真手は胸前で合掌し腹前に宝鉢手を組む。左右に現された脇手は総数四十二臂を数える。全体的に重量感のある太造りな体躯で、伏し目がちな厳しい眼差しに頬の膨らみを強調した下ぶくれの顔貌、厚く丸みのある胸の肉付き、腹部を筒状に極めて細く絞り長大に強調された下半身、衣の裾を短くして足首を現すといった造形的特徴、そして内側の無い一本彫であるという構造を含めて、像容に古様を保つ。また下半身前部に腰から膝下まで垂れる腰帯の形態や裳の上端左右に覗いた腰帯の意匠に、福岡県鞍手町長谷寺十一面觀音菩薩立像（国重文）や市内志賀島莊嚴寺聖觀音菩薩立像（市指定）等との共通性が見出され、北部九州における平安時代の一本彫像の系列の中に本像を位置づける試みがなされている。

造像時期に関しては、類例との比較からその古様を評価して10世紀後半から11世紀前半とする説、造像の背景に日宋貿易によってもたらされた大陸文化の影響を想定し、造像時期を11世紀の中期まで遅らせる説がそれぞれ提示されている。造像の主体は不明とする他ないが、長元元（1028）年に日本へ来航した宋人商人周良史の寄港地が「筑前怡土郡北崎」（「小右記」）であったという史実や航海の守護者としての觀音菩薩の性格を踏まえれば、造像の経緯に、博多湾口に位置する対外・国内航行の重要な中継地としての小田・北崎の地域の特性を関連させて考えることが可能であろう。

なお、本像については背面及び台座心柱に記された銘文によって、近世段階の宝永7（1710）年から翌正徳元（1711）年と、慶応3（1867）年の4月から6月にかけて、二度の補修を経たことが判明する。一度目の修復に当たったのは京都大宮蛸薬師の大仏師照暉、大工は間九郎次、塗師は斎藤源七と筑前御笠郡武藏村の与三右衛門であった。二度目の修理は福岡藩中老大音左京の家来である塗師市村三七と同文助が行い、漆箔のみ補修されたと考えられる。

木造十一面觀音菩薩立像は觀音堂内陣、千手觀音菩薩立像の左隣に位置する。像容は蓮花座に正面を向き直立する。胸の下を絞り下半身の張りを強調する造形や膝下の腰帯の形状、腰部前面左右の腰帯の意匠など全体としては千手觀音と共通する作風であるが、衣文の彫りの浅さや腰帯の紋様が崩れている点などに表現の形式化が看取される。また千手觀音とは異なり、本像では肩から流れる天衣が両脇下で腕の内側へ巻かれ、体に沿って垂下している点が特徴的である。一般的な菩薩像の服制では天衣が膝前まで巡るのが定式であり、本像における天衣と腰帯の形態を中心の様式の影響と捉え、本像の造像時期を北部九州に定朝様が広まる11世紀後半以降とする考えが提示されている。



木造千手觀音菩薩立像

なお本像についても千手觀音菩薩立像と同様、背面及び台座心柱に記された銘文によって、近世段階で宝永7年（1710）年と慶応3年（1867）年に二度の補修を経たことが判明する。

木造六臂觀音菩薩立像は觀音堂内陣、千手觀音菩薩立像の右隣に位置する。像容は蓮花座に正面を向き直立し、真手は胸前で合掌する。左右に二臂ずつの脇手が配される。本像については、背面脇手の取り付け部下方にやや余裕があり、本来さらに二臂の脇手が配されて八臂像であった可能性が指摘されている。その場合、像名は不空羂索觀音が相応しい。十一面觀音と同様に服制等は千手觀音菩薩立像と共に通する作風であるが、腰帶の紋様等、細部においては表現の形式化が進んでいる。肩から垂下する天衣と膝下の腰帯とが連続して輪状に表現されている点等はその一例である。造像時期についても十一面觀音と同様に、北部九州に定朝様が広まる11世紀後半以降とする考えが提示されている。なお本像についても他の2躯同様、近世段階で二度の補修を経たことが判明する。



木造十一面觀音菩薩立像



木造六臂觀音菩薩立像

※影刻写真は全て福岡市博物館提供

7. 紺本著色不動明王二童子像 1幅（有形文化財／絵画）

8. 紺本著色愛染明王像 1幅（有形文化財／絵画）

松見山入定寺は福岡市博多区の通称蓮池に所在する真言宗寺院である。開山は、摂津国伊丹の出身で、福岡藩の重臣、黒田（加藤）一成の親族であったとされる僧、唯心院圓心という。圓心は慶長年間に縁故を頼って筑前へ下向、現在の入定寺の境内に存在した自性院という小庵に居住したと伝えられている。慶長13年（1608）年に圓心は27日の断食の後に入定、その遺跡に元和7年（1621）年に黒田長政によって寺院が建立されたのが入定寺の草創となる。同宗派の東長寺とは関係が深く、黒田忠之の代には当寺も黒田家の祈願所に指定された。三奈木黒田家の一族も歴代当寺を信仰し、現在寺には宝永6年（1709）年に黒田一利が寄進し

た圓心入定図が残されている。また境内には平成17年度に福岡市有形文化財に指定された銅像弘法大師坐像が存在する。平成17（2005）年の福岡西方沖地震の際、所蔵者から福岡市教育委員会へ被害状況の確認依頼があり、合わせて所蔵絵画類についても調査が行われた。これにより、今回の指定対象を含む絵画類が初めて確認された。

不動明王二童子像は縦104.0cm、横46.7cm。像容は青黒い体色の不動明王が右手に俱利伽羅剣を左手に索条を持し、火焔を背負って海中の岩坐に立つ。容貌は左肩に弁髪を垂らし、左目を半眼として右目を大きく見開き、口蓋左端には牙を覗かせるという、不動十九觀に基づいた所謂圓心様の系統に属する画像である。圓心様の通例に従い、本像も矜羯羅・制多迦の二童子を從える三尊形式をとる。不動の衣文に肥瘦線を用い、また背景の火焔を描く技法や写実性に鎌倉仏画の特徴をよく備えるが、画像の作成年代は鎌倉末から南北朝期にかけての14世紀中期に想定される。



不動明王二童子像

掛幅裏面の貼紙墨書銘によれば、本像は本來、高野山正智院の重宝で弘法大師作との伝承があったが、寛永10（1633）年8月に正智院の大檀主である福岡藩主黒田家の祈祷のために、院主応運法印から、福岡吉祥院の永運法印へ授与された。正智院は12世紀初期に創建されたという高野山の有力な院家の一つで、近世には黒田家の高野山における菩提所となった寺院である。また吉祥院は、地誌等によれば、開祖尊秀法印が筑前入部以前から黒田長政の側近くに仕える真言僧で、慶長13年の警固大明神社創建に際しては同社の別当職に任せられ、住坊を吉祥院と称したとされる。吉祥院は明治元年に廃寺となり、同寺に所蔵されていた仏教関連の文化財も散逸した。本像を含め、これらの文化財が入定寺へ移された経緯は不明であるが、宗派の繋がりを背景にそれぞれの真言宗寺院の重宝の一部が入定寺へ移管された可能性が大きい。

愛染明王像は縦104.1cm、横57.7cm。像容は獅子冠を戴き、髪を逆立て口を大きく開いて憤怒の相を浮かべた愛染明王が、日輪の中、蓮台上に結跏趺坐する。通例通り本像の明王も一面三目六臂の姿に描かれ、左右の第一手に金剛杵と金剛鉢を、左右の第二手に弓と矢を、右の第三手に蓮花茎を保持し、左の第三手は額の高さで掌を上に軽く握る形をとるが、持物は確認することが出来ない。蓮台の下方は宝瓶が支え、その表面には雲龍紋が、宝瓶の左右には瓶から溢れ出した宝珠が火焔に包まれて散る様が描かれている。鎌倉仏画の技法を用いるが、全体としてやや定型化した標準的な圖様の愛染明王像であり、作成年代は不動明王二童子像よりやや下がり、14世紀後期と考えられる。

不動明王二童子像と同じく、本像の伝来についても掛幅裏面貼紙に墨書きで記載されている。それによれば本像は元来高野山正智院の什物で、詫摩派の絵仏師の作という伝承があった。しかし宝曆12（1762）年4月に正智院主凌空から福岡吉祥院へ寄附された。貼紙墨書き銘に見える凌空（明和3（1766）年寂）は正智院三十六代の院主で、「高野山文書」所収史料等からその存在を確認することが出来る。本図も不動明王二童子像と同様に、明治元年の吉祥院廃寺以降に入定寺へ移されたと考えられる。

これら2幅の仏画は、市域に所在する仏画類と比較しても古い時期の作例に属し、その筆法や画風において鎌倉仏画の特徴をよく示す点で貴重な密教絵画である。



愛染明王像

9. 麻生文書 229点（有形文化財／古文書）

麻生文書は鎌倉時代以来、戦国時代に至るまで筑前国遠賀郡（現在の北九州市西部から遠賀川流域に至る一帯）を拠点に在地領主として活動し、江戸時代には福岡藩に仕官して福岡へと来住した麻生氏相伝の古文書である。文書は巻子2本、文書写を収録した巻紙など、総数は229点を数える。これらは、19世紀の段階で福岡藩の国学者により調査や原本作成が行われていたことが知られる。近代以降も、官営修史事業や九州帝國大学法文学部の長沼賢海教授による調査、戦後の行政機関による調査が進められ、「福岡県史」や「福岡市史」に内容が収録されている。

麻生氏の歴史を反映し、中世文書には北条得宗家から歴代の足利将軍、少弐氏・大内氏・大友氏・毛利氏等の大名、さらには豊臣秀吉から黒田氏に至るまでの発給文書が通史的に含まれる。近世文書には歴代福岡藩主の知行宛行状を始めとして、初期の福岡藩主やその一門、藩士の書状が多く含まれる。また近世初期の普請関係史料や近世段階で行われた麻生家の由緒調査や系譜編纂に関連する史料も一連のまとまりとして注目される。巻子1・2には鎌倉期から戦国期に至るまでの主要な中世文書がほぼ全て収録され、その下限は天文13（1544）年の大内義隆安堵状である。巻紙1・2（本来は一巻）には鎌倉期から豊臣期に至る文書の多くが書写され、一部は巻子等に原文書が残されているが、既に原本が失われた文書の写も多く収録されており重要な文書である。

麻生文書の歴史的価値は既に近世から多くの研究者に認識され、繰り返し調査や翻刻刊行が行われてきた。文書の内容は、中世部分においては北部九州における在地武士の領主的展開や南北朝から戦国時代にかけての筑前豊前地方の政治的状況を検討する上で極めて有用であり、近世・近代文書も福岡藩士の家に相伝された文書の一例として意義がある。何よりも中世の筑前国の在地領主の家が近世も福岡藩士として存続し、それぞれの時期の麻生氏の動向を反映する文書が通史的に継承保存されて一つの文書群を形成している点で貴重である。

である。



目録No.1／北条時頼袖判下文



目録No.4／足利尊氏状

※古文書写真は全て福岡市史編さん室提供

10. 橋本八幡宮のイヌマキ群落 1件 (天然記念物／植物)

イヌマキは、マキ科マキ属の常緑針葉樹で、暖地の常緑広葉樹林中に生育する。関東地方南部以西の本州、四国、九州、南西諸島に分布し、中国・台湾にも見られる。樹皮は灰白色、葉は広線形で革質、扁平で主脈がはっきりしている。イヌマキの和名は、スギの古名であるマキに、より劣るという意味のイヌを付けたものとする説、紀伊半島や四国ではコウヤマキを本木と呼ぶことから、これに対する名称とする説がある。成長が遅いので仕立てるのに年月を要し、庭園木としては高級品である。屋敷林や畠の防風林としても栽培される。強い耐蟻性を持ち、シロアリに強いところから、沖縄では高級建築材として使用されている。

橋本八幡宮のイヌマキ群落は、八幡宮境内 (4424.76m²) の全域に分布するもので、ご神木とされる夫婦マキを最大として、232本が群生している（2010年11月・12月調査）。この内、幹の直径が30cmを越えるものは161本（50cm以上は34本）、樹高が20mを上回るものは49本を数える（目視による樹高測定を含む）。

ご神木である男樁は、境内の説明板によれば樹高20m、幹周り3.43m、女樁は樹高20m、幹周り3mで、イヌマキとしてはそれぞれ福岡県下第7位と第13位、全国では第111位と第215位の巨樹である。樹齢は400～500年とされる。

なお、境内は橋本緑地保全地区 (0.4ha) に指定され、イヌマキ・クスノキなど30本が保存樹に指定されている（内イヌマキは13本）。

橋本八幡宮は、社伝によれば、文明十四年（1482）に柴田歳人佐繁信によって建立されたものとされる。近世になると、橋本村には黒田家の茶屋・御成所がおかれて、寛永五年（1628）五月十六日、三代藩主黒田光之がこの地で誕生した。光之は幼時を橋本で過ごした後、黒田美作に預けられ、那珂郡春日村（現春日市内）で養育され、寛永八年（1631）に江戸に上り、承応三年（1654）三代藩主となった。光之は、寛文四年（1664）には野方・羽根戸の山林三万三千坪を橋本八幡宮に寄進したが、寛文六年（1666）には八幡宮を西新町の紅葉松原に遷し紅葉八幡宮を創建したため、里民がその跡に社殿をたて道拝所とした。その後、八幡宮の神殿と拝殿等は、地元氏子らによって改築・再建がなされてきた。

橋本八幡宮のイヌマキ群落は、全国有数の規模であると同時に、福岡市営地下鉄橋本駅の開業と外環状線の開通に伴う再開発で急速に都市化しつつある環境にあって、静かで心地よい空間を作り出している。境内

は氏子によって常に清掃され、下草・雑木等もほとんど自生せず、管理が行き届いている。推定される樹齢からみれば、創建の伝承に言う15世紀後半頃に遡る可能性を持つ樹木もあり、地域の歴史の中ではぐくまれてきた社叢といえる。



横本八幡宮社叢遠景



横本八幡宮社殿



横本八幡宮



イヌマキ(男根)

11. 長垂のリチウムベグマタイト鉱物標本 552点（天然記念物／鉱物）

ベグマタイト (Pegmatite) は巨晶花崗岩ともいい、花崗岩とほぼ同じ鉱物組成で石英、正長石、雲母などから成るが、結晶の粒度が著しく粗い。マグマが固結する最終段階で、既に固結した部分の隙間や周囲の岩石中の空間において、残液や热水溶液が自由に結晶を成長させた結果形成されたものと考えられている。その成因から、稀元素を含む珍しい鉱物を産出する場合が多い。

福岡市西区長垂は県下でも有数のベグマタイト岩脈として、昭和9（1934）年に国の天然記念物に指定されている。この岩脈は、稀元素であるリチウムを多く含んでいる特徴があり、戦前は、九州における代表的なリチウム鉱山として、海軍直営による採掘が進められた。また、明治期の鉄道敷設、その後、昭和56（1981）年の筑肥線新トンネル掘削工事でも、大規模な掘削が行われた。

長垂で産出する鉱物は、民間の鉱物研究会である福岡石の会によって収集が行われ、能古博物館に寄贈された標本311点は、平成18（2006）年に福岡市の天然記念物として指定された。

平成21（2009）年4月、新たに福岡石の会元会長の矢野正一氏が保管していた多量の鉱物標本が、福岡市少年科学文化会館に寄贈されたが、その中には長垂で採集された552点が含まれていた。これらは専門家による分類整理が進められ、その内容が一覧化されている。

内訳は、最も多いのが紅電気石（63点）。続いてマンガノタンタル石（36点）、クーク石（35点）、マイクロ石（34点）、モンブラン石（25点）、モンモリロン石、鱗雲母、鱗灰ウラン石（各22点）、泡蒼鉛（19点）が続く。確認された鉱物の種類は68種に及び、前回指定となったものを上回るとともに、今回の標本にある磁鉄鉱や安タンタル石、フェルグソン石、泡蒼鉛、モナズ石などは、平成18年指定の標本群に含まれていないものである。また、長垂で初めて発見されたアンプリゴ石、ペタル石、マイクロ石、マンガノコルンブ石、鉄タンタル石、蒼鉛タンタル石、ポルクス石、モンブラン石が全て揃っており、この内、アンプリゴ石、ペタル石、マンガノコルンブ石、蒼鉛タンタル石は、我が国では長垂にしかない貴重な鉱物とされる。

福岡県内で産出する鉱物は240種類ほどあると考えられているが、今回指定とする標本には本県産出鉱物の3割近くが含まれていることになる。本資料は長垂における鉱物の多様性を如実に表すものであり、貴重な種類の鉱物も含まれている。採取地が特定できる資料としても学術的価値が高い。



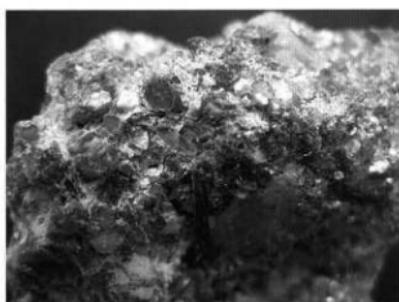
鉱物標本No.1／レッドトーチマイト



鉱物標本No.5／レッドトーチマイト



鉱物標本No.8／アンプリゴ石



鉱物標本No.541／泡ケイタ

報告書抄録

ふりがな 書名	ふくおかしまいぞうぶんかざいねんぽう 福岡市埋蔵文化調査年報						
編書名	平成22(2010)年度版						
巻次	25						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	宮井善朗						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1						
発行年月日	平成23年10月31日						
ふりがな 所 在 地 名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東經	調査面積 (m ²)	調査原因	
井相田E遺跡(第1次)	はかたくいやただ 博多区井相田3丁目8-1外	40132	2881	33-33-3	130-28-0 2010.4.23	360.0	記録保存
五十川遺跡(第19次)	みなみこじっかわ 南区五十川2丁目281-6	40134	88	33-33-34	130-26-20 2010.4.27	36.0	記録保存
クエゾノ遺跡(第3次)	さわらこのけ 早良区野茶5丁目66-6	40137	269	33-32-16	130-21-9 2010.9.22	46.0	記録保存
片江B遺跡(第4次)	じょうなんくわたえ 城南区片江1丁目1020-3, 1026-3	40136	207	33-32-56	133-22-34 2010.10.29~ 2010.11.19	75.0	記録保存
南八幡遺跡(第18次)	はかたなんぱん 博多区元町1丁目7-1	40132	51	33-32-34	130-27-41 2011.3.1~ 2011.3.4	148.0	記録保存
堅船遺跡(第11次)	はかた【かねふね】 博多区堅船3丁目573-1	40132	122	33-35-58	130-25-23 2011.3.7~ 2011.3.8	39.0	記録保存

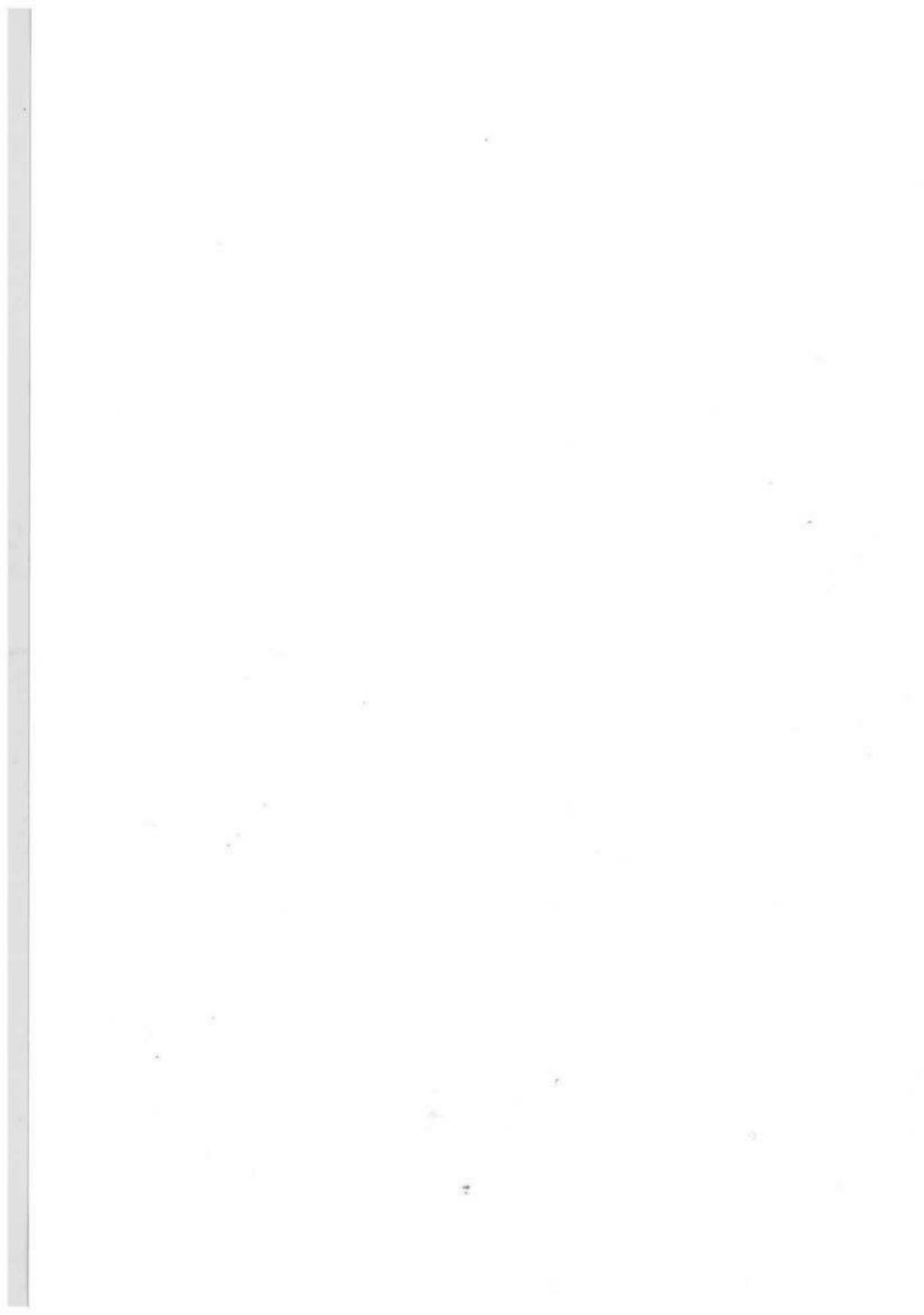
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井相田E遺跡	集落	古代/中世	溝	土師器+須恵器+瓦+黒曜石 洞片	官道間違構
五十川遺跡	集落	近世	溝+柱穴	陶器+組器+須恵器+弥生土 器	近世区画溝
クエゾノ遺跡	集落	古墳/古代/中世	溝+土坑+柱穴	土師器+須恵器+陶磁器+鐵 鋤	2面の追構面
片江B遺跡	集落	中世	溝+柱穴	土師器	銀石を持つ柱穴
南八幡遺跡	集落	古代	柱穴	土師器+須恵器	集落縁辺部の谷確認
堅船遺跡	集落	古墳/古代	溝+土坑+柱穴	土師器+須恵器+瓦	古代公的施設の一部

福岡市埋蔵文化財年報
Vol.25
— 平成22(2010)年度版 —

発行日 平成23年10月31日

編集・発行 福岡市教育委員会文化財部
埋蔵文化財第1課
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 大野印刷株式会社
福岡市博多区桜田2-2-65
TEL(092)414-1515



THE ANNUAL REPORT
OF
THE BURIED CULTURAL RELICS OF FUKUOKA CITY
VOLUME 25



THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
OCTOBER 2011
JAPAN